

と やまじょう
富山城跡発掘調査報告書

- 総曲輪通り南地区第一種市街地再開発事業に伴う富山城下町の発掘調査報告 -

2006

総曲輪通り南地区市街地再開発組合
富 山 市 教 育 委 員 会

『富山城跡発掘調査報告書(2006.12)』正誤表

頁	行	誤	正
例言	10	日本海航測株式会社株式会社	日本海航測株式会社
3	4	侵食	浸食
4	第2図	68杉坂古墳	68杉坂古墳群
6	26	地下式	半地下式
13	8	掘調査	発掘調査
23	3	SK10(第2・13図)	SK10(第12・13図)
42	1	絆密	緻密
53	1	撲り目施し	撒り目を施し
55	33	鰐宰	鰐津
59	8	指頭の圧縮	指頭の圧痕
61	27	瘡上	壠状
65	18	赤色が82点、	赤色が5点、
65	18	内面黒色で外面赤色が5点である。	内面赤色で外面黒色が82点である。
73	12	1085cm	10.85cm
113	第66図	SK12(498)	SK52(498)
116	23	ついては、さらに	(ついては、さらに
142	19	⑦膨らんだ歯部により、	膨らんだ歯部により、
144	22	産地別構成比率・器種別構成比率・ 産地別構成比率	産地別構成比率・器種別構成比率・ 産地別器種構成比率
152	29	(SD465・466・467)において	(SD465・466・467)において
153	22	表に表した	表にした
157	13	特定できるた	特定できた
第VI章 全体	表1	表13	
	表2	表14	
	表3	表15	
	表4	表16	
	図1	第68図	
	図2	第69図	

富山城跡発掘調査報告書

- 総曲輪通り南地区第一種市街地再開発事業に伴う富山城下町の発掘調査報告 -

2006

**総曲輪通り南地区市街地再開発組合
富山市教育委員会**

ごあいさつ

総曲輪通り南地区第一種市街地再開発事業は、富山市の中心市街地活性化の起爆剤となるにふさわしい都市型商業施設の整備を目指し、都市型百貨店と専門店との複合により中心商店街の中核として既存商店街と一体となった商業集積を実現させる事業であります。

又、隣接の大型駐車場を主体とする西町・総曲輪地区再開発ビル、及び両街区をつなぐまちのオアシスとしてのグランドプラザ整備により、利便性の高い、魅力的な商業環境の提供を目指すものであります。

再開発ビルによって新しく生まれ変わるこの地は、古くから物資や文化の交流の道として重要な役割を果たしてきた神通川の流域に築かれた富山城の城下町として戦国時代以来越中の中心地として栄えてきた地域であります。

このたび総曲輪通り南地区市街地再開発事業の建設工事にあたり、この地より先人たちが育んできた貴重な文化遺産が数多く発掘されたことは、我々地権者にとりましても誠に感慨深いものがあります。

この歴史ある地に新しく誕生する再開発ビルが、県都の中心市街地に魅力と活力のあるまちづくりを推進する富山市の新しい顔となり、活気に満ちた賑わいのある中心商業地としてよりいっそうの発展に寄与することを切に願っております。

平成18年12月

総曲輪通り南地区市街地再開発組合
理事長 森田 明

序

先人たちが育んできた貴重な文化財は、本市が歩んできた歴史を知るためのかけがえのない遺産であります。これらを保護し、未来へ継承していくことは、現代に生きる私たちが果たさなければならない責務と考えております。

現在富山市には1,000箇所を越える数多くの遺跡が確認されております。中でも、神通川縁に築かれた富山城とその城下町は、戦国時代以来越中の中心地として佐々成政や加賀前田氏が整備し、富山藩が継承して県都の礎となってきた遺跡であります。

このたび、総曲輪通り南地区市街地再開発事業に伴い、富山城下町の中心部における発掘調査を実施しましたところ、江戸時代初期から幕末までの富山藩家臣屋敷や町屋に関わる各種の遺構を確認しました。特に武家屋敷の遺構は、複数の城下町絵図に描かれた地割とよく一致し、また実在した家臣名を記した木札が出土するなど、武家屋敷の変遷が歴史資料の記すとおりに把握されたことは、富山藩や城下町の歴史を明らかにする上で、たいへん貴重な学術的成果といえます。

この調査成果をまとめた本書が、私たちの共有財産である埋蔵文化財を理解していただこう上で参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご理解とご協力をいただきました総曲輪通り南地区市街地再開発組合（森田明理事長）をはじめ、関係者の皆様、地元総曲輪地区、富山市都市再生整備課、富山県教育委員会、日本海航測株式会社及び各関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年12月

富山市教育委員会
教育長 吉川 実

例 言

- 1 本書は、富山市総曲輪地内に所在する富山城跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、総曲輪通り南地区市街地再開発組合（理事長 森田明）が施工する総曲輪通り南地区市街地再開発事業に伴う本発掘調査である。調査地は、平成19年秋にオープン予定の富山大和を核とする再開発ビルの敷地内に位置する。
- 3 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で日本海航測株式会社が担当した。
- 4 調査期間 現地調査 平成18年1月16日～平成18年3月1日
出土品整理 平成18年3月6日～平成18年12月25日
- 5 調査は、日本海航測株式会社株式会社 小川幹太・岩崎倫子、
株式会社太陽測地社 藤井秀明が担当した。
- 6 調査及び出土品整理にあたり、次の方々よりご協力・ご助言を賜った。また、地元総曲輪地内のご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略）
河村健史、浦畠奈津子、坂森幹浩、宮田進一、柄木英道、中山由美、
財団法人石川県埋蔵文化財センター、富山市郷土博物館
- 7 自然科学的調査は、土壤分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品樹種判定を株式会社吉田生物研究所に依頼し、その成果を本書に掲載した。
- 8 本書の執筆は、II調査の経緯を富山市教育委員会古川知明が、それ以外を小川、岩崎、藤井が分担して行った。分担箇所については文末に記した。
- 9 本書に添付したCD-ROMには、遺構一覧表、遺物一覧表（xls形式）、下駄分類集計表（xls形式）、木札カード（word形式）、木札赤外線写真（jpg形式）を収録している。
- 10 第Ⅶ章において使用した古絵図は、富山県立図書館所蔵のものを、オルソフォトは、株式会社NTTネオメイト所有のものを転載した。

凡 例

- 1 方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 2 公共座標は世界測地系を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
- 3 遺構表記は以下の記号を用いた。
SD：溝跡 SE：井戸跡 SK：土坑 SP：ピット
- 4 土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」（2004年度版）に準拠している。
- 5 富山城跡は、調査の便宜上A区（A-1・A-2）、B区、C区（C-1・C-2）を設定した。よって報告書もこれらの調査区分に事実報告を行っている。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査の経緯	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査経過	10
第3節 調査日誌抄	11
第Ⅲ章 調査の概要	12
第1節 グリッドの設定	12
第2節 調査の方法	13
第3節 基本層序	13
第Ⅳ章 遺構	19
第1節 調査区の概要	19
第2節 遺構	19
A - 1 区	20
A - 2 区	25
B 区	25
C - 1 区	26
C - 2 区	28
第Ⅴ章 遺物	41
第1節 概要	41
第2節 越中瀬戸 (第27図～第33図)	41
第3節 伊万里 (第34図～第40図)	44
第4節 唐津 (第41図～第43図)	50
第5節 潮戸美濃 (第44図)	53
第6節 土師器 (第45図～第46図)	55
第7節 その他の陶磁器 (第 図～第 図)	55
第8節 羽口 (第47図～第48図)	59
第9節 石製品 (第48図～第49図)	59
第10節 金属製品 (第49図～第50図)	60
第11節 木製品 (第51図～第67図)	61
第VI章 自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)
1. はじめに	115
2. 試料	115
3. 分析方法	115
4. 結果	117
5. 考察	120

第Ⅷ章 総括	122
第1節 遺跡の構造と性格	122
第2節 絵図からみた調査区	126
第3節 板絵の内容について	133
第4節 主要遺構から出土した下駄の形態分類	135
第5節 主要遺構から出土した陶磁器の組成	144
第6節 主要遺構から出土した越中瀬戸皿の形態分類	150
第7節 富山城下町遺跡調査の意義	157
引用・参考文献	159

図版目次

第1図 富山平野の地形	2
第2図 周辺の遺跡分布図	4
第3図 グリッド設定図 (S=1/2,000)	12
第4図 調査区割模式図	13
第5図 A-1区基本層序図	13
第6図 A-2区基本層序図 (①)	14
第7図 A-2区基本層序図 (②)	14
第8図 B区基本層序図 (③)	15
第9図 C-1区基本層序図 (④、⑤)	15
第10図 C-2区基本層序図 (⑥)	16
第11図 C-2区基本層序図 (⑦)	16
第12図 調査区全体図	17.18
第13図 A区全体図	21
第14図 B区全体図	27
第15図 C区全体図	29
第16図 A区遺構 (1) 石組み水路・SD79平面図	30
第17図 A区遺構 (2) 石組み水路・SD79断面図	31
第18図 A区遺構 (3) 石組み水路・SD79	32
第19図 A区遺構 (4) SD01	33
第20図 A-1区遺構 (1)	34
第21図 A-1区遺構 (2)	35
第22図 A-1区遺構 (3)	36
第23図 B区遺構	37
第24図 C-1区遺構	38
第25図 C-2区遺構 (1) SD08	39
第26図 C-2区遺構 (2)	40
第27図 越中瀬戸 皿 (1)	74
第28図 越中瀬戸 皿 (2)	75
第29図 越中瀬戸 皿 (3)	76
第30図 越中瀬戸 碗・壺	77
第31図 越中瀬戸 建水・水指	78
第32図 越中瀬戸 捶鉢	79

第33図	越中瀬戸 その他	80
第34図	伊万里 皿 (1)	81
第35図	伊万里 皿 (2)	82
第36図	伊万里 皿 (3)	83
第37図	伊万里 碗 (1)	84
第38図	伊万里 碗 (2)	85
第39図	伊万里 碗、猪口	86
第40図	伊万里 その他	87
第41図	唐津 碗、皿	88
第42図	唐津 鉢、その他	89
第43図	唐津 描鉢	90
第44図	瀬戸美濃	91
第45図	その他陶磁器	92
第46図	その他陶磁器 その他	93
第47図	羽口	94
第48図	羽口・硯	95
第49図	石製品・金属製品	96
第50図	金属製品	97
第51図	木製品 下駄 (1)	98
第52図	木製品 下駄 (2)	99
第53図	木製品 漆器 (1)	100
第54図	木製品 漆器 (2)	101
第55図	木製品 木札 (1)	102
第56図	木製品 木札 (2)	103
第57図	木製品 木札 (3)	104
第58図	木製品 木札 (4)	105
第59図	木製品 木札 (5)	106
第60図	木製品 木札 (6)	107
第61図	木製品 木札 (7)	108
第62図	木製品 木札 (8)	109
第63図	木製品 木札 (9)	110
第64図	木製品 その他の木製品 (1)	111
第65図	木製品 その他の木製品 (2)	112
第66図	木製品 その他の木製品 (3)	113
第67図	木製品 その他の木製品 (4)	114
第68図	重鉛鉱物組成	118
第69図	重鉛鉱物・珪藻化石	121
第70図	本調査区出土遺物の様相	123.124
第71図	「万治年間富山旧市街図」万治年間 (1658~1661年) 頃	129
第72図	『御城内外御焼失御絵図面』天保年間 (1830~44年)	129
第73図	『寛文六年十月御測理富山絵図』寛文六年 (1666年)	131
第74図	『越中富山御城下絵図』安政元年 (1854年)	131
第75図	天神坂絵の復元試案	134
第76図	下駄歯部の形状	141
第77図	下駄歯部と台部の固定方法	142
第78図	下駄歯部の製造過程	143

第79図	口縁部の形状	150
第80図	底部の形状	150
第81図	指定施釉方法	151

表目次

第1表	木札遺構別出土点数データ	66
第2表	木札印字方法別データ	66
第3表	木札器種別出土点数	66
第4表	木札分類別出土点数データ	66
第5表	木札遺構別分類点数データ (SK10)	67
第6表	木札遺構別分類点数データ (SK11)	67
第7表	木札遺構別分類点数データ (SK12)	67
第8表	木札遺構別分類点数データ (SD08)	67
第9表	木札遺構別分類点数データ (サブトレンチ)	67
第10表	木札器種別印字方法	68
第11表	木札印字方法と内容	68
第12表	木札観察表	69
第13表	重軽鉱物分析結果	118
第14表	粒度分析結果	119
第15表	粒度組成解析結果	119
第16表	土壤理化学分析結果	119
第17表	下駄の比較検討表	140
第18表	石組水路にみる陶磁器の構成比率	147
第19表	SD08・79にみる陶磁器の構成比率	148
第20表	SK10・11にみる陶磁器の構成比率	149
第21表	越中瀬戸の構成比率 (底部形状・施納方法・釉薬の種類)	155
第22表	越中瀬戸の構成比率 (口径・口縁部形状)	156

写真図版目次

写真図版 1	A区全景	
写真図版 2	A区遺構 (1)	
写真図版 3	A区遺構 (2)	
写真図版 4	A区遺構 (3)	
写真図版 5	B区全景 遺構 (1)	
写真図版 6	C区全景	
写真図版 7	C区遺構 (1)	
写真図版 8	C区遺構 (2)	
写真図版 9	越中瀬戸 盆 (1)	
写真図版10	越中瀬戸 盆 (2)	
写真図版11	越中瀬戸 盆 (3)	
写真図版12	越中瀬戸 盆 (4)	
写真図版13	越中瀬戸 盆 (5) 碗・壺	

- 写真図版14 越中瀬戸 壺・建水
写真図版15 越中瀬戸 楼鉢
写真図版16 越中瀬戸 その他
写真図版17 伊万里 盆(1)
写真図版18 伊万里 盆(2)
写真図版19 伊万里 盆(3)
写真図版20 伊万里 盆(4)
写真図版21 伊万里 盆(5)・碗(1)
写真図版22 伊万里 碗(2)
写真図版23 伊万里 碗(3)
写真図版24 伊万里 碗(4)
写真図版25 伊万里 碗(5)
写真図版26 伊万里 猪口・その他
写真図版27 伊万里 その他・唐津 碗・皿
写真図版28 唐津 碗・皿・鉢
写真図版29 唐津・その他
写真図版30 唐津(描鉢)・瀬戸美濃焼(1)
写真図版31 瀬戸美濃(2)
写真図版32 瀬戸美濃(3)・上師器
写真図版33 その他陶磁器(1)
写真図版34 その他陶磁器(2)
写真図版35 その他陶磁器(3)
写真図版36 その他陶磁器・その他
写真図版37 羽口
写真図版38 便・石製品
写真図版39 石製品・金属製品(1)
写真図版40 金属製品(2)
写真図版41 木製品 下駄(1)
写真図版42 木製品 下駄(2)
写真図版43 木製品 下駄(3)・漆器(1)
写真図版44 木製品 漆器(2)
写真図版45 木製品 漆器(3)
写真図版46 木製品 漆器(4)
写真図版47 木製品 漆器(5)
写真図版48 木製品 木札(1)
写真図版49 木製品 木札(2)
写真図版50 木製品 木札(3)
写真図版51 木製品 木札(4)
写真図版52 木製品 木札(5)
写真図版53 木製品 木札(6)・その他(1)
写真図版54 木製品 その他(2)
写真図版55 木製品 その他(3)

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

富山城跡は、富山県富山市総曲輪に所在する。富山市は富山県のほぼ中央から南東部分までを占め、急峻な山々が連なる立山連峰と、日本海唯一の内湾面積を持つ富山湾に囲まれている。西部になだらかな呉羽山丘陵が横たわる他は、神通川・常願寺川などの急流河川によって形成された沖積平野の富山平野が広がる。平成8年には市に指定され、平成17年4月には、富山市・大沢野町・大山町・八尾町・婦中町・山田村・細入村が合併し、新「富山市」となった。東西60.7km、南北43.8kmを測り、面積は1,241.85km²である。人口は418,710人（平成17年10月現在）、世帯数は145,821世帯（平成12年国勢調査）である。

富山平野と呉羽山丘陵の形成

平野は、更新世に形成された台地（洪積台地）と、完新世に形成された低地（沖積平野）に分けられ富山県内の地形・地質は、東部及び南部の標高の高い山地を中心に古い岩石が分布しており、富山平野及び富山湾に向うに従って新しい地質となる傾向がある。

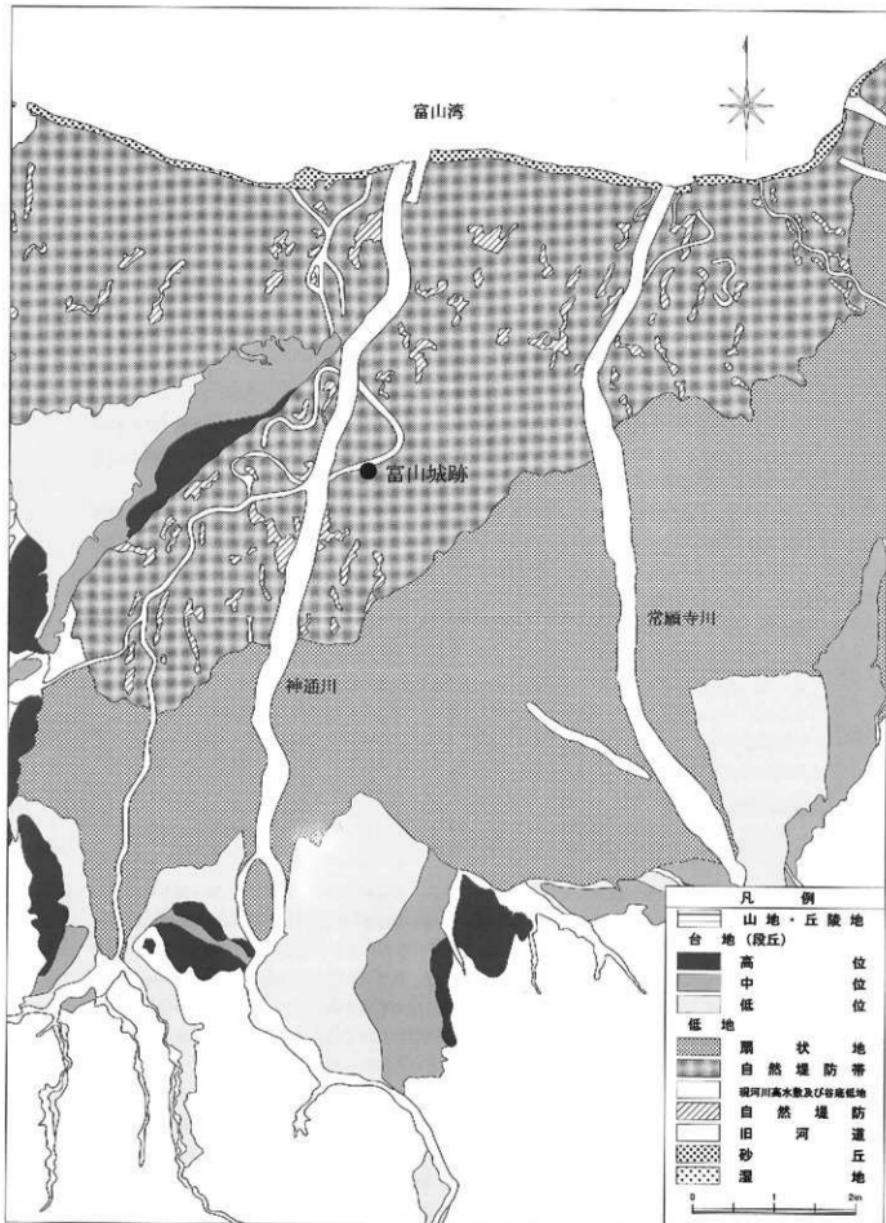
富山平野と呉羽山丘陵一帯は、第四紀更新世前期（80万年前）までは海に覆われており、海成の砂層が堆積していた。第四紀は一般に氷河時代といわれる時期であり、海退に伴っていくつかの堆積盆地が形成された。その一つが富山平野の原形で、さらにそこに扇状地性の呉羽山疊層が堆積した。呉羽山疊層堆積後、激しい断層活動（石動変動）があり、呉羽断層の東は沈降して富山平野（狭義）を形成し、西は隆起して呉羽山丘陵になった。呉羽山丘陵は北北東-南南西に伸び、長さ60km、最大幅は20km、高さは城山で145.3m、呉羽山で76mを測る。東側は崖状であり、北北東に直線的に延びている。石動変動により特に東部で激しい隆起が生じ、飛騨山脈が形成された。それに伴って浸食が進み大量の土砂が富山平野などの扇状地を拡大させた。川は今までの扇状地を浸食してその下位に新しい扇状地を形成し、更新世後期（50～2万年前）には古い扇状地は台地（隆起扇状地）となった。

富山平野の地形区分

平野は、更新世に形成された台地（洪積台地）と、完新世に形成された低地（沖積平野）に分けられる。石動変動により形成された古い扇状地は台地（隆起扇状地）となっており、大きく高位段丘、中位段丘、低位段丘に分けることができる。高位段丘の形成年代は50～15万年前、中位段丘は15～5万年前、低位段丘は2万年前である。高位段丘は立山山脈の近くでは標高200～400m付近に分布しており、黒部市の十二貫野や滑川市の東福寺野が典型的で東福寺疊層と呼ばれる。中位段丘は呉羽山丘陵に見られる鉢茶屋丘層、呉羽火碎層、北代砂層がそれである。低位段丘は神通川・常願寺川の扇頂に発達する隆起扇状地の形態を成しており、低地（沖積平野）に末端が覆われる。低地は扇状地・自然堤防・三角州等に分けられるが、富山平野は扇状地と自然堤防が主体であり、河口部に三角州が見られないという特色を持つ。

富山県は呉羽山丘陵によって呉東と呉西に分けられる。呉東の平野は黒部川、片貝川、早月川、常願寺川、神通川の各扇状地とその自然堤防帯から形成され、黒部平野、新川平野、富山平野（狭義）に分かれる。呉西の平野は砺波平野、射水平野、水見平野などがある。

富山城跡は狭義の富山平野に位置する。狭義の富山平野は、常願寺川と神通川の扇状地であるが、常願寺川からの土砂が大部分を形成している。常願寺川扇状地の東側は上段に旧扇状地が



第1図 富山平野の地形 (S=1/60,000)

段丘化した台地があり、その下位に下段の扇状地がある。西側は、標高160m余の旧大山町上滝付近を扇頂として広大な扇状地が岩瀬まで広がっている。神通川扇状地は東側に砂礫台地となっている船岡野の旧扇状地があり、その下位に大沢野の隆起した扇状地がある。神通川はこの大沢野扇状地を浸食して笹津段丘や春日段丘をつくっている。さらに深く侵食して下流の鳴子橋付近を扇頂として左岸では婦中町方向に、右岸では富山市神保地区方向に新扇状地を形成している。支流である井田川が狭い流域平野をつくって神通川に合流しているが、神通川下流は、常願寺川新扇状地の発達のため押しやられ、本県最長の河川でありながら呉羽山丘陵との間で狭い平野をつくっているのみである。従って、旧富山市の地下水の大部分は常願寺川から伏流した水である。

神通川河道の変遷

現在、富山城跡の約800m西方には神通川が南北に流れている。神通川は、岐阜県飛騨地方の川上岳（かおれだけ：標高1,625m）を源流とし、神通峠などの山峠の地から富山平野に至るまで河岸段丘を形成している。全長約120km、流域面積は約2,720km²である。現在はほぼ真っ直ぐ北流するが、明治34（1901）年から明治36（1903）年にかけて行われた直線化工事以前は富山城の北側を東から西へ流れ、大きく蛇行していた。江戸時代以前の神通川本流は、現在の富山城北側を流れる松川や、呉羽山丘陵東麓を流れる井田川であったとみられている。富山城北側の舟橋跡の常夜燈の位置から江戸期における神通川の川幅は約190mと推定されている。

調査区は、富山城跡の南東端に位置する。旧神通川と馳川の合流点の西にあり、標高10mの自然堤防上に立地する。神通川の支流である馳川は富山市辰巳2丁目に至り、自然流路が意図的に変えられて南北方向に流れる。以後かつての神通川である松川と合流する木町付近までは南北・東西方向を示している。このことは辰巳町以西が江戸期あるいはそれ以前に町屋形成もしくは城下町整備に組み込まれた証となると理解される。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境（第2図）

遺跡は、各時代を通して呉羽山丘陵周辺に集中する傾向を見せる。以下、呉羽山丘陵と富山城跡周辺の遺跡について時代ごとに詳細を述べる。

旧石器時代

呉羽山丘陵の南西に境野扇状地があり、扇尖部を中心として平岡・境野新・御坊山・北押川の各遺跡や杉谷遺跡群など、旧石器時代後期の遺跡が分布している。石器は各遺跡とも少なく、一時的に使用した場所ではあっても長期にわたる生活は行われなかつたと考えられている。境野新遺跡ではナイフ形石器・剥片・石核が出土し、この地で石器を製作し生活を営んでいたものと想定される。ナイフ形石器は東山型と呼ばれる東北系のナイフ形石器の加工技術で作られているが、安山岩を主として用い横長剥片を作り出す瀬戸内系の石器も出土しており、東西の石器文化を持つ人々の往来がうかがえる。

呉羽山丘陵上には北代・追分茶屋・二番金草・古沢の各遺跡が存在する。呉羽山丘陵の南東側は急斜面となっているのに対し、北西側の傾斜は緩やかであり、各遺跡も北西側に所在する。追分茶屋遺跡の台形石器は、単独発見ながら県下では類例の少ない典型的な石器である。二番金草遺跡からは使用痕のある剥片が発見されているが、石器の数は少ない。



No.	遺跡名稱	No.	遺跡名稱	No.	遺跡名稱	No.	遺跡名稱	No.	遺跡名稱
1	富山城跡	23	阿字原遺跡	45	北代平野	67	北代平野	89	鶴羽町大谷Ⅱ
2	中世宮山城推定地	24	北代村寺Ⅰ	45	北代村田湖	88	多坂古漢	90	鶴羽町長谷
3	柄宮山城推定地	25	北代村寺Ⅱ	47	鶴羽町田町	69	長瀧寺	91	茶屋町西田
4	八町Ⅰ	26	北代村寺Ⅲ	48	北代シカグリ	70	鶴羽山古墳	92	茶屋町西田Ⅰ
5	八町ⅣC	27	北代村寺Ⅴ	49	北代村口	71	鶴羽山横穴墓	93	茶屋町南日
6	八町ⅤB	28	北代加茂下Ⅱ	50	北代中尾	72	安養坊内山古墳	94	鶴羽町鷲見跡
7	百塚古墳C	29	北代加茂下Ⅰ	51	鶴羽シカグリ	73	中町城跡Ⅰ	95	中町城跡Ⅰ
8	百塚古墳B	30	北代中谷	52	鶴羽小字植	74	茶屋町東	96	中町城跡Ⅱ
9	百塚古墳	31	北代中谷下Ⅲ	53	鶴羽奥野番	75	茶屋町山下	97	寺町大平下
10	百塚生吉社	32	北代中谷神社	54	鶴羽町中の町	76	北代西山	98	金治山田
11	石碑	33	北代人馬丘	55	茶屋町寺谷Ⅰ	77	茶屋町神山Ⅰ下	99	寺町大平上
12	百塚	34	北代加茂下IV	56	鶴羽一ノ原	78	茶屋町知呂所	100	寺町
13	百塚	35	長岡小学校西	57	鶴羽二ノ原古墳	79	茶屋町涌山	101	大崎城跡
14	八町Ⅰ	36	八町	58	鶴羽丸山	80	光明山御廟	102	吉ヶ島Ⅱ
15	北代中谷Ⅱ	37	八町D	59	高麗新反糞II	81	茶屋涌山古墳群	103	森田
16	虎塚	38	八町A	60	高麗新反糞I	82	茶屋去山古墳群	104	鶴坂寺
17	虎・鹿貝塚	39	八町C	61	圓寺跡	83	足立塚	105	高麗大塚
18	郭子廻塚	40	八町B	62	高麗西山	84	鶴羽モグラ地	106	今泉城跡
19	虎・鹿貝塚	41	長岡新	63	北代西山	85	道分沢の松	107	本郷椎木
20	虎・鹿貝塚	42	長岡杉林	64	鶴町	86	道分系熊野花畠Ⅱ	108	大宮町
21	北代村寺Ⅱ	43	北代東	65	北代西山Ⅱ	87	道分系熊野杉林Ⅱ	109	太田中田Ⅱ
22	茶屋町中田	44	北代	66	北代西山Ⅰ	88	道分系熊野花畠Ⅲ	110	太田中田Ⅰ

第2図 周辺の遺跡分布図

縄文時代

縄文文化は呉羽山丘陵の台地上に始まる。縄文時代草創期に属する押圧縄文土器が北代遺跡と杉谷64遺跡で1点ずつ出土しており、杉谷遺跡では草創期に特徴的な石器である有舌尖頭器が採集されている。これらの遺跡は遺物が少なくキャンプサイト的な場所であったと考えられている。しかし、杉谷64遺跡では、早期から前期にかけて条痕文土器や石錐が多量に出土していることから定住化に向かったことがうかがえる。

前期の代表的な遺跡に媿ヶ森貝塚と小竹貝塚がある。両遺跡は呉羽山丘陵の北端に位置し、共に海拔5mのところにあるが、当時の「海が入り込んでいた」とする説と、「海は海岸部の砂丘で止められ、内陸部はラグーン（潟湖）が広がっていた」とする2説が存在する。

中期になると北陸では遺跡数が増加する傾向があり、それは富山市においても同様で、縄文時代の中でも最多となる。また、縄文土器の器種が増加し、十個や祭祀具も多量に出土する時期でもある。代表的な遺跡に追分茶屋遺跡・北代遺跡がある。北代遺跡は、中期の住居跡が70棟以上、同時期の高床建物が4棟検出されている。中期後葉の中田新式土器を中心にして、香炉様土器、ミニチュア土器、円板状土製品、タカラ貝形土製品、岩版、三角彫刻土製品など中期～晩期の特殊な遺物が出土している。北代遺跡は昭和59年に国の史跡に指定されている。追分茶屋遺跡では、長さ10mの大型住居跡1棟が検出されている。

中期までの集落が、呉羽山丘陵の台地上に集中して形成されているのに対し、後期に入ると扇状地平野部に進出する。前期中葉の温暖期が後期に入ると寒冷化に向い、海水面が下降したことと考えられている。代表的な遺跡に岩瀬天神遺跡があり、海岸線に沿った低地に立地する住居跡として、また、赤彩土器が出土していることで著名である。

晩期の遺跡には、前期からの継続遺跡である古沢遺跡、巨大柱穴遺構がある古沢A遺跡、墓壇や貯藏穴が検出されている古沢B遺跡、杉谷遺跡、杉谷G遺跡、杉谷日遺跡・野下遺跡・富田町遺跡がある。また、丘陵地だけでなく富山市南郊の常願寺川と神通川の扇状地にも任海遺跡・野田遺跡・金尾遺跡・金尾新遺跡・上砂子坂遺跡・小出遺跡・新堀遺跡などの遺跡がある。この沖積低地への進出の増加は、富山市だけでなく県内全域の傾向である。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、調査区周辺では呉羽山丘陵に3遺跡、神通川と常願寺川に挟まれた下流域に分布するものに15遺跡を数える。弥生時代前期の遺跡は点在的であるが、中期から後期になると豊田遺跡・中野遺跡・百塚遺跡・千原崎遺跡・岩瀬天神遺跡・浜黒崎野田遺跡・金尾新遺跡・打出遺跡など神通川・常願寺川流域で遺跡数が急増する。いずれも自然堤防や微高地に立地し、背後の低地には沼澤地が広がっている。昭和46年の国道8号線工事中に発見され発掘調査が行われた農田遺跡では、環濠の可能性がある溝状遺構が検出され、弥生土器、石包丁形石器が出土した。

農田遺跡や浜黒崎野田遺跡で中期中葉の櫛描文土器の出土があり、これらの土器は西日本の影響を受けている。中期後葉に福島県に分布の中心をもつ山草荷・天干山系土器文化が北陸に波及し、これらの土器は富山市では古沢A遺跡や北代遺跡で出土している。後期になると北陸では内面をハラケズリし薄く仕上げる山陰系土器との関連が強くなる。

弥生時代終末期から古墳発生期において、呉羽山丘陵南半の杉谷丘陵では方形・円形の周溝墓群（杉谷A遺跡）が築かれる。周溝墓の副葬品には北九州に源流をもつと思われるガラス小玉や素環頭大刀がある。この周溝墓に隣接して杉谷古墳群が存在し、そのうち杉谷4号墳は、山陰を

中心に分布する四隅突出型墳丘墓である。平成元(1989)年には杉谷4号墳の南方約4.5kmの富崎遺跡でも四隅突出型墳丘墓が発見された。

古墳時代

古墳時代には呉羽山丘陵上に8遺跡、神通川と常願寺川に挟まれた下流域に8遺跡存在する。弥生時代に形成された生活圏がより内陸部に広がる様相が指摘されている(武田2004)。

富山県下で発見された最古の古墳はちょうどよう塚古墳であり、富山市豊田地区に築かれた一辺約20mの古墳発生期の方墳である。この古墳から山陰系の掘四線文系土器の影響を受けた壺形土器が出土しており、山陰地方との交流、文化の伝播があったと見られている。

古墳時代前期は在地系の前方後方墳と畿内の墳形である前方後円墳が混在する。前方後方墳には杉谷古墳群の南西に位置する勘使塚古墳と玉塚古墳が、前方後円墳には呉羽山丘陵の主尾根に位置する呉羽山丘陵No16古墳などがある。

中期から後期にかけて呉羽山丘陵には金屋天神山古墳群第1号墳など、20基を超える円墳が築かれている。その他に、中期の集落跡としては境野新遺跡と古沢A遺跡があり、古沢A遺跡では方形の住居跡が4棟検出されている。

後期後半になると横穴墓が築かれるようになり、呉羽山丘陵には金屋陣横穴墓群と番神山横穴群の二群が形成される。

古代

呉羽山丘陵周辺の遺跡は、これまで呉羽山丘陵上に分布しているものが大半であったが、古代になると氾濫原に古代遺跡が分布するようになる。北代遺跡、古沢A遺跡で住居跡が確認されている。掘立柱建物が普及し、竪穴住居と併存しながら徐々に増加傾向を示す。呉羽小竹堤遺跡は呉羽山丘陵から北に広がる舌状台地にあり、8~10世紀の17棟の竪穴住居と14棟の掘立柱建物跡が検出されている。掘立柱建物跡の多くは2間×3間の規模で、2間×2間のものは台地縁辺に築かれており倉庫と考えられている。鍛冶遺構も存在し農村集落での生産状況が知られる。

登り窯の分布をみると呉羽山丘陵周辺では小竹窯跡、吉作1・2号窯跡、金草1・2・3号窯跡などがあり、古沢、池田、三ノ熊方面にも存在する。金草1号窯跡は、昭和44~45年の発掘調査で、全長10.6m・幅1.6m・高さ1.4mの地下式の登り窯が検出され、7世紀後半のものと考えられている。ほぼ同時代の窯跡として吉作遺跡が挙げられる。昭和46年に発見されたこの窯跡からは多量の生焼けの須恵器が出土している。柄谷南遺跡は、東に呉羽山丘陵、西に射水丘陵を望む水田地帯の中央部に位置する。これまでの調査で、須恵器の窯跡1基と、須恵器と瓦を焼いた窯跡(瓦陶兼業窯)1基を確認した。また數千点に及ぶ瓦類も出土している。遺跡は粘土を探掘し、窯の築造から、土器や瓦を焼成するまでの一連の作業を行う生産工房であったと考えられている。

神通川と常願寺川に挟まれた下流域では23遺跡が新規に形成され、生活圏の獲得というより、占拠時代の生活圏で遺跡の分布が拡がりやや希薄であった部分を密に開拓した耕作地窯窓である(武田2004)。総合運動公園内遺跡群では9~10世紀の掘立柱建物群からなる集落跡が見つかっている。

平成7年に発掘された豊田大塚・中古原遺跡では、人面墨書き土器・人形・刀形木製品などが出土した。祭祀遺跡と見られ、官衙施設との関係が密接であると考えられている。また、この遺跡の周辺に官衙施設と推定されている米田大覚遺跡が存在する。神通川右岸に形成された扇状地の微高地上に立地し、平成7(1995)年に実行した発掘調査では8世紀末から9世紀後半にかけての掘立柱建物跡、竪穴状構造、井戸跡、溝、土坑を検出した。掘立柱建物跡は30棟近くあり、重複

して数回建て直しを行っている。規模や整然とした配置状況、多くの特殊な遺物から農山大塚・中吉原遺跡との関連が示唆されている。

北陸地方は越の国と呼ばれ、それが越前・越中・越後の三国に分割されたのは律令国家が成立する7世紀末と推定される。757年に越中は現在の富山県の範囲となつた。越の国は、北方に「蝦夷」と称されて邊境視された地域と接していたことから大和朝廷にとって重要な地域であったとされている。富山市古倉B遺跡・任海宮山遺跡からも「城長」と墨書きされた土器が出土しており、蝦夷に備えた施設が存在したことが推定されている。

越中の荘園は、史料によってその存在を確認できるものが平安末期までに18箇所存在する（富山市 1987）。このうち富山市周辺の荘園は伊勢神宮弘田御厨と新熊野社領立山外宮がある。比定地はそれぞれ旧富山市北部広田地区、旧富山市太田地区といわれている。

中世

鎌倉時代の越中の守護は北条氏の一族名越氏が、室町時代以後は足利氏の一族畠山氏が歴代任せられた。畠山氏は越中に在国しなかつたため、砺波郡は遊佐氏、新川郡は椎名氏、射水・越後二郡は神保氏が守護代として支配した。

「富山」の地名の初見は、室町時代応永5（1398）年5月3日付吉見詮頼寄進状においてである。また同年12月の畠山基国進行状から、富山郷が太田小次郎という土豪の支配下にあったことが分かる。この地は神通川の下流一帯を指し、その後室町将軍家の所有地となった。足利義教は永享2（1430）年「富山柳町」を上臈に与え、嘉吉3（1443）年義教の側室瑞春院がこの地を京都二院院に寄進している。

富山城を最初に築城したのは、在地豪族の中で有力であった越中守護代神保長職（「能登賀二州志」では水越勝重）と伝える。神保長職による中世富山城築城年代については、諸説あるが天文12（1543）年頃と推定される。神保氏は放生津を拠点に勢力を増し、長職の代に神通川東岸に出城として富山城を築城する。越後長尾氏に属する椎名氏を圧迫する目的の他、越中の東西を横切る街道と飛驒から北上した南北に走る街道が交差する場所に城館を設けることが、経済発展及び防衛上必要不可欠であったためと考えられる。

富山城は天文12（1543）年から17年間は長職の居城であった。城の位置については、城とその城下について描かれた往来物『富山之記』（山田孝謙本）の内容から、星井町以西に存在したとする説と、現在の富山城の位置であったとする2説があった。近年の試掘確認調査の結果、現城址公園に中世富山城が存在した可能性が高くなつた（富山市教委2004、加藤・古川ほか2004）。支配領域は氷見南部から芦崎寺にかけてあり、本城である富山城を中心に支城を各地に設けた。

永禄3（1560）年、上杉謙信の越中侵攻が始まる。神保氏は甲斐の武田信玄とも気脈を通じたが、遂に越後の上杉謙信に攻略される。その後の富山城の変遷を見ると、一向一揆勢が富山城を占拠（元亀3年）、翌天正元（1573）年に謙信が奪回し城は上杉方の拠点となる、謙信の急死後天正6（1578）年神保長住の手中に帰す、と続く。その長住は上杉寄りの家臣に幽閉され（1582）、かねてから北陸進出を企てていた織田信長がその隙をついて富山城を奪回する。

天正9（1581）年、織田信長の命により佐々成政が越中へ入国する。富山城を拠点に上杉勢を駆逐し、越中全城を支配した。佐々成政は、神通川の富山から五艘等に渡舟を設け交通の便を図り、水害対策として常願寺川の馬瀬口に堤防「成政堤」を築くなどしたと伝えられている。しかし本能寺の変後の天正13（1585）年、前田利家を先鋒とした豊臣秀吉の大軍によって富山城は破

却され、越中は前田氏の支配下となった。

近世

近世の越中は加賀藩とその支藩富山藩により支配された。慶長2（1597）年に前田利長が入城し、寛永16（1639）年加賀藩より分藩され富山藩が成立、初代藩主前山利次が入った。利次は予定していた百塙の新城建設を断念し、富山城再建及び城下町建設に着手した。再建前の富山は加賀藩二代目藩主前田利長が隠居後に建設した城下町であり慶長14（1609）年の大火により焼失している。利長は富山が火災に弱いことを知り、高岡に城を築き移ったため、富山藩が実施するまで富山城の再建は行われなかった。大火は慶長14年から慶応2（1866）年までおよそ250年間に12回も発生している。そのうち3回は富山城が焼失している。

寛文元（1661）年から富山城と富山城下の本格的整備が行われた。「御調理富山絵図寛文六年」「万治年間富山旧市街図」によると、城は旧城をもとに藩主御殿である本丸、その西側に西の丸、南側に二の丸が設けられ、いずれも内濠で囲まれていた。それらの南側をコの字形に取り囲んで家老の屋敷や蔵である三の丸があり、その周りに外濠が掘り巡らされた。武家屋敷は、城内のほか外濠の回りや町の南西に展開し、町庄は城の西端より東方を中心に配置した。寺町は城下の南東に建設された。從来富山城の東、小島町・中町・片原町を通っていたと推定される北陸街道を富山城の南に移すことにして、七軒町・平吹町を経て東に折れ、旅籠町・一番町・二番町・西町・中町・堤町・東四十物町・片原町・向川原町へと東西に通じさせた。船橋を川向いの手伝町と富山城の西北に続く七軒町の間に架けた。城の北側となる裏手に神通川、町の東側に黒川、西側には小河川という天然の要害が存在していただけでなく、再建に当たっては城下南端に堀、土居を設けるなど、城下西半のはほとんどを川・堀・土居で隅う惣構形式の城下町となった。再建以前からの町は本町といわれ、これに加えて新たに町となった田地方の町や、寺院の上地を家臣の屋敷地に当てた散地町が形成された。やがて神通川対岸のいわゆる船橋向に船頭町・手伝町・愛宕町・舟橋新町・古手伝町・御福新町が形成され拡大していった。

本調査区は富山城の南東端に位置し、古絵図によると外濠のすぐ南に位置する。調査区南側は江戸期を通じて町屋にあたり、北側は江戸初期では武家屋敷が存在していた。江戸末期になると北東側は町会所となり、寄り合い場所として使用されていた可能性がある。

（岩崎）

第Ⅱ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

富山城跡は、平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地となつた。平成5年以降、富山国際会議場建築、大手通モール整備、城址公園南部整備、城址公園東部整備、周辺地における建築工事等に伴い、城址公園及びその近接地での試掘確認調査をたびたび実施した。そのほとんどは戦災や建物基礎工事により破壊されていたが、一部で遺構の残存が認められた。

平成13年4月、城下町主要部にあたる西町・総曲輪地区において、駐車場を核とした市街地再開発ビル建設が計画された。平成16年3月に行なった試掘確認調査の結果、事業地内北東隅130m²に埋蔵文化財の所在を確認したため、同年4月に発掘調査を実施し、複数の井戸跡や17世紀代の陶器類を多数検出した。調査部分は万治寛文期絵図に馬廻組岩田宇兵衛屋敷とあり、緑高150石の中級藩士居宅の一角とみられている（富山市教委2005）。

平成17年4月、調査を完了した西町・総曲輪地区市街地再開発ビルの内隣接区域約11,000m²における市街地再開発計画が提示され、埋蔵文化財の取扱いについて総曲輪通り南地区市街地再開発組合（理事長・森山明）、富山市都市整備課（当時）、市教委埋蔵文化財センターの三者で協議を行つた。3小工区ごとに建物除去終了時点で木造建物部分の試掘確認調査を実施し、埋蔵文化財の所在状況を把握した。調査は10月末から18年1月中旬までの間に6日を要した。

試掘確認調査の結果、AからCの3工区で計2811m²に江戸期の遺構・遺物を確認した。

工事施工者総曲輪通り南地区市街地再開発組合（理事長・森山明）と工事計画について調整した結果、2811m²全域の発掘調査が必要であり、工期との関係からA・B工区にかかる1,601m²を前期調査、C工区にかかる1,210m²を後期調査と2分割して実施することとなった。調査は富山市教育委員会の監理のもと、組合から委託した日本海航測株式会社が行うこととなった。

前期調査は平成18年1月16日から着手し、2月28日までに現地調査完了・引渡し、後期調査は2月7日着手、3月4日までに現地調査完了・引渡しを行い、その後平成18年12月25日までに出土品整理・発掘調査報告書刊行を行う計画とした。

調査成果の一部は、3月1日の富山市長定例記者会見で発表され、また、3月20日～24日の「発掘速報展2005国づくりのリーダーたち」展（富山市教委主催）で主要な出土品・現地写真が公開された。

（古川）

第2節 調査経過

平成18年1月11日より準備作業を行い、1月16日から現地作業を開始した。発掘作業員は社団法人富山市シルバー人材センターから採用した。発掘作業員に対しては採用時と毎月1回安全教育を行い労働安全衛生に努めた。

A-1区：1月16日から重機により工事の整地土（厚さ40～90cm）の除去作業を行い、19日から発掘作業員による遺構検出を行った。21日から概略図作成及び遺構掘削を開始した。遺構が複雑に入り組んでいるため、サブトレンチを入れながら土層堆積または遺構の切り合ひなどを確認しながら随時遺構半裁作業を行った。また、各遺構は検出した時点で、監理者と帰属時期を協議しながら調査することとなっていたが、時間的制限から調査方針の変更により、すべての遺構に関して掘削を行うこととした。遺構半裁後は随時、断面図作成・写真撮影・先掘の順で作業を行った。2月8日から石組み水路の掘削もあわせて行い、2月14日に空中写真測量を行った。その後、石組み水路とSD01の完掘を行い、20日に富山市教育委員会より調査完了の了承を得た。

A-2区：1月24日から重機により工事の整地土（厚さ40～90cm）の除去作業を行い、26日から遺構検出を行った。調査区南側で凹地形の落ち込みを確認し、トレンチ・サブトレンチなどによる上層観察を行なった結果、鞍部状の落込みであることが判明した。発掘調査の時間的制限から人力掘削では時間を要することから、監理者と協議した結果、重機による掘削を行うことになった。そのため2月3日から重機を搬入し掘削作業を行った。7日から石組み水路の掘削を開始し、2月14日に空中写真測量を行った。その後、石組み水路とSD01の完掘を行い、20日に富山市教育委員会より調査完了の了承を得た。

B区：1月26日から重機により工事の整地上（厚さ40～70cm）の除去作業を行い、30日から遺構検出・半裁・断面図作成・写真撮影の作業を行った。2月14日に空中写真測量を行い、15日に富山市教育委員会より調査完了の了承を得た。

C-1区：2月7日から重機により工事の整地土（厚さ40～90cm）の除去作業を行い、15日から遺構検出・半裁・断面図作成・写真撮影の作業を行った。28日に空中写真測量を行い、3月1日に富山市教育委員会より調査完了の了承を得た。

C-2区：2月1日から重機により工事の整地土（厚さ40～90cm）の除去作業を行い、20日から遺構検出・半裁・断面図作成・写真撮影の作業を行った。28日に空中写真測量を行い、3月1日に富山市教育委員会より調査完了の了承を得た。

現地調査は3月1日に終了し、現地調査終了後、整理作業・報告書作成作業に入った。出土遺物の洗浄・注記・分類・接合・復元・実測を行い、その後、トレース・写真撮影等報告書作成作業を順次進めた。

（岩崎）

第3節 調査日誌抄

- 1/11 準備作業、発掘作業員募集
1/16 A-1区 表土剥ぎ開始。
1/19 作業員作業開始。初回安全教育等を行う。
A-1区 グリッド杭設置。
1/20 A-1区 遺構検出開始。
1/21 A-1区 遺構掘削開始。
1/24 A-2区 表土剥ぎ開始。
1/26 A-2区 遺構検出開始。
B区 表土剥ぎ開始。
1/27 A-2区 鞍部トレント掘削・写真撮影を行う。
1/30 B区 遺構検出・遺構掘削開始。
1/31 第二回安全教育を行う。
2/1 C-2区 表土剥ぎ開始。
A-1区・A-2区 石組み水路検出開始。
2/3 A-2区 鞍部掘削を行う。
2/7 A-2区 石組み水路掘削を開始。
C-1区 表土剥ぎ開始。
2/8 A-1区 石組み水路掘削を開始。
A-2区・B区 グリッド杭設置。
2/14 A-1区・A-2区・B区 空中写真測量を行う。
2/15 B区 調査完了。
C-1区・C-2区 グリッド杭設置。
C-1区 遺構検出を行う。
2/16 A-1区・A-2区 石組み水路・SD01完掘作業を行う。
2/20 A-1区・A-2区 調査完了。
C-1区・C-2区 遺構掲出・遺構掘削開始。
2/28 C-1区・C-2区 空中写真測量を行う。
3・1 C-1区・C-2区 調査完了。

現地調査終了。撤収作業を行う。

(岩崎)



作業写真



集合写真

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 グリッドの設定

調査区は遺跡の南東端に位置し、調査面積延べ2811m²である。便宜上、調査区を三分割し、南西側調査区をA区、北東側調査区をB区、B区の西側に隣接する調査区をC区とした。さらに、A区の中央は擾乱されており、調査区が三分されることから、西側をA-1区、東側をA-2区とした。C区も同様に中央を擾乱していることから西側をC-1区、東側をC-2区とした（第3図）。

発掘調査に用いるグリッドは、平成11年度に行われた総曲輪地区第一種市街地再開発事業の基準点を基に設定した。グリッドの設定には世界測地系を使用した。起点となるA0の座標値はX=76540.000、Y=4080.000であり、調査区内全城を網羅できるように基点を設定している。真北の線を基線として10mごとにグリッド杭を設置し、北から南へアルファベット（A、B、C…）、西から東へ算用数字（1、2、3…）として両者を組み合わせて表記した。また、グリッド番号は基点から南東の範囲を一つの区画として呼称している。

（岩崎）



第3図 グリッド設定図 (S=1/2,000)

第2節 調査の方法

発掘調査の手順として、まず工事の整地上である表土及び戦災層を調査員立会いのもと重機により除去した。今回の調査は緊急発掘調査であり、発掘調査の時間的制限があったことなどから、発掘調査対象時期を中世（16世紀末）とし、最下層の遺構検出面まで重機による掘削を行った。そのため、V層上面を遺構面としI～III層まで掘削を行なった。I～III層は遺物を包含していたため、重機による掘削時にグリッド単位で、各層から出土した遺物の取り上げを行った。調査に際し発生した堆土は、ダンプトラックにより建設事業地外に排出した。

掘調査の基本的な流れは一般的な発掘手順（表土・盛土除去→包含層掘削→遺構確認面の精査・遺構検出→遺構掘削→写真撮影→記録作業→測量→補測作業）で行った。最下層遺構面には近世・近代の遺構が入り組んだ状態で検出され、その中から中世遺構のみを検出し・掘削することは、発掘調査期間の時間的制限や作業効率などから不具合が生じるため、すべての遺構を掘削し、遺物整理により出土遺物の検証・各遺構の時代を判断することとした。各遺構はトレンチを適宜設定して断面観察を行い、概略平面図作成後に遺構半裁と断面の記録作業を行った。記録作業終了後に遺構を完掘し、写真撮影などを随時実施した。詳細平面図は空中写真測量にて行い、適宜補測作業を行った。
(岩崎)

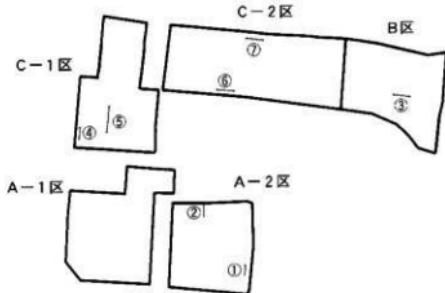
第3節 基本層序

基本層序は土層の性格により大別し、上層からI層：表土・盛土、II層：昭和期の戦災地層（以下戦災層）、III層：近代の包含層、IV層：近代の造成土、V層：近代遺構の基盤層、VI層：近世遺構の基盤層、VII層：地山とした。A区・B区・C区はそれぞれ基本層序に多少の差異はあるものの、上記の7層に大別できる。以下各区毎に詳細を述べる。

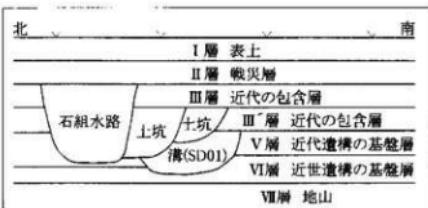
A-1区

地表から地表面までの間は約1m80cm～2m20cmであり、その間は7層に分かれる（第5図）。

I層は表土・盛土である。II層は暗褐色シルト(7.5YR 3/3)を呈し、腹土中に焼土や炭化物、近現代の遺物を多含していることから戦災層と考えられる。III層は黒色粘質土(2.5Y 2/1)を呈し、III'層は黒褐色粘質土(2.5Y 3/2)を呈する。III層、III'層はほぼ同じ層位であり、近世・近代の遺物を含む。V層は緑灰色シルト(10GY 5/1)を呈し、V層の上面が



第4図 調査区模式図



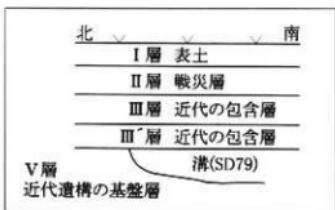
第5図 A-1区基本層序図

今回の調査における遺構確認面である。VI層は黒色粘質土(5Y 2/1)を呈し、植物遺体を多含する近世遺構の基盤層である。V・VI層は、A-1区全体及びA-2区石組み水路以北に広がっている。Ⅶ層は地山であり灰色粘質土(7.5Y 4/1)を呈する。粘性・しまりともに強い。

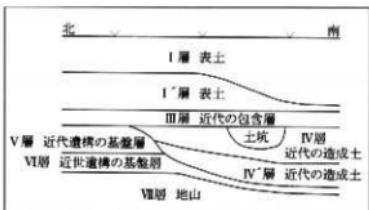
A-2区

地表から地山面までの間は約1m 80cm~3mであり、箇所にもよるがその間は8層に分かれる。調査区北側の石組み水路以北ではA-1区と同様の層序を示す(第6図、第4図①)。

調査区南側は石組み水路から南側にかけてV・VI層上が緩やかに落ち込み鞍部を形成している。鞍部は北東から南西にかけて徐々に低くなり、旧地形からの落ち込みであることが確認された。平坦面を構築するに際して、IV層土(近代の造成土)により整地したものであると考えられる。鞍部の西側肩部はA-1区・A-2区間にある搅乱により確認できなかったが、A-1区の層序は前述したような安定した層序であり、水平堆積を呈していることから、搅乱部分において終息しているものと考えられる。IV層からは近世後期の遺物が出土している。また、IV層を色調・土質により2層に細分し、黒色シルト(2.5Y 2/1)を呈する層をIV層、黒褐色粘質土(2.5Y 3/2)を呈する層をIV'層とした(第7図、第4図②)。鞍部下面の層序からはVI・VII層が確認された。



第6図 A-2区基本層序図 (①)



第7図 A-2区基本層序図 (②)

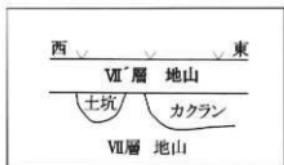


B区

B区では、I層(表土)直下に明黄褐色砂質土(10YR 7/6)を呈するVII'層(地山)が確認された(第8図、第4図③)。VII'層の下層は青灰色シルトまたは砂質土、黄褐色シルトを呈する自然堆積層であることからVII'層を地山とし、上面を遺構検出面とした。また、A区において確認されたVII'層とは色調・土質ともに差異があるためVII'層と区分した。

北東から南西にかけて鞍部状の落ち込みを確認した。調査区東側で肩部を検出し、北側で緩やか

に覗る。西側肩部はC-2区との隣接部分にある搅乱により切られている。C-2区において鞍部の肩部が検出されなかったことからこの搅乱内で終息しているものと考える。鞍部覆土は鉄分を多く含む黄褐色を呈する。また水平堆積を呈し、自然堆積のような複雑な堆積状況でないところも一度に埋められた痕跡が窺える。上面から検出された遺構内からは新しい遺物が出上したことから、この鞍部が埋められた時期は比較的新しいものであると考えられる。そのため、近現代に造成された可能性も指摘できる。



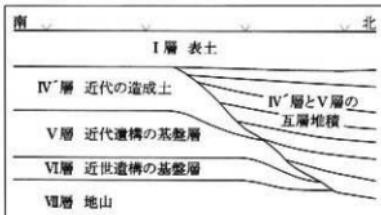
第8図 B区基本層序図 (③)



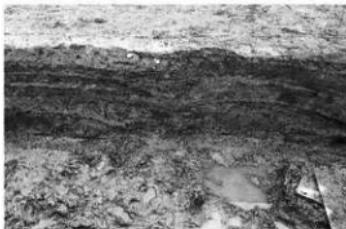
C-1区

A-1区・C-1区間は擾乱されているものの、幸うじてC-1区南側西壁でA区に類似した基本層序が確認された（第9図、第4図④）。I層は表土・盛土である。表土下にはA-2区のIV'層に対応する黒褐色粘質土(2.5Y 3/2)が堆積している。V層は緑灰色シルト(10GY 5/1)を呈する。VI層は黒色粘質土(5Y 2/1)を呈し、植物遺体を多含する近世遺構の基盤層である。VII層は地山であり灰色粘質土(7.5Y 4/1)を呈する。粘性・しまりともに強い。IV'層からVI層まではA区と同様の土層堆積であるが、C-1区においてIII層が確認されなかったことから、IV'層より上層は削平されている可能性がある。

C-1区の層序は北側へ行くに連れ、レンズ状または斜めに互層堆積を呈している（第9図、第4図⑤）。上記した基本層序が切られて構築されていることから、何らかの落ち込みを埋めるための造成土であると考えられる。複雑に入り組んだ土層堆積であり、造成土中から出土した遺物の帰属時期もばらつきが見られることから、造成の意義・意味合いや造成の年代を定義付けることが困難である。



第9図 C-1区基本層序図 (④、⑤)

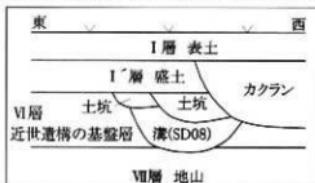


C-2区

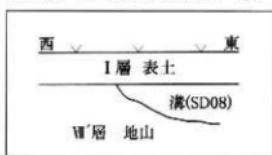
調査区東側と西側では層序に差異が見られる。西側は地表から地山面までの間は約1m40cm～2mであり、4層に分かれる（第10図、第4図⑥）。I層は表土である。表土下は現代の盛土であるためI'層とした。VI層は黒色粘質土（5Y 2/1）を呈する近世の基盤層である。VI層より上は削平されており、VI層上面が遺構確認面である。VI層から掘り込んでいる遺構は、出土遺物より近世の遺構と考えられる。VI層下に灰色粘質土（75Y 4/1）を呈するⅦ層が堆積している。A区ともC-1区とも違う様相を示す。

東側は、B区と同様にI層（表土）直下に明黄褐色砂質土（10YR 7/6）を呈するⅦ'層（地山）が確認された（第11図、第4図⑦）。

東側（A・B6）において遺構検出面が西側の緑灰色シルトから、B区と同様の明黄褐色シルトに急変する。トレーナーの断面観察から、明黄褐色シルトが直に立ち上がり、以後東側にかけて存在している。また、基本層序にも差異が認められ、下層においても堆積状況に差異が認められる。さらにSD08東側が明黄褐色シルトによって切られていることなどから、明黄褐色シルト層は自然堆積ではなく、SD08埋没後に整地・造成するための堆積であると考えられる。C-2区とB区の間は搅乱されているためつながりは不明であるがC-2区東側から層序は変わらずB区につながるものと考えられる。また、C-2区の東側に存在する遺構はB区同様に出土遺物から比較的新しいものであることが窺えることから、この層位は比較的新しい段階で堆積したものと考えられる。



第10図 C-2区基本層序図 (6)

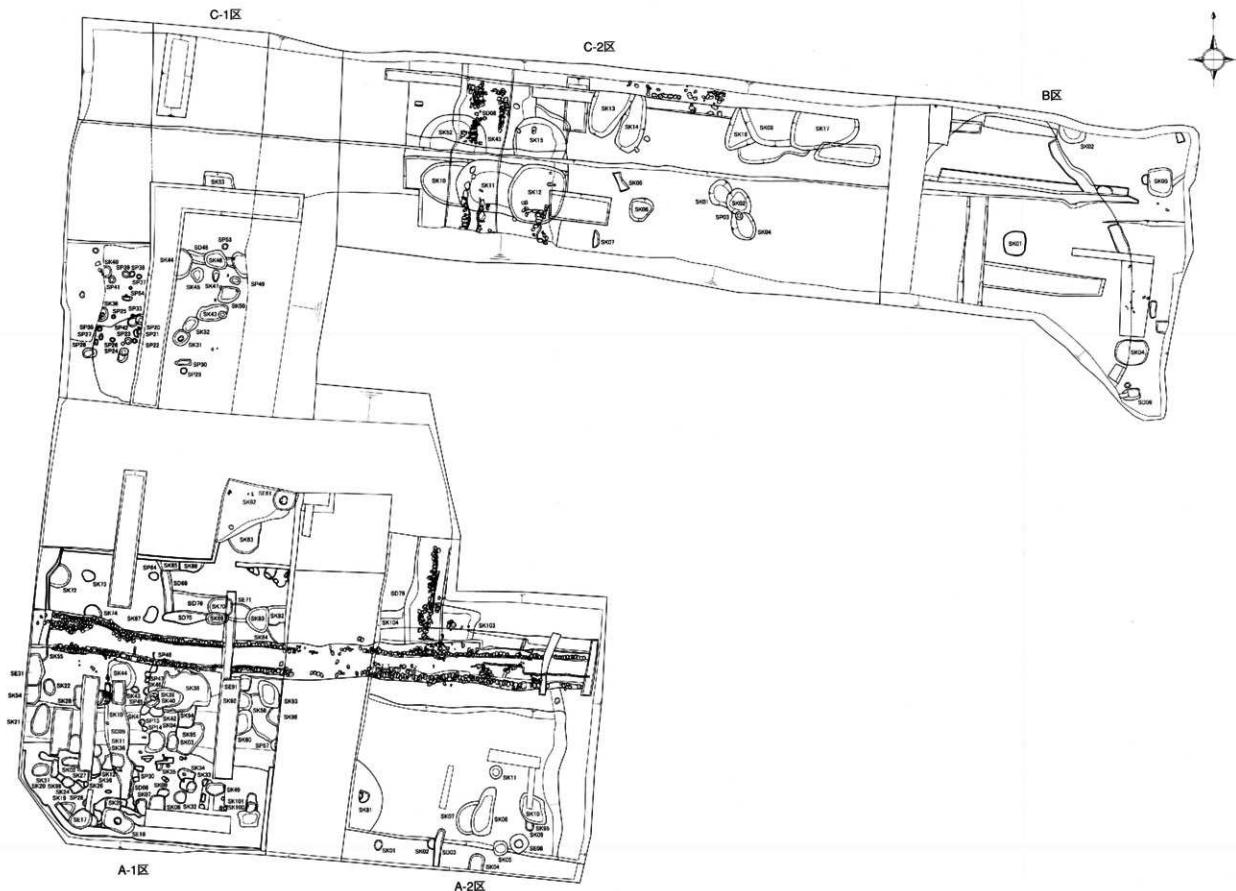


第11図 C-2区基本層序図 (7)



これらのことから、A・B・C区は基本層序に比較的類似点は見出せるものの、各調査区間は搅乱されているため、層序のつながりが把握しにくく、C区のように調査区内においても、堆積状況が場所により急変する場合もあるため、個々の基本層序の対応は困難である。C-2区東側からB区にかけては、他の調査区と土層堆積に大きな差異があること、堆積土層の土質・色調共に変化していること、検出された遺構が比較的新しいこと等から、近代に大規模な基盤改良がなされている可能性がある。

調査区全体の旧地形をみると、北側から南側にかけて低くなる傾向がある。これはA区において検出されたⅢ層・Ⅳ'層が、C-1区ではⅣ'層のみ検出され、C-2・B区に至っては確認されなかったことから、調査区北側に堆積していたⅢ層土が削平された可能性がある。（小川）



第12図 調査区全体図

1 : 300
0 5 10 15 20m

第IV章 遺構

第1節 調査区の概要

今回の発掘調査で検出された遺構は多種多用に富み、遺構数も多い。また、調査区全体で遺物を包含する遺構も多数検出しており、年代を特定する要因となる。A区は中央を搅乱で分断されているため西側をA-1区、東側をA-2区と便宜上区分した。A-1区は比較的遺構数が多く、石組み水路、溝、土坑、ピット、井戸で構成され、土坑は有機質や不要物を廃棄した「ごみ穴」状のものや、鉄滓を多く含むものも検出された。A-2区は北側にA-1区から延びる石組み水路が存在し、南側は鞍部状に落ち込む。そのため、遺構密度は低く、石組み水路、溝、土坑で構成されている。

B区は調査区北東から南西にかけて鞍部状の落ち込みを確認した。そのため、遺構密度は低く土坑のみで構成されている。表上面から掘り込まれているものも確認でき、比較的新しい遺構であることがわかる。

C区もA区同様搅乱により南北に分断されていることから、西側をC-1区、東側をC-2区と便宜上区分した。C-1区は土坑、ピットなどで構成され、比較的小型の遺構を中心とする。調査区内はいたるところが搅乱されており、また、入り組んだ土層堆積を呈しているため全体の様相を把握することが困難である。C-2区は土坑、石組み水路によって構成されている。調査区の東側は搅乱を挟んでB区と隣接しており、東側に関してはB区と様相が酷似している。西側は土坑を多数検出し、石組み水路などと複雑に切り合い存在している。第III章基本層序で述べたように、各調査区は搅乱により分断され、調査区内においても搅乱箇所が多数存在するため全体的な様相及び層序のつながり等が判然としない。

遺構番号は各調査区同時進行していたため、遺構番号の重複・煩雜さが出ないよう工区ごとに1番から通して付した。

以下工区毎に個々の遺構に関する詳細を述べる。

第2節 遺構

石組み水路はA-1区・A-2区に跨って存在し、深度、覆土、出土遺物など多少差異が認められるものの同一遺構であるためあわせて記す。また、A-2区・C-2区に存在する石組み水路(SD79・SD08)も同一遺構と考えられるため同一遺構として記載する。その他の遺構は工区ごとに以下詳細を記す。

【石組み水路】(第12・13、16~18図)

E2~F6に位置する。A-1・2区を含め残存長442m、最大幅2.87mを測る。主軸方向はN-86°-Wである。A-1・2区間は搅乱で分断されており、深度、覆土など若干の相違はあるものの、平面形状や、搅乱部において若干石が残存していることからも同一遺構であるものと考えられる。石組みは残存しているものは1~4段積まれており、西側にかけて浅くなり、水路底面の標高はA-1区西側で標高6.90m、中央で6.63m、A-2区東側で6.37mを測る。よって流水方向は西から東であったと考えられる。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。各断面を観察したところ、石組み水路とのとは別の溝の掘り方が確認されたことから、最初は素掘りの溝であったものを北側・南側に若干上軸をずらしながら何度も作りかえを行なった後、最終段階で

溝の両脇に石を積み上げ石組み水路として使用したと考えられる（第17図）。また、A-2区東壁の断面観察から石組み水路も何度も作りかえを行なっている痕跡が確認された。A-1区では西側壁が搅乱されており断面観察が出来なかったため、上層からどのように溝が構築されているかは不明であるが、構築・形状は同じであったものと考えられる。

また、東側には丸木を主軸方向に連結させたものが検出された。この丸木の南側は一段高くなり、その上層から鉄滓層が検出された。鍛冶により生成した鉄滓を溝に廻棄したものと考えられる。

A-2区 (SD79)、C-2区 (SD08)

SD79 (第12・13、16~18図)

E 5 ~ F 5 に位置する。全長8.40m、最大幅3.00m、深さ0.97mを測る。主軸方向はN-7° ~ Eである。南側はA-2区の石組み水路に直結する。石組みは残存部分で1~2段積まれている。南側にかけて深くなるため、流水方向は北から南である。石組み水路に流れ込み、石組み水路から東に流れ込んだものと考えられる。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。石組みが遺存しているのは西側のみであり、東側は上部の石が搅乱によって破壊されていると考えられるため詳細は不明である。石組みの遺存状態は悪く、散乱している箇所も見受けられる。また、溝の北側両端から石積みの欄木と考えられる木杭が検出された。

石組み水路との連結部分の石の積み方が他の箇所と違ひ複雑に組まれており、石の下部から枕木と考えられる木杭が検出された。これはSD79を直結させるため連結部分の石組み水路を破壊し丸木を渡して土台とし、その上に石組み水路の石を組みなおし構築したものと考えられる。

石組み水路との連結部分の溝の下端両端に杭が打ち込まれていた。これは、石組みの支えもしくは、護岸の可能性がある。また、土壠断面観察から下層覆土は川原石を多く含む粒子の粗い砂の堆積である。これは川原石や粒子の粗い砂を敷き、石組み水路に直結させ暗渠状に水が流れ込むようにしていたものと考えられる。よって、本遺構は暗渠として石組み水路に直結していたものと考えられる。

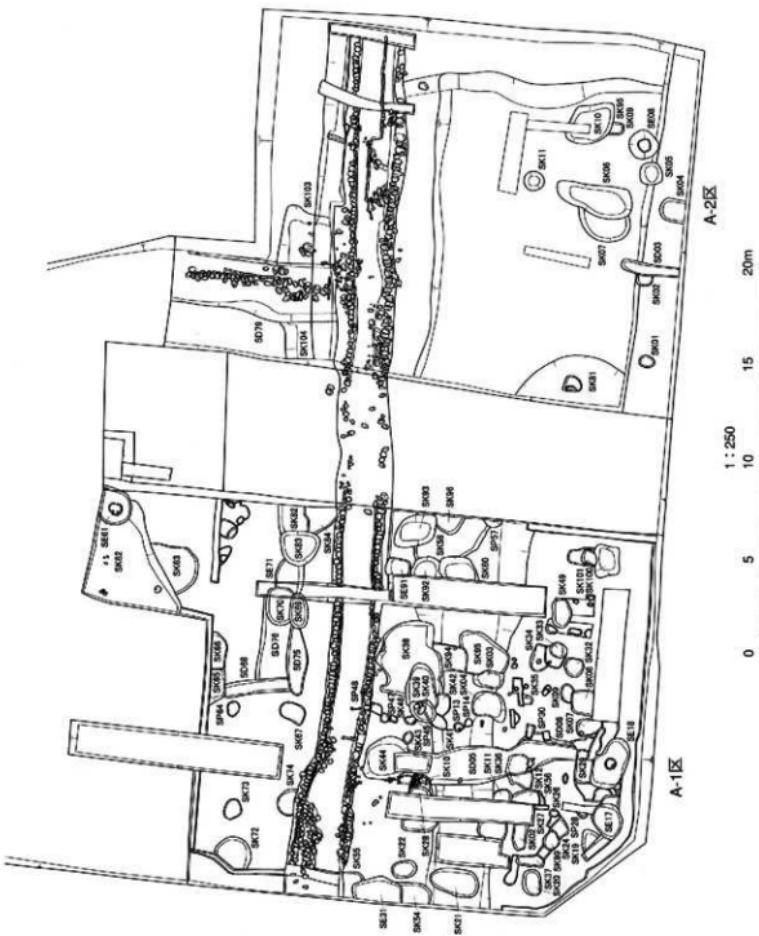
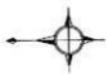
これらのことからSD79は石組み水路よりも後に構築されたものであると考えられるが、両者に明確な時間差があるかは不明である。ある時期に同時に機能していたことは確かである。

SD08 (第12・15・25図)

A 4 ~ B 5 に位置する。残存長13.09m、最大幅3.99m、深さ0.65mを測る。主軸方向はN-7° ~ Eである。北側及び南側は調査区外に延びる。石組みしているものの遺存状態は悪く、整然と並べられ、組まれているものは少ないが、残存部分で1~2段積まれている。南側にかけて深くなるため、流水方向は北から南である。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。残存しているのは下層のみであり、上面は重複する土坑などに切られ石組みが拡散されたものと考えられる。平面的繋がりや覆土などから、A-2区に存在するSD79につながるものと考えられる。また、SD08の東側にL字に曲がる石列が検出された。SD08同様上面は土坑により切られ詳細は不明であるが、構築されている石列はSD08よりも標高の高い位置に存在することからも、SD08につながる石組溝の片岸部分である可能性がある。

【A-1区】

溝 6 条、ピット10基、土坑60基、井戸 6 基、石組み水路 1 条を確認した。他の調査区と比較すると造構密度は高く、石組み水路以南の造構密度が高い。造構の大半が土坑で構成されている。大半の土坑の覆土中に、褐色の有機質層・植物遺体、下駄や、漆碗片などといった不要となつた



第13回 A区全体図

ものが堆積しているため、ごみを廃棄したいわゆる「ゴミ穴」であると考えられる。ゴミ穴も石組み水路以南に多く、以北からは検出されていない。石組み水路を境としている武家屋敷地及び町屋の居住区内における使用目的の違いと考える。

溝

SD01 (第12・13・19図)

F 2 ~ F 3 に位置する。全長19.99m、最大幅3.34m、深さ0.95mを測る。主軸方向はN-87° - Wである。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土はほぼ単層が厚く堆積し、また、単純なレンズ状堆積を呈しているため、埋められた可能性がある。調査区ほぼ中央に位置し、周辺遺構より古い遺構である。出土遺物は比較的古いが図示し得たもの以外はすべて細片である。上層からは比較的新しい伊万里焼皿・碗、越中瀬戸焼皿、下層からは上野器皿などが出土している。

SD05 (第12・13・19図)

F 2 ~ G 2 に位置する。残存長8.76m、最大幅1.76m、深さ0.26mを測る。主軸方向はN-5° - Wである。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。調査区ほぼ中央に位置し、SK36より新しい遺構である。上層からは伊万里焼皿、越中瀬戸焼建水などが出土している。

SD75 (第12・13図)

E 3 に位置する。残存長3.44m、最大幅1.09m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-90° - Eである。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。北側でSD76を切り、SK69より古い遺構である。越中瀬戸焼皿などが出土している。

土坑

調査区南西側 (F 2 ~ G 2) に位置する土坑のうち、鉄滓を多く含む土坑が集中して存在する (SK02・12・20・21・22・37)。これらの土坑の覆土は鉄滓単一層で構成され、鉄滓を廃棄した遺構である可能性がある。そのため、鍛冶場関連遺構である可能性が指摘できる。

SK02 (第12・13・20図)

G 2 に位置する。残存長軸1.32m、短軸0.7m、深さ0.35mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。東側は試掘トレンチにより切られ、詳細は不明である。

SK12 (第12・13・20図)

G-2に位置する。残存長軸1.45m、残存短軸0.73m、深さ0.31mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。西側は試掘トレンチにより切られ、北側をSK11によって切られるため調査区内でも比較的古い遺構である。

SK20 (第12・13・20図)

G-2に位置する。長軸1.33m、短軸0.96m、深さ0.27mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。

SK21 (第12・13・20図)

G 2 に位置する。長軸2.55m、短軸1.34m、深さ0.27mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。

SK22 (第12・13・20図)

G 2 に位置する。長軸1.30m、短軸0.88m、深さ0.45mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。

SK37 (第12・13・20図)

G 2 に位置する。長軸1.43m、短軸0.57m、深さ0.48mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。南から西側へL字に延び、溝状を呈する遺構である。

SK10 (第2・13図)

F 2 に位置する。長軸0.93m、残存短軸0.61m、深さ0.45mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。西側をSK28により切られ、詳細は不明である。覆土は黒色粘質土を呈し、焼土・炭化物を多く含む。SK11と覆土や形状に共通性がみられるため、鍛冶場遺構である可能性が窺える。SK28より古い遺構である。

SK11 (第12・13・20図)

F 2 に位置する。残存長軸0.96m、残存短軸0.59m、深さ0.70mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。西側は試掘トレレンチにより切られ、詳細は不明である。覆土は黒褐色粘質土を呈し、焼土・炭化物を多く含む。周辺には鉄滓を多く含む土坑が存在するため、鍛冶場遺構である可能性が窺える。SD01より古い遺構である。

SK28 (第12・13・20図)

G 2 ~ F 2 に跨って位置する。長軸2.32m、短軸1.60m、深さ0.50mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。遺構の中央を試掘トレレンチにより切られ、詳細は不明である。覆土は黒色粘質土を呈し、炭化物を多く含む。SD01より古い遺構である。遺構内からは、鉄滓が付着した鉢の口縁部片が出土しており、覆土は炭化物を多く含むため鍛冶場遺構である可能性がある。

A - 1区において生活に不要となった木製品、木屑、土器などを廃棄した「ゴミ穴」が多く検出された。本調査区において検出された土坑の大半はこのゴミ穴である。覆土が木製品や木屑を廃棄しているため有機物を多く含む層が確認されたものをゴミ穴として取り扱っている。また、有機物を多く含む層と、含まない層が互層堆積している状況のものも確認された。これは、一度ゴミを廃棄した後、上から土をかぶせて蓋としているものと考えられる。

SK04 (第12・13・21図)

F 3 に位置する。長軸1.72m、短軸1.24m、深さ0.67mを測る。断面形状は両端ともに急に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土はオリーブ黒色シルトを呈し、木製品や木屑を廃棄しているため有機物を多く含む。覆土中からは多量に遺物が出土した。伊万里焼皿、越中瀬戸焼皿などが出土した。

SK38 (第12・13・21図)

F 3 に位置する。長軸3.26m、残存短軸2.52m、深さ0.29mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は木製品や木屑を廃棄しているため有機物を多く含む。断面観察から何處か遺構を掘り返しながらゴミを廃棄している痕跡が窺える。SK39より古い遺構である。覆土中からは多量に遺物が出土した。伊万里焼碗、越中瀬戸焼皿・建水などが出土した。

SK39 (第12・13・21図)

F 3 に位置する。残存長軸1.94m、短軸1.50m、深さ0.51mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土は木製品や木屑を廃棄しているため有機物を多く含む。SK40より古い遺構である。覆土中からは多量に遺物が出土した。越中瀬戸焼皿・蓋などが出土した。

SK40 (第12・13・21図)

F3に位置する。長軸1.22m、短軸1.13m、深さ0.45mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は木製品や木屑を廃棄しているため有機物を多く含む。SK39より新しい遺構である。覆土中からは多量に遺物が出土した。

SK44（第12・13・21図）

F2に位置する。長軸2.65m、短軸2.11m、深さ0.79mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は木製品や木屑を廃棄しているため有機物を多く含む。また、有機物を多く含む層と、含まない層とが互層堆積している部分が確認された。SD05より新しい遺構であるが、サブトレンチにより切られたため全体の様相は不明である。覆土中からは多量に遺物が出土した。越中瀬戸焼壺などが出土した。

SK49（第12・13・21図）

G3に位置する。長軸1.46m、短軸0.99m、深さ0.27mを測る。断面形状はやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は木製品や木屑を廃棄しているため有機物や炭化物を多く含む。比較的浅い遺構であるため上面から掘り込まれた遺構であり、下部のみ検出された可能性がある。覆土中から伊万里焼碗などが出土した。

SK58（第12・13・22図）

F3に位置する。残存長軸4.03m、残存短軸1.32m、深さ0.63mを測る。周囲の遺構より古い遺構であるが、SD01より新しい遺構である。切り合い関係から、この周辺の土坑の中では比較的古相を示す。底面は平底を呈し、覆土は中間層に木製品や木屑・有機物を多く含む。覆土中からは多量に遺物が出土した。伊万里焼皿、越中瀬戸焼壺などが出土した。

SK93（第12・13・22図）

F3に位置する。長軸2.52m、短軸1.59m、深さ0.47mを測る。南側でSK58、96を切る。底面は平底を呈し、比較的浅い。覆土は木製品や木屑・有機物を多く含む。覆土中からは多量に遺物が出土した。伊万里焼碗などが出土した。

その他土坑

SK62（第12・13・22図）

E3・E4に位置する。長軸4.43m、短軸3.52m、深さ0.58mを測る。断面形状はやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は焼土・炭化物・礫を多量に含む単一層で構成されている。火災による不要物を廃棄し、焼土・炭化物層と一緒に整地した遺構であると考えられる。上面から掘り込まれた遺構であり、下部のみ検出された可能性がある。覆土中から越中瀬戸焼皿などが出土した。

井戸

調査区から検出された井戸は井戸枠・曲げ物が残存しているものは上層から検出されているため新しい井戸である。曲げ物が残存していないものに関しては、断面観察から覆土が直に立ち上がり、曲げ物を抜いた痕跡と考えられるもの、または覆土が単層であり、井戸枠を抜いた後に一度に埋没させた痕跡のある上坑を井戸として取り扱った。

SE31（第12・13・22図）

F2に位置する。長軸2.60m、残存短軸1.31m、深さ0.73mを測る。井戸枠の掘り方は北側に存在し、断面形状は両端ともに急に立ち上がる。井戸枠は残存せず、掘り方は直に立ち上がるため井戸枠を抜き取った痕跡が見える。SK54・55より新しい遺構である。伊万里焼碗・皿、越中瀬

戸焼皿などが出土した。

SE71 (第12・13図)

E3に位置する。長軸1.42m、残存短軸0.95m、深さ0.31mを測る。井戸枠の掘り方は確認されなかったが、壁が直に立ち上ることや、深度などから井戸とした。断面形状は両端ともに急に立ち上がる。SK69・70・83より古い遺構である。越中瀬戸焼皿などが出土した。

[A-2区]

第Ⅲ章基本層序で述べたように、A-2区の南側は緩やかに落ち込み鞍部を形成している。A-1区における遺構確認面（最下層）において構築された遺構の時期にはA-2区は鞍部状になつておらず、平坦面を構築するに際して、IV層土（近代の造成土）により整地したものであると考えられる。よって、A-2区のIV層上面より検出した遺構は比較的新しいものと考えられたため調査対象外とした。石組み水路、SD79は鞍部を切って存在しており、調査対象外とするところであるが、区画溝の可能性が高いため今回の調査対象とした。溝2条、土坑12基、井戸1基、石組み水路1条を確認した。

土坑

SK103 (第12・13・17図)

E4に位置する。残存長軸2.70m、残存短軸2.56m、深さ0.82mを測る。断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。石組み水路、SD79より古い遺構である。覆土中から木製品や木屑、遺物を多く含んでいるため生活不用品を廃棄したゴミ穴であると考えられる。また、有機物などを多く含むゴミ層と含まない層が互層堆積している。特に遺構の下部に有機物が多く堆積している。遺構の大半を石組み水路、SD79に切られているため詳細は不明であるが、遺構覆土、堆積状況が類似していることや、断面形状からSK104と同一遺構である可能性がある。

SK104 (第12・13・17図)

E4に位置する。残存長軸2.65m、残存短軸2.40m、深さ0.66mを測る。石組み水路、SD79より古い遺構である。また、西側を搅乱により切られるため全体の様相は不明である。覆土中から木製品や木屑、遺物を多く含んでいるため生活不用品を廃棄したゴミ穴であると考えられる。また、有機物などを多く含むゴミ層と含まない層が互層堆積している。遺構の下部に有機物が多く堆積している。遺構の大半を石組み水路、SD79などに切られているため詳細は不明であるが、遺構覆土、堆積状況が類似していることや、断面形状からSK103と同一遺構である可能性がある。

[B区]

第Ⅲ章基本層序で述べたように、B区の西側は緩やかに落ち込み鞍部を形成している。覆土は鉄分を多く含む黄褐色を呈する。また水平堆積を呈し、自然堆積のような複雑な堆積状況でないことからも一度に埋められた痕跡が窺える。上面から検出された遺構内からは新しい遺物が出土したことから、この鞍部が埋められた時期は比較的新しいものであると考えられる。溝1条、土坑4基、井戸1基、を確認した。他の調査区と比較すると遺構密度は低い。

土坑

SK04 (第12・14・23図)

B10～B11に位置する。長軸2.57m、短軸2.00m、深さ0.52mを測る。断面形状は両端ともに直に立ち上がるため井戸枠を抜き取った痕跡であるとも考えられる。底面は平底を呈す。覆土は地山ブロックを多く含むもので構成されており、また堆積状況から自然堆積ではなく埋められた痕

跡が窺える。

SK05 (第12・14・23図)

C10に位置する。長軸2.29m、短軸1.92m、深さ0.87mを測る。断面形状は両端ともに急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土はレンズ状堆積を呈し、地山ブロックを多く含む。鞍部埋没後に構築された比較的新しい造構であることが窺える。

井戸

調査区から検出された井戸は井戸枠・曲げ物が残存しているものは上層から検出されているため新しい井戸である。曲げ物が残存していないものに関しては、断面観察から覆土が直に立ち上がり、曲げ物を抜いた痕跡と考えられるもの、または覆土が単層であり、井戸枠を抜いた後に一度に埋没させた痕跡のある土坑を井戸として取り扱った。

SE03 (第12・14図)

B10に位置する。長軸1.34m、短軸0.60m、深さ0.82mを測る。断面形状は両端ともに直に立ち上がる。これは井戸枠の掘り方であり、井戸枠を抜き取った痕跡であると考え、また底面から漏水するため井戸とした。南側は搅乱を受けているため詳細は不明である。比較的新しい造構である。

[C-1区]

溝1条、ピット22基、土坑11基を確認した。他の調査区と比べ比較的ピット、小土坑など小型の造構が目立つ。覆土に有機物を含むゴミ穴や廐棄土坑などが検出されなかつことなどから、居住区内における使用目的が他の調査区と違うことが考えられる。また、ピットを多数検出したが建物や柵列など施設になりうるものは検出されなかつた。南西側にはややしまりの強い黄褐色砂質土の広がりを検出し、版築された土間である可能性が指摘できる。第Ⅲ章基本層序で述べたように、複雑に入り組んだ土層堆積を呈している。これは落ち込みに平坦面を構築する際に造成した層序であると考えられるが、造成の意義・意味合いや造成の年代を定義付けることが困難である。調査区から検出された造構の大半は単層であり比較的浅い。そのため、検出した造構面よりも上層から構築された造構である可能性も考えられる。

ピット

SP22 (第12・15・24図)

C2に位置する。長軸0.38m、短軸0.38m、深さ0.25mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土は単層であり、灰オリーブ色シルトを呈し、若干小礫を含む。

SP23 (第12・15・24図)

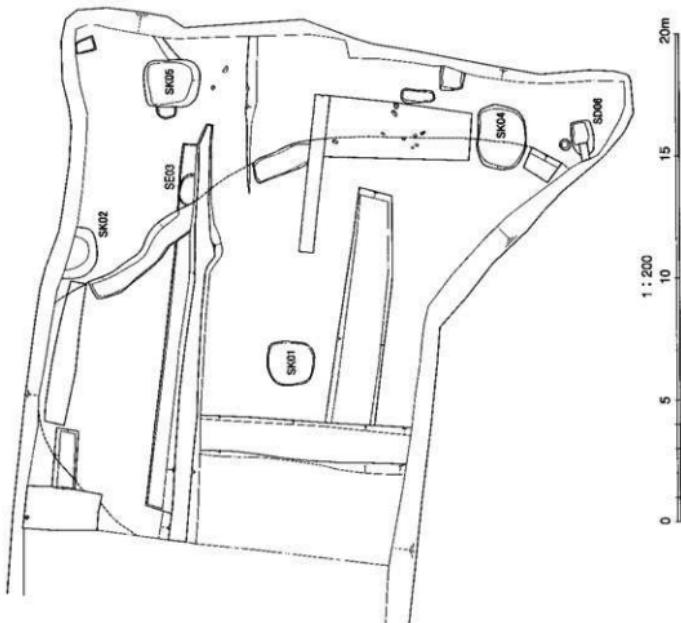
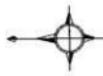
C2に位置する。長軸0.54m、短軸0.51m、深さ0.29mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土は単層であり、暗灰黄色シルトを呈す。

SP24 (第12・15図)

C2に位置する。長軸0.25m、短軸0.24m、深さ0.20mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土は単層であり、暗灰黄色シルトを呈す。覆土中からは正面体の石、五輪塔の地輪を転用した建物礎石が検出された。

SP27 (第12・15・24図)

C2に位置する。長軸0.51m、短軸0.30m、深さ0.23mを測る。断面形状は両端ともに緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土は単層であり、黄灰色シルトを呈す。



第14図 B区全体図

SP38・39（第12・15・24図）

C2に位置する。SP38は残存長軸0.45m、短軸0.45m、深さ0.15mを測る。覆土は単層であり、オリーブ黒色シルトを呈す。SP39は長軸0.58m、短軸0.53m、深さ0.23mを測る。覆土は単層であり、灰色シルトを呈す。断面形状は両造構ともに緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。SP39はSP38より新しい造構である。

土坑

SK31・32（第12・15・24図）

C3に位置する。SK31は残存長軸1.25m、短軸1.17m、深さ0.33mを測る。覆土は単層であり、オリーブ黒色シルトを呈す。SK32は長軸1.40m、短軸0.93m、深さ0.40mを測る。覆土は単層であり、灰色シルトを呈す。断面形状は両端ともに緩やかに立ち上がり、底面はやや平底を呈す。SK32はSK31より新しい造構である。また、SK32からは木製品の箸が出土している。

SK40（第12・15・24図）

C3に位置する。長軸0.91m、残存短軸0.60m、深さ0.31mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は単層であり、灰色シルトを呈し小蝶を含む。西側は搅乱を受けているため詳細は不明である。

SK44（第12・15・24図）

C3に位置する。長軸2.43m、残存短軸1.01m、深さ0.56mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は単層であり、黒褐色シルトを呈す。西側をトレントによって切られているため詳細は不明である。

SK50（第12・15・24図）

C3に位置する。長軸1.56m、短軸1.34m、深さ0.36mを測る。断面形状は両端ともにやや急に立ち上がり、底面は平底を呈す。覆土は単層であり、灰色シルトを呈す。

[C-2区]

溝1条、ピット1基、土坑16基、石組み水路1条を確認した。調査区西側でSD08とその周辺は土坑（ゴミ穴）により複雑に切り合っている。また、東側は第Ⅲ章基本層序で述べたように、B区と上層堆積状況が類似しており、造構はB区同様に出土遺物から比較的新しいものであることが窺える。

土坑

SK10・11・12（第12・15・26図）

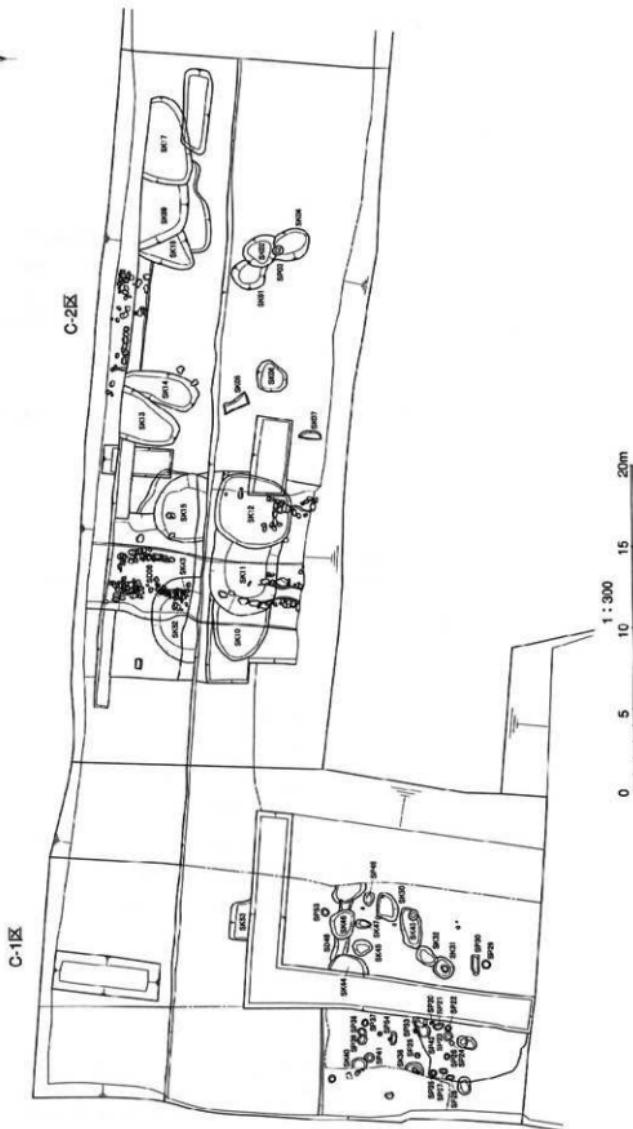
B5に位置する。SK10は長軸3.36m、残存短軸2.81m、深さ0.88mを測る。SK11は残存長軸4.23m、短軸4.10m、深さ0.98mを測る。SK12は長軸4.74m、短軸4.38m、深さ0.65mを測る。

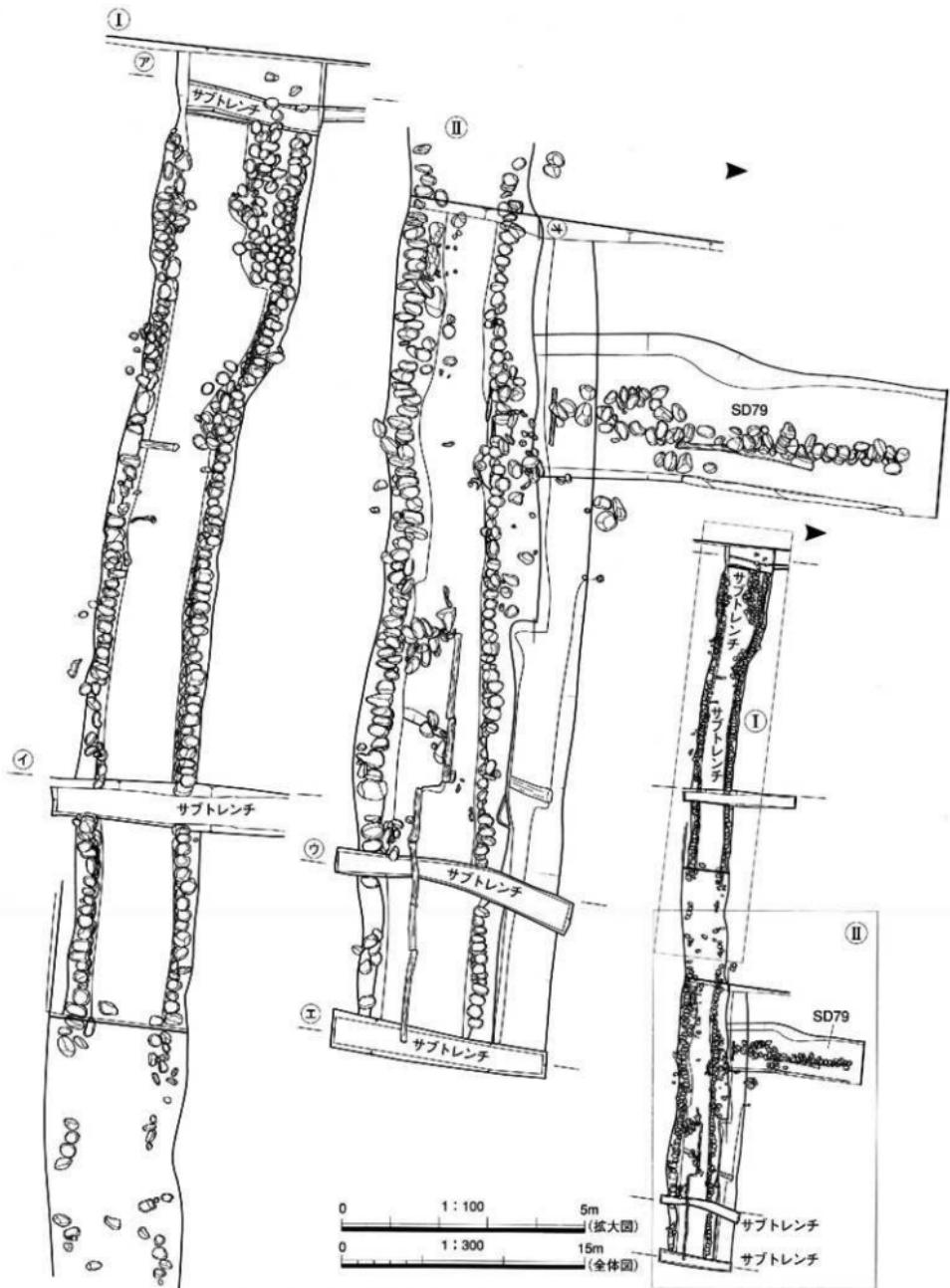
3造構とも断面形状は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。この周辺は造構が複雑に切り合って存在しているため断面観察でのみ確認することができた。断面観察から、SK10の東側をSK11が、SK11の東側をSK12が切り、SK10-SK11-SK12の順で造構が構築されていることが窺える。3造構とも覆土中から木製品や木屑、遺物を多く含んでいるため生活用品を廃棄したゴミ穴であると考えられる。また、SK10・11・12はSD08埋没後構築された造構であることが窺え、SD08埋没後にこの周辺はゴミ捨て場として機能していたのであろう。有機物などを多く含むゴミ層と含まない層が互層堆積している。断面形状からSK12はSK11の覆土である可能性があるが、煩雑さを避けるため別造構とした。

（岩崎）

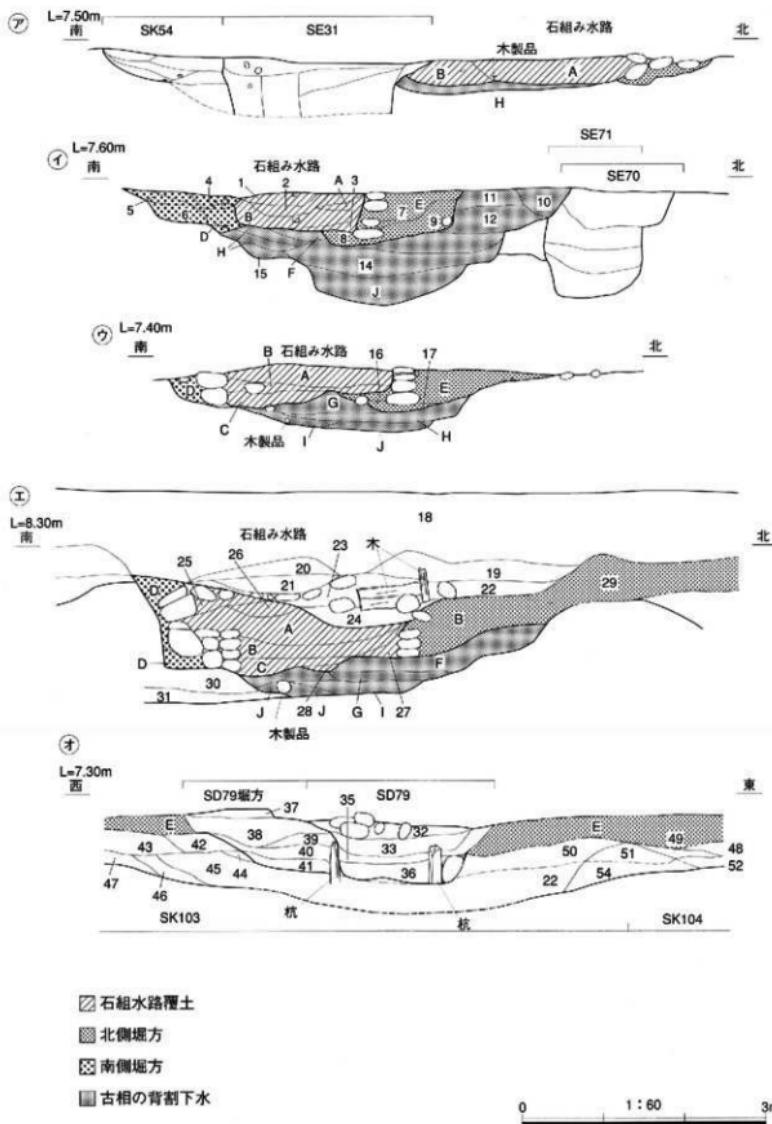


第15圖 C區全體圖





第16図 A区 造構（1） 石組み水路・SD79 平面図



第17図 A区 遺構(2) 石組み水路・SD79 断面図

基本層序

- A オリーブ黒色シルト 植物遺体を多く含む、小礫・炭化物を含む
- B オリーブ黑色粘質土 植物遺体を含む
- C 線オリーブ色砂質土 黒字・土石を多く含む、炭化物を含む
- D 黒色粘質土 炭化物を少量含む、うらごめとして小礫を含む
- E オリーブ黑色粘質土 灰白色系・小礫含む、植物遺体若干含む
- F 黒色粘質土 はば第一層
- G オリーブ黑色砂質土 小礫・植物遺体多く含む
- H オリーブ黑色粘質土 小礫・植物遺体含む
- I 黒色砂質土 小礫を多く含む
- J オリーブ黑色シルト 植物遺体を含む 充太が入る

(1)

- 1 オリーブ黑色粘質土 (7.5Y3/2) 植物遺体を多量に含む
- 2 オリーブ黑色粘質土 (5Y3/1) 植物遺体・オリーブ黑色粘質土を含む
- 3 オリーブ黑色粘質土 (5Y2/2) 植物遺体を含む
- 4 オリーブ黑色粘質土 (5Y3/1) 5m大の礫と多量に含む
- 5 黑色砂質土 (7.5Y2/1) 植物遺体を多く含む、しまり粘性強い
- 6 黑色粘質土 (5Y4/2) 植物遺体を多く含む
- 7 オリーブ黑色シルト (5Y2/2) 1~4m大の礫を含む
- 8 黑色シルト (5Y4/1) 黄褐色シルト土をしみ状に7%含む
- 9 黑色粘質土 (5Y4/1) 植物遺体を微量含む
- 10 オリーブ黑色シルト (5Y3/2) 1~4m大の礫を含む
- 11 黑色シルト (5Y4/1) 黄褐色シルト土をしみ状に7%含む
- 12 灰オリーブ色粘質土 (5Y4/2) 植物遺体を微量含む
- 13 黑色粘質土 (5Y4/1) 灰色粘質土 (2~3m大) を粒状に1%含む
- 14 オリーブ黑色粘質土 (7.5Y3/2) 植物遺体を含む
- 15 黑色粘質土 (7.5Y4/1)

(2)

- 16 黑色粘質土 (7.5Y4/1) 植物遺体を含む、炭化物を含む
- 17 オリーブ黑色粘質土 (5Y3/1) 植物遺体を多量に含む、炭化物を少量含む

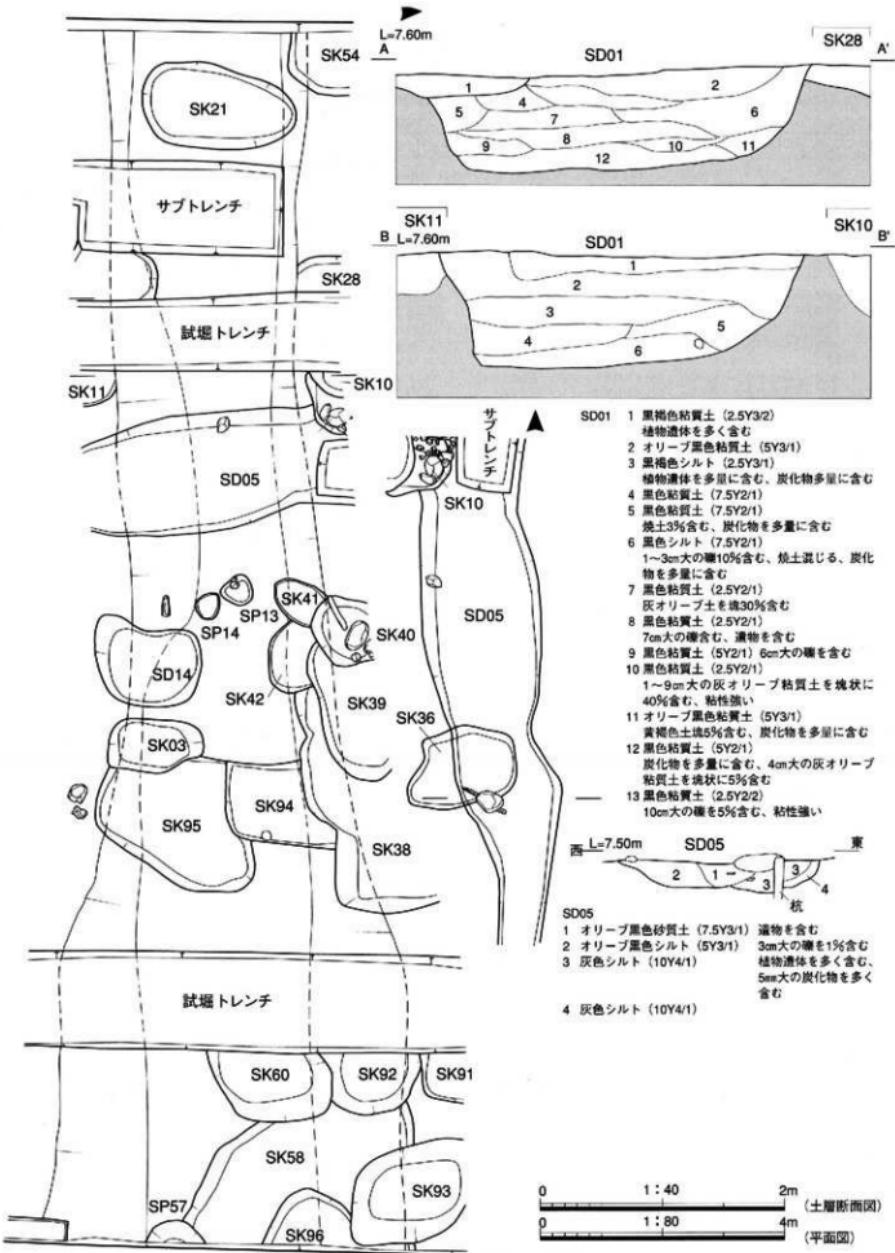
(3)

- 18 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) 硫を多量に含む、現代の造成土
- 19 黑色シルト (2.5Y2/1) 3cm~こぶし大の礫・植物遺体・遺物・褐色粒2%含む
- 20 黑色砂質土 (10YR7/1) 黑色砂質土・暗褐色砂質土の互層堆積
- 21 黑褐色砂質土 (10YR3/1) 3cm~5m大の礫を多量に含む、植物遺体・遺物・ガラスを含む
- 22 黑色シルト (2.5Y2/1) 黑褐色砂質土と混合土、大きな礫・遺物を含む、最終段階の溝の造成土
- 23 黑褐色砂質土 (2.5Y3/2) 5cm大の礫、木質遺物、植物遺体、遺物を含む
- 24 黑褐色砂質土 (2.5Y3/2) 5cm~5m大の礫・木質遺物、植物遺体・遺物・3m大の礫を含む 黑褐色砂質土との互層堆積
- 25 黑色砂質土 (2.5Y2/1) 木質遺物・植物遺体・遺物・3m大の礫を含む
- 26 黑色シルト (5Y2/1) オリーブ黑色シルト土をしみ状に10%含む
- 27 黑褐色砂質土 (N2/0) 植物遺体・被熱石を含む
- 28 黑色砂質土 (N2/0) 植物遺体・被熱石を含む
- 29 黑色シルト (5Y2/1) 5m大の灰色粘土1%、植物遺体・焼土含む、しまり粘性強い、炭化物を多量に含む
- 30 オリーブ黑色シルト (5Y3/1) しまり強い、白色シルト土をブロック状に1%含む
- 31 黑褐色シルト (2.5Y3/2) しまり、粘性強い

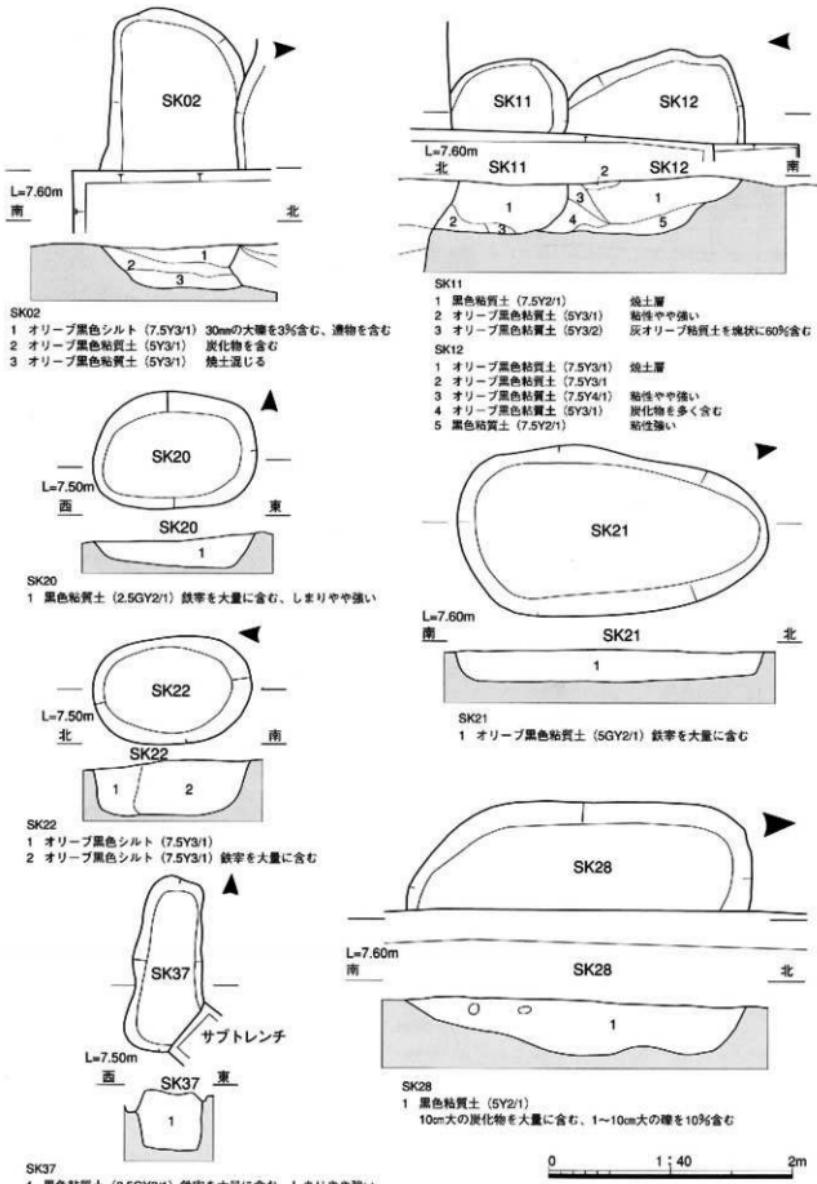
(4)

- 32 オリーブ黑色褐色土 (5Y3/1) 植物遺体を含む
- 33 オリーブ黑色シルト (5Y3/1) 植物遺体を多量に含む、遺物含む
- 34 オリーブ黑色シルト (7.5Y3/2) 植物遺体を含む、褐色粒1%含む
- 35 オリーブ黑色粘質土 (5Y2/2) オリーブ黑色砂質土と互層堆積、植物遺体を含む
- 36 オリーブ黑色シルト (5Y3/2) 植物遺体を含む、こぶし大の礫含む、粘性強い
- 37 黑褐色粘質土 (2.5Y3/2) 植物遺体を多量に含む、粘性強い炭化物を多量に含む
- 38 黑色粘質土 (2.5Y2/1) 植物遺体・木質遺物を多量に含む、粘性強い、炭化物を多量に含む
- 39 黑色砂質土 (2.5Y2/1) 植物遺体・遺物を多量に含む、こぶし大の礫含む、炭化物を多量に含む
- 40 オリーブ黑色シルト (7.5Y3/2) 植物遺体を含む、褐色粒1%含む
- 41 黑褐色粘質土 (2.5Y3/2) 植物遺体を多量に含む、粘性強い、炭化物を多量に含む
- 42 黑褐色粘質土 (2.5Y3/1) 黑褐色砂質土との混合土、植物遺体を含む、灰オリーブシルト土をしみ状に10%含む
- 43 オリーブ黑色シルト (7.5Y3/1) 灰オリーブシルト土をしみ状に5%含む、土3%、植物遺体・被熱礫を含む
- 44 オリーブ黑色シルト (5Y3/2) 1cm大の灰色粘土を姫状に2%含む、植物遺体わずかに含む
- 45 黑褐色粘質土 (2.5Y3/2) 植物遺体を多量に含む、オリーブ黑色砂質土をしみ状に3%含む、しまり粘性強い
- 46 黑褐色粘質土 (5Y2/1) オリーブ黑色砂質土との混合土、こぶし大の礫を多量に含む、植物遺体を含む
- 47 黑色シルト (2.5Y2/1) こぶし大の礫を含む、粘性強い、炭化物を多量に含む
- 48 黑褐色粘質土 (2.5Y3/1) 植物遺体を含む、灰白色シルト土を粒状に10%含む
- 49 黑色シルト (2.5Y2/1) 植物遺体を含む、黒色砂質土との混合土
- 50 黑褐色粘質土 (2.5Y3/1) 植物遺体を多量に含む、こみの腐
- 51 黑褐色粘質土 (2.5Y3/1) 植物遺体・遺物を含む、こぶし大の礫多量に含む、ごみ堆積部
- 52 黑褐色シルト (2.5Y3/1) 腐化物を多量に含む、植物遺体を含む、2cm大の礫を含む
- 53 黑色シルト (2.5Y2/1) しまり強い、植物遺体を含む、10cm大の礫を含む
- 54 黑褐色粘質土 (2.5Y3/1)

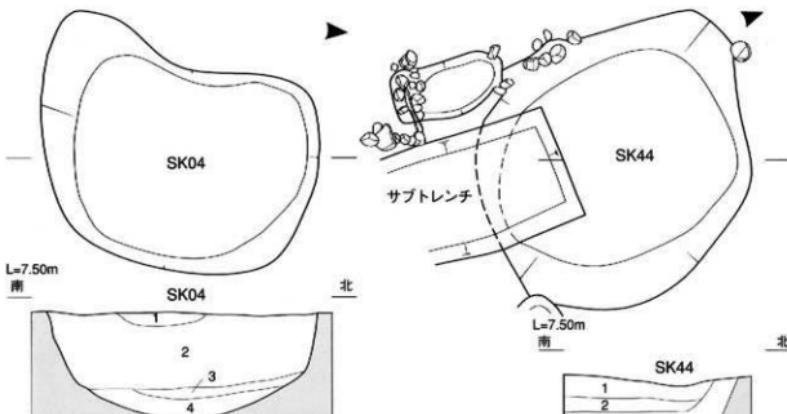
第18図 A区 造構(3) 石組み水路・SD79



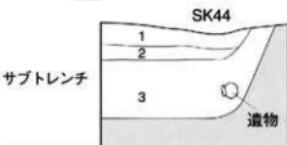
第19図 A区 遺構 (4) SD01



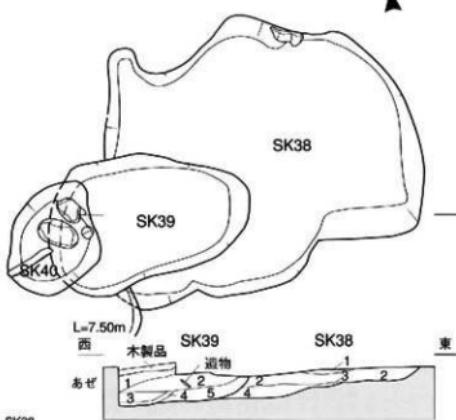
第20図 A-1区 遺構 (1)



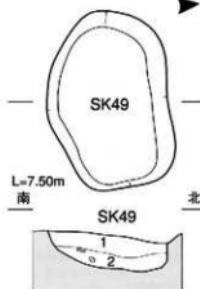
- SK04
 1 オリーブ黒色シルト (5Y3/2) 炭化物を少量含む
 2 オリーブ黒色シルト (5Y3/2) 植物遺体を大量に含む
 3 黄色シルト (10Y)
 4 オリーブ黒色シルト (5Y3/2) 植物遺体を含む



- SK44
 1 灰色シルト (5Y4/1) 遺物・植物遺体・こぶし大の礫・灰色粘質土をしみ状に30%含む
 2 オリーブ黒色粘質土 (7.5Y3/1)
 こぶし大の礫・灰色粘質土をしみ状に40%含む
 3 オリーブ黒色粘質土 (5Y2/2)
 5cm大の礫・植物遺体・黑色粘質土をしみ状に10%含む、黄褐色粘質土をしみ状に5%含む



- SK38
 1 オリーブ黒色シルト (5Y3/2) 灰オリーブシルト土をしみ状に40%含む、しまり強い
 2 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 植物遺体・灰オリーブ粘質土をしみ状に10%、赤褐色土を基状に5%含む
 3 オリーブ黒色粘質土 (5Y2/2) 3cm大の礫・炭化物を少量含む、しまり強い
 4 灰色粘質土 (5Y4/1) 単一層、しまり強い

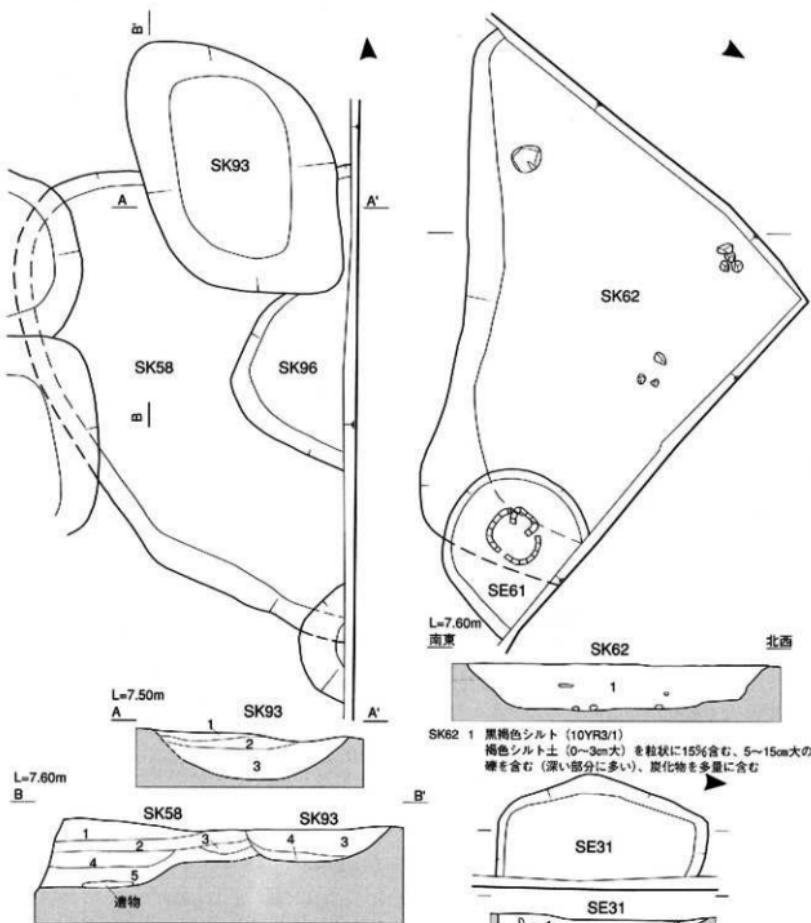


- SK49
 1 オリーブ黒色砂質土 (5Y3/1)
 植物遺体・木質遺物を含む
 2 黒色砂質土 (2.5Y2/1)
 植物遺体・遺物・黒褐色粘質土をしみ状に15%含む、炭化物を多量に含む

- SK39
 1 黒褐色シルト (2.5Y3/2)
 植物遺体・オリーブ褐色シルト土をしみ状に30%含む
 2 オリーブ黒色シルト (5Y2/2)
 遺物・植物遺体含む、黒色粘質土をしみ状に20%含む
 3 黑褐色シルト (2.5Y3/1) 植物遺体をしみ状に黒色粘質土20%含む
 4 黑色粘質土 (2.5Y2/1) 植物遺体・暗灰褐色の腐植土が層状に混じる
 5 黑色砂質土 (2.5Y3/1)
 植物遺体・灰黄色粘質土をしみ状に20%含む、黒色砂質土をしみ状に5%含む

0	1 : 30	1.5m	(SK04・SK49)
0	1 : 40	2m	(SK28・SK44)
0	1 : 60	3m	(SK38・SK39)

第21図 A-1区 遺構 (2)

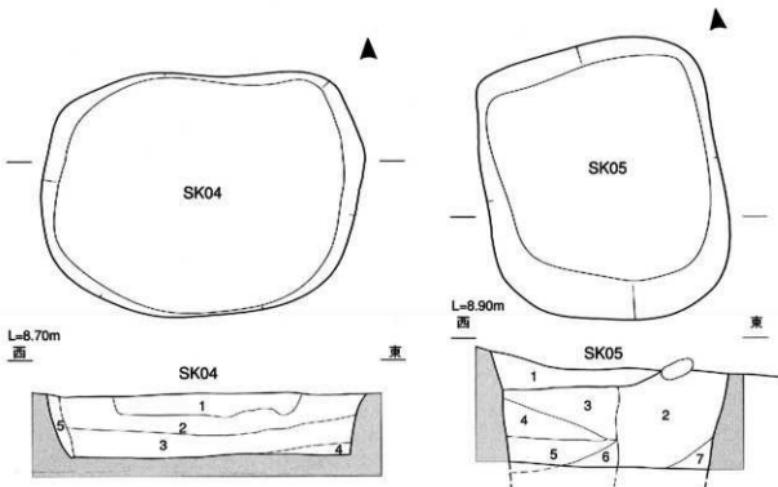


- 1 黒色粘質土 (7.5Y2/1) 10mmの礫を含む、植物遺体を多量に含む
- 2 灰色シルト (7.5Y4/1) 灰オリーブ粘質土 (4cm大) をブロック状に7%含む
- 3 灰色粘質土 (7.5Y4/1) オリーブ粘質土をブロック状に30%含む
- 4 オリーブ黒色粘質土 (5Y3/1) 3cmの礫を含む、灰オリーブ粘質土 (3cm大) をブロック状に7%含む
- 5 灰色粘質土 (7.5Y4/1) 灰オリーブ粘質土をブロック状に30%含む、5cm大の礫を少量含む
- 6 黒色シルト (7.5Y2/1) 灰オリーブ粘質土 (3cm大) をブロック状に5%含む、植物遺体を多量に含む、并戸本体

0 1:40 2m (SK58-SK93)

0 1:60 3m (SK62)

第22図 A-1区 遺構 (3)



SK04

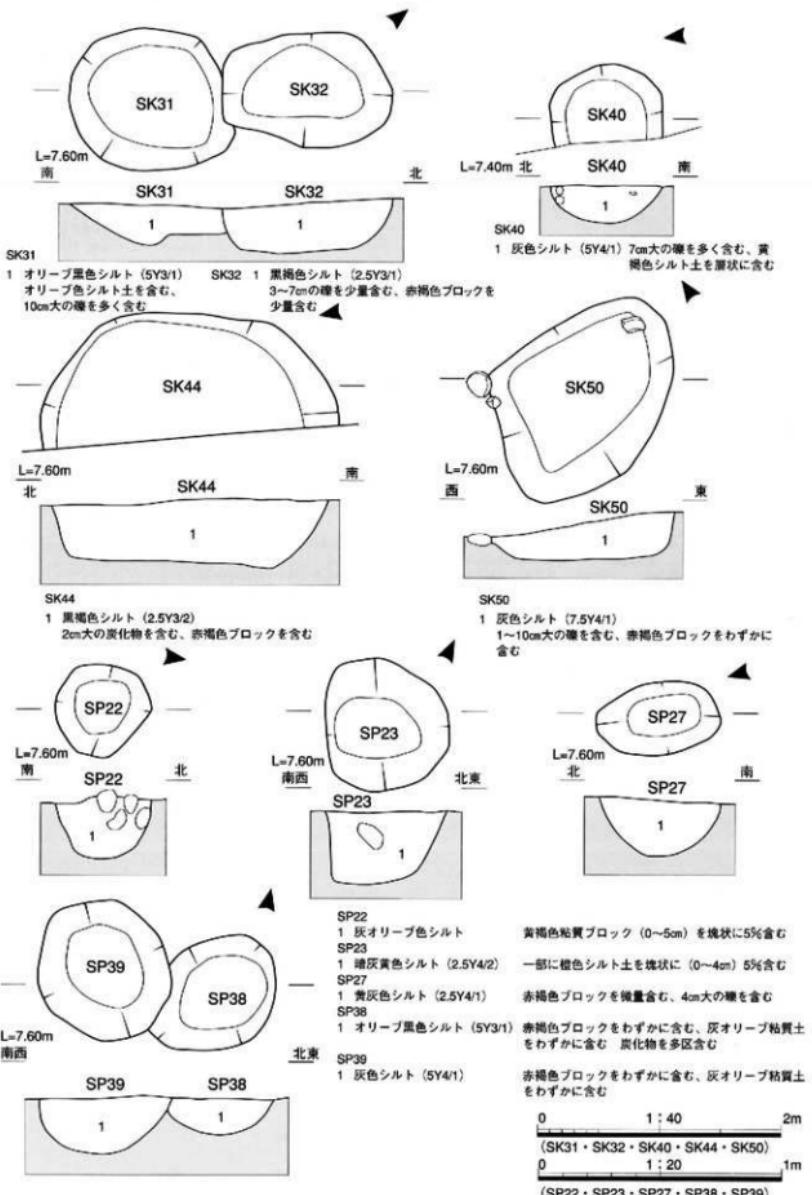
- 1 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 塩化物をブロック状に5%、橙色ブロックを5%、鉄分をしみ状に3%、1~6cmの塊を含む
- 2 黄褐色シルト (2.5Y5/3) 鉄分をしみ状に20%、灰オリーブ粘質土をブロック状に15%、7~8cmの様を含む
- 3 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 鉄分をしみ状に15%、オリーブ黄色粘質土をブロック状に10%含む
- 4 灰色シルト (10Y4/1) うすい灰色シルト土をブロック状に7%含む
- 5 黄褐色シルト (10YR5/6) 鉄分をしみ状に40%含む

SK05

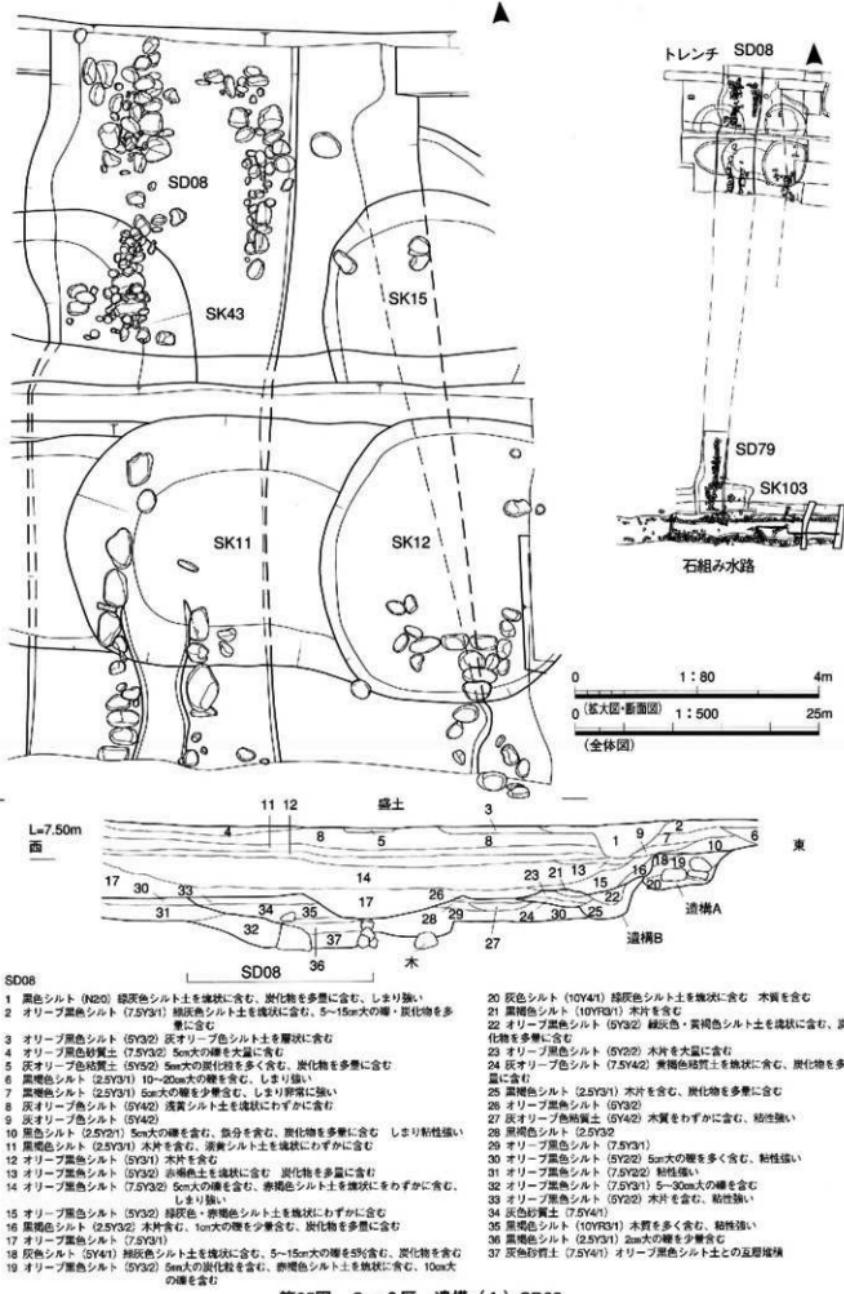
- 1 オリーブ黒色シルト (5Y3/2) 塩化物を基状に含む、2~8cm大の塊を含む、一部褐色シルト土を含む
- 2 線オリーブ色シルト (5Y4/3) SY7/3浅黄色粘質ブロック (0~5cm) を粒状に20%含む、鉄分を粒状に5%含む
- 3 黄褐色シルト (2.5Y5/3) SY7/3浅黄色粘質ブロック (0~3cm) を粒状に15%含む、鉄分を粒状に5%含む
- 4 灰オリーブ色シルト (5Y5/2) SY7/3浅黄色粘質ブロック (0~3cm) を粒状に2%含む、鉄分を粒状に5%含む
- 5 灰オリーブ色砂質土 (5Y6/2) 植物漬体を含む、5cm大の塊を含む、下部に浅黄色粘質ブロック (0~7cm大) を塊状に10%含む
- 6 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4) SY7/3浅黄色粘質ブロック (0~3cm) を粒状に25%含む、鉄分を粒状に10%含む、塩化物を多量に含む
- 7 線オリーブ色シルト (5Y4/4) SY7/3浅黄色粘質ブロック (0~2cm大) を粒状に5%含む、鉄分を微量含む

0 1 : 40 2m

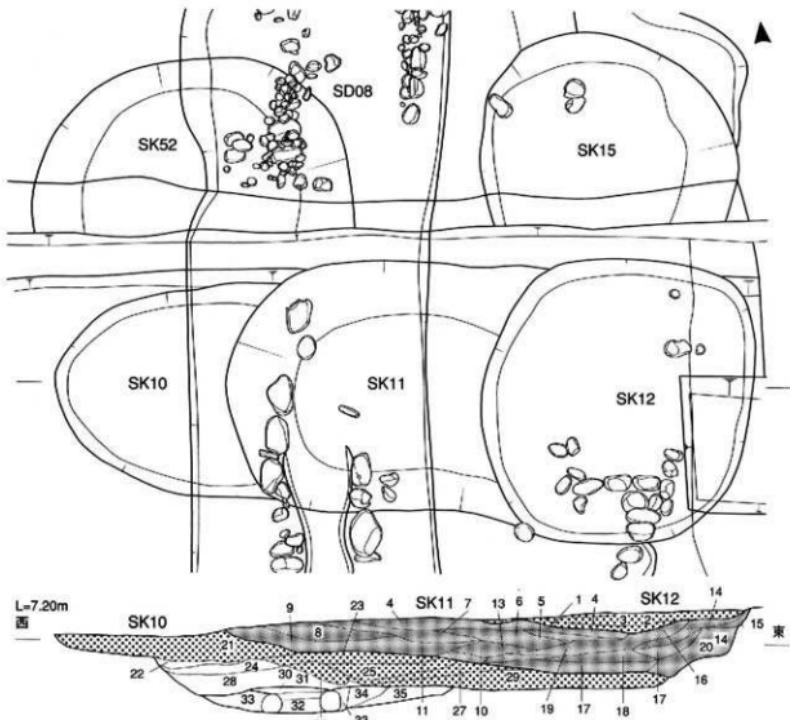
第23図 B区 造構



第24図 C-1区 遺構



第25図 C-2区 遺構(1) SD08



SK12

- 1 オリーブ黒色シルト (SY3/2) 3mm大の炭化物多く含む、木片含む 炭化物を多量に含む、しまり強い
 2 灰色シルト (SY4/1) 3mm大の炭化物多く含む、灰色粘質ブロックわずかに含む、炭化物を多量に含む、しまり強い
 3 黒色砂質土 (SY2/1) 木片を多く含む

SK11

- 4 オリーブ黒色粘質土 (SY5/2) 木片を含む
 5 黑褐色シルト (2.SY3/1) 木片を含む
 6 黑褐色シルト (2.SY3/2) 木片を含む
 7 オリーブ黒色シルト (2.SY2/2) 5mm大の木片を含む、赤褐色ブロックを少量含む、炭化物を多量に含む、しまり強い
 8 黑褐色シルト (2.SY3/1) 木片を含む
 9 オリーブ黒色砂質土 (SY2/2) 木片を含む、炭化物を多量に含む
 10 黒色砂質土 (SY2/1) 鹿蹄形が葉状に堆積、木片含む、炭化物を多量に含む
 11 灰オリーブ黒色粘質土 (SY4/1)
 12 オリーブ黒色粘質土 (7.5Y3/2) 木片をわずかに含む
 13 オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 木片含む、炭化物を多量に含む、粘性強い
 14 灰オリーブ黒色粘質土 (SY5/2) 5mm大の木片を含む、炭化物を多量に含む、しまり強い
 15 オリーブ黒色粘質土 (10Y3/1) 5mm大の木片を含む、しまり強い
 16 黑褐色粘質土 (2.SY3/1) 木片を含む
 17 オリーブ黒色粘質土 (7.5Y3/2) 赤褐色ブロックをわずかに含む、しまり強い
 18 オリーブ黒色粘質土 (SY3/1) 3mm大の木片を含む、灰オリーブ砂質土をしみ状に含む
 19 灰色シルト (7.5Y5/1) 3mm大の赤褐色ブロックを含む
 20 オリーブ黒色粘質土 (7.5Y3/2) 赤褐色粘質ブロック (3mm大) をわずかに含む、10GY黒褐色粘質土 (7mm大) を塊状に含む

SK10

- 21 オリーブ黒色シルト (SY3/1) 木片を大量に含む、3mm大の塊をわずかに含む
 22 オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 木片を含む、しまり粘性強い
 23 オリーブ黒色シルト (SY3/2) 5mm大の炭化物を多く含む、炭化物を多量に含む、しまり強い
 24 オリーブ黒色粘質土 (SY3/1) 木片を多量に含む
 25 オリーブ黒色シルト (7.5Y3/1) 木片を含む
 26 灰色砂質土 (7.5Y6/1)
 27 黑褐色砂質土 (10Y2/1) 黑褐色シルト土を塊状に含む
 28 オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 木片を含む、3mm大の塊をわずかに含む
 29 オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 黑褐色粘質ブロックを含む、粘性強い
 30 灰オリーブ灰色砂質土 (2.5GY4/1) 木片を含む
 31 灰褐色砂質土 (N3/0) 5mm大の塊を多量に含む
 32 灰褐色シルト (N3/0) 10mm大の塊を大量に含む
 33 オリーブ黒色砂質土 (7.5Y3/2) 炭化物を微量含む、塊を多く含む
 34 オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 3~5mm大の塊を多く含む、粘性強い
 35 灰色粘質土 (7.5Y4/1) 木片を含む、粘性強い
 36 灰色粘質土 (10Y5/1) 木片を含む

0 1:80 4m

第26図 C-2区 遺構 (2)

第V章 遺物

第1節 概要

本調査区から近世陶磁器、木製品、金属製品など様々なものが出土した。陶磁器では越中瀬戸、肥前系陶磁器が大半を占める。坪岡は造構の帰属時期が判別しやすいよう遺物の種類・器種ごとに図示し詳細を述べる。各遺物の詳細は遺物一覧表（添付CD-ROM）に記載しているため、ここでは遺物の種類・器種ごとに特徴・特異な点に関して総体的に述べ、また比較的資料がまとまって出土したA・C区を中心として述べる。

できる限り遺物の帰属時期を特定し、それを各文末に記した。なお、越中瀬戸は瀬戸美濃、肥前系陶磁器を模倣して製作されているため、ここでは瀬戸美濃、肥前系陶磁器の比較的編年が確立しているものを引用した。

第2節 越中瀬戸（第27図～第33図）

【皿】（第27図～第29図）

皿は口径と底部の形状にて大別することができる。口径6～7cm代の小皿と、口径8～10cm代の中皿、口径10～12cm代の大皿、17cm前後の特大皿に分けられ、また、底部は削り出し高台のものと底部糸切り痕が残るもの、底部が柱状で糸切り痕が残るもの3種類に大別することができる。越中瀬戸の特徴とも言える底部内面に菊花文が押捺されているものや、皿の内面立ち上がり全面に放射状に線刻されているものも見受けられる。また、口唇部に灯心油痕が残るものも出土し、越中瀬戸焼皿を灯明皿として使用していた痕跡がある。土師器皿（灯明皿）の出土が希薄であったことからも、灯明皿として使用していた根拠となり、越中瀬戸焼皿を日常雑器として活用していたことが分かる。本稿の越中瀬戸の分類基準は「越中瀬戸の変遷と分布」（宮田 1997）、「越中瀬戸の成立と展開」（宮田 1998）に基づき行なった。

石組み水路

石組み水路（1、2） 最上層（3～5） 上層（6～14） 鉄滓層（15、16、19）

鉄滓下層（17、18） 下層（20、21）

1～3、5、8は削り出し高台の中皿、9、10は大皿である。3の口唇部には灯心油痕が残る。5の見込み中央に菊の印花文が施されている。15、16、17は底部糸切り痕が残る小皿であり、4、11、20は中皿、12、13、18、21は大皿である。4、11、16の口唇部には灯心油痕が残る。また、7の見込み部分には重ね焼き痕が残る。6、7は底部が柱状で糸切り痕が残る小皿であり、14、19は中皿である。

A-1区

S D01上層（22～25、28） S D01下層（26、27） S D75（29） S K04（30、31）

S K31（32、33） S K38（34、35） S K62（36～39） S K64（40） S E71（41）

22、23、31、40は底部糸切り痕が残る小皿、24、30、31、36、37は中皿、25、29、33、35、38、39、41は大皿である。23、25、31、33、35、36、37の口唇部には灯心油痕が残る。26～28、32、34は底部は削り出し高台の中皿である。26、28の見込み中央に菊花の印花文が押捺されている。26は体部内面には笠先による縦方向の筋が搔き上られ菊花をあしらっている。灰釉が施され、胎土

は経密なため、山下窯で焼かれた可能性がある。27は高台が低く、他の皿と形態が異なる。胎土が粗いものの瀬戸美濃の可能性がある。26、27ともに17世紀第1四半期に帰属すると考えられる。

A-2区

S D79 (42~44) S K103 (45, 46) S K104 (47~49) 鞍部 (50~52)

42、45、47、50は底部糸切り痕が残る小皿、43は中皿である。46は底部が柱状で糸切り痕が残る中皿、48、51は大皿である。45、48、50の口唇部には灯心油痕が残る。44、49、52は底部削り出し高台の皿である。49の内面見込みには3つ菊花の印花文が押捺される。

C-2区

S D08 (53~57) S D08下層 (58) S K10 (59~61) S K11 (62~65)

S K12 (66)

53、58、59、62は底部糸切り痕が残る小皿、60、63、66は大皿である。58、60、63、66の口唇部には灯心油痕が残る。61は底部削り出し高台の大皿である。54~57、64、65は底部糸切り痕が残る特大皿である。

【碗】(第30図)

碗は胎土が淡褐色を呈して砂を含み、焼成は良好である。釉は黒色味のある褐色をした不透明な鉄釉が施される。削り出し高台であり、体部下位から底部にかけては露胎である。器形は丸碗、筒型碗が存在する。越中瀬戸碗は全体的な出土量が少ないため、肥前、伊万里の碗を多用していたことが分かる。

石組み水路

下層 (67, 68) 北側掘方 (69)

67は天日茶碗である。削り出し高台であり、露胎部に回転痕が見られる。18世紀後半以降か。68の胎土は淡褐色を呈して砂を含み、焼成は良好である。削り出し高台である。18世紀前半か。69は内外面共にロクロナデ調整である。断面には塗縫痕が認められる。

【壺】(第30図)

壺はいわゆる広口壺で、全体に暗い色調の赤褐色を呈する。口径10cm以下、10cm前半、15cm前後と器高などもそれに付随して大きく3種類に区分することができる。頸部は短く、肩部に最大径を持ち常滑不識壺に類形する。底部外周は露胎とし、底面には糸切り痕が残る。底部脇に指頭圧痕がみられるものも存在する。これは粘土から底部糸切りを行なった後底部に指をかけ取り上げた際に付いた痕跡であると考える。胎土は細かい砂を含み、長石と思われる1mm以下の白色粒子が見られ、砂・小砾を多く含む。

石組み水路

上層 (70)

A-1区

S D01上層 (71) S K44 (72)

A-2区

S D79 (73, 74) 鞍部 (75) S K103 (76) S K104 (77)

70は底部付近外面に炭化物が付着する。72は双耳壺である。頸部基底下位の対角線上2ヶ所に

扁平な粘土組を貼り付け耳とする。釉は黒褐色を呈し、底部付近は使用のためかかなりの部分が剥がれている。77は赤褐色を呈する鉄軸を全面に施釉している。

【建水】(第31図)

本来では建水とは茶道具であるが、ここで出土した建水とは器形がほぼ垂直に立ち上がる長胴の壺状のものであり、一般的な呼称を使用し建水とした。茶道具として使用していたかは不明である。壺と同様に全体に暗い色調の赤褐色を呈す。体部は回転痕が強く残り、見込は蛇の目状に露胎となる。底部脇に指頭圧痕がみられ、底部外面は露胎とする。底面には糸切り痕が残る。胎土は細かい砂を含み、長石と思われる1mm以下の白色粒子が見られ、砂・小砾を多く含む。

A-1区

S D05 (78) S K38 (79) S K48 (80)

C-2区

S D08 (81, 82) S K10 (83) S K11 (84, 85)

【擂鉢】(第32図)

擂鉢は壺、建水と同様に全体に暗い色調の赤褐色を呈す。胎土は鈍い黄橙色を呈し、1~2mmの白色粒子を含む。体部はロクロナデ、底部は回転糸きり調整である。底部脇に指頭圧痕が観察される。

石組み水路

砂層 (86)

A-2区

S D79砂層 (87) S K103 (88)

C-2区

S D08下層 (89) S K10 (91) S K12 (90)

86の擂目は9条を1単位とする。87の擂目は底部が7本、側部が20本を1単位とする。88の擂目は6条を1単位とする。内面には多量の灰が付着している。89の擂目は櫛状工具で強く施文され、6条を1単位とする。90の擂目は櫛状工具で強く施文され、9条を1単位とする。91の擂目は櫛状工具で強く施文され、6条を1単位とする。

【その他】(第33図)

蓋、秉燭、水注、灯明受皿、向付、花入れなど日常雑器以外の越中瀬戸が出土した。向付は横石などで使用されるものであり、ここで出土した向付とは口縁部が若干内湾しほば垂直に立ち上がる皿である。一般的な呼称を使用し向付とした。用途は不明である。また、底部中央をロクロ削りで作り出して高台とする削り込み高台であり、体部下半は露胎とする。

石組み水路

上層 (95, 96) 鉄滓下層 (100) 北側掘方 (94)

A-1区

S K04 (97) S K39 (92) S K62 (106)

A-2区

S D08 (98、104、105) S K103 (102) S K104 (103) 軸部 (101)

C-2区

S D08 (98、104、105) S K11 (93、99)

92・93は蓋である。外面共にロクロナデ、上端は回転糸きり痕が残る。内面は笠状に内弯し、暗褐色の鉄軸を施釉している。外面は露胎である。93の内面には重ね焼痕が残る。94は水注である。胎土は暗灰色を呈し白色粒子、黒色粒子を若干含む。体部は内面、外面共にロクロナデ、底部は糸きり調整である。注口は小さく、弦用の耳が前後に付く。光沢のある鉄軸を施釉するが、底部外面は露胎である。17世紀以降に比定される。95～99は秉燭である。胎土はにぶい黄燈色を呈する。皿部内側に側面に切り込みを入れた芯立てが載る。体部はロクロナデ、底部は糸きり調整である。外面体部、及び芯立て部に黒褐色を呈する鉄軸を施釉する。95は高台が付き、芯立て部、皿部内面に凝固した灰が付着する。97は底部中央に直径 6 mm の孔を穿つ。中央に柱を立てその脇に芯立てを作る。芯立てと受け皿の器高は同じで比高差はない。100～104は灯明受皿である。103の外面底部の 3箇所にトチンが残る。101は横付きの受皿で、棟の器高は低く 3箇所に V字型の切り込みが入る。105、106は向付である。105は黒褐色を呈する鉄軸を施釉しているが、内面の中央部、および外面底部は露胎である。106は灰オリーブ色を呈する灰軸を内外面の体部に施釉するが、見込み部を梢円形に、また底部を露胎とする。107は花入れである。胎土は純い黄燈色を呈し、0.5mm以下の砂、白色粒子を含む。体部はロクロナデ、底部は糸きり調整である。また、底部際には取り上げ痕が観察される。外面体部に橢状工具による波状文様を施す。鉄軸を内面全体と口縁部に施釉するが、体部外面は意図的に軸を飛ばす意匠である。

第3節 伊万里（第34図～第40図）

伊万里は皿・碗を中心に多量に出土した。皿・碗の素地は精緻で乳白色を呈し、焼成は良好である。高台は削り出しである。そのほとんどは透明釉または青色味のある透明釉が高台豊み付き以外に全面施釉されている。外面に呉須による施文が描かれる。編年研究が進んでいる伊万里に関してできる限り遺物の帰属時期を特定し、それを各文末に記した。本稿の伊万里の分類基準及び帰属時期、文様表現は大橋編年（大橋1994、九州近世陶磁学会 2000）に基づき行なった。

【皿】（第34図～第36図）

石組み水路

最上層 (108) 石組み水路 (109) 上層 (110) 鉄滓下層 (111) 下層 (112、113)

108～113は染付皿である。108は器厚があり法量に比して重量感がある。釉は若干青色味のある透明釉が施され艶に富む。高台豊み付きから内側は露胎である。見込みに建物のある風景、体部外面に山と思われる文様が呉須で描かれる。19世紀初頭以降に比定される。109は高台豊み付きが露胎である。主文様は草花文、裏文様は源氏香文である。18世紀後半以降に比定される。110の内面は見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、体部に格子文を描く。高台豊み付き以外は全面に透明釉を施釉する。高台豊付、及び内面見込みに円形に砂が付着しており、共に輪積みの痕跡を窺わせる。18世紀中葉～末葉に比定される。111の内面は見込みを蛇の目状に釉剥ぎ、体部に崩れた鳳凰文を描く。高台以外は全面施釉する。18世紀後半に比定される。112は見込みを蛇の目釉

剥ぎし、底部は削り出して小さく作られる。骨み付には砂が付着している。内面に二重團線と格子文を描く。18世紀中葉～末葉に比定される。113は内外面に呉須による施文が描かれる。見込み部は草花文が、体部外面は山あるいは雲が描かれる。高台疊み付きは露胎である。18世紀以降に比定される。

A-1区

S D01 (114) S D05 (115) S E31 (116) S K04 (117) S K100 (118)
S K58 (119～121)

114の見込みは蛇の目状に釉が削られ、外底部付近も露胎とする。全体に貫入がある。削り出し高台で、内側面に呉須により施文される。115は呉須による施文（内面—青海波に桜花、外側面—唐草文）、底部に2本の線が描かれ、口縁端部は楊彩される。高台疊み付きは露胎である。幕末頃に比定される。116の高台は蛇の目四型高台で、高台内に無釉の部分を幅広く作り出し、中央部分はへこませて透明釉をかける。内面の主文様は網干と水文様、見込みに五弁花を描き、裏文様は唐草文様である。18世紀以降に比定される。117は染付輪花皿である。内面見込みに、桐・葉を描き、余白に「梧桐・葉落ちて天下皆秋」の文字を2行にして書かれている。全面に透明釉を施釉する。清朝磁器（康熙頃）に同様の文様がある。裏文様は体部に線描きの唐草文様と底部脇の1本團線、高台は2重團線、高台内の1本團線を描く。1710年代に比定される。118は明緑灰色を呈する透明釉を外面底部付近に残して施釉した後、重ね積みをして窯詰めするために内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。重ね焼の痕跡が見込みに1箇所確認される。内面側面に折枝文を描く。広瀬向窯産と考えられる。18世紀中葉～末葉に比定される。119は菊花型打ちで、口紅装飾を施す。素地は精緻で白緑灰色を帯びる透明釉を疊み付き以外全面施釉している。内面の文様は半菊唐草文、七宝くずれである。また、断面には漆が付着しており漆接痕であると思われる。1810～1860年代に比定される。120は口径に対して底径が非常に小さい。また、登み付は若干広めである。灰白色の透明釉を疊み付以外に全面施釉している。文様はねじ花文様である。17世紀前半に比定される。121は体部外面にロクロナナの痕跡が明瞭である。口縁部下のナナが強く、口唇端部は若干外反する。白灰色の透明釉を疊み付き以外に全面施釉している。芙蓉手で、草花文を描く。1810～1860年代に比定される。

A-2区

S D79 (122) S K103 (123, 124) S K104 (125)

122の釉は明緑灰色を帯びた透明釉である。主文様は草花文で、内面見込みにコンニャク印判の痕跡が微かに認められる。裏文様は唐草文である。底部に2本の線を描く。18世紀後半に比定される。123は口径に比し、高台が小さく、また、高台疊み付き以外は全面に透明釉を施釉している。簡略化した荒磯文が施文される。17世紀後半頃に比定される。124は青磁割花文皿である。素地は灰白色を呈し精緻である。明緑灰色を呈する釉調を疊み付き以外に全面施釉している。内側面花文様をヘラ書きしている。断面には漆接ぎの痕跡が認められる。17世紀前半に比定される。125の主文様は区画文、植物文（松か）、裏文様は簡略化した唐草文様である。高台と体部の境に團線を描く。明緑灰色～灰白色を呈する透明釉を施釉するが、高台内の凹部は露胎である。鉛ガラスを使用した焼接の痕跡が有り、1800～1860年代に比定される。

C-2区

S D08 (126, 127) S K10 (128, 129) S K11 (130～134)

126は高台疊み付以外全面施釉している。主文様は濃みで、裏文様は唐草文である。見込みは二重圓線内にコンニャク印判でかなり崩れた五弁花を押す。高台内の銘款は「渦福」である。18世紀中葉～後半に比定される。127は体部の主文様は花唐草文、裏文様は唐草文である。見込みは手描きによる二重圓線、中央にコンニャク印判による五弁花、高台内は圓線内に「大明年製」の銘款を入れる。釉は内面に気泡が多くみられ透明感が低く、若干白濁する。疊み付は露胎である。18世紀前半に比定される。128は白磁の紅皿である。素地は白色を呈し精緻である。体部は型押しの唐草文である。疊み付きは露胎である。1850年～1860年代頃に比定される。129は見込みを蛇の目剥刺ぎする。釉剥部と、疊み付きに砂が付着しており重ね焼きの痕跡を残す。菊唐草文様、内面見込みにはコンニャク印判による五弁花を押す。高台は葵筋底氣味で、疊み付きは露胎である。18世紀中葉～末葉に比定される。130は染付方形皿である。型打ち成形であり、口唇端部は輪花となる。疊み付きは露胎である。体部は窓絵、見込みは松竹梅を環状に描く。裏文様は花唐草文様、高台内の銘款は「成化年製」である。体部に焼繙の痕跡がある。1810年～1860年に比定される。131は染付輪花皿である。手塙皿であり、体部は16弁の輪花である。内面は画面を区切った窓絵の絵付けで、対称の位置に同文様を描く。文様は芭蕉文と樹木文か。裏文様は波涛文であろう。1800～1860年代に比定される。132の体部は8弁の輪花で、口唇端部に口紅装飾をする。底部は蛇の目圓形高台で蛇の目状に釉剥刺ぎされる。内面に海浜風景文が描かれる。体部は焼継されており、底部に焼継飾の銘がある。1820年代～1860年代に比定される。133は手塙皿である。素地は白色を呈し黒色粒子を若干含む。底部は蛇の目四形高台で蛇の目状に釉剥刺ぎされる。内面は牡丹文、裏文様は唐草文である。1800～1860年代である。134は輪花皿である。疊み付きは露胎である。体部の主文様は芙蓉手による絵付け、見込みはコンニャク印判による五弁花、裏文様は蔓唐草文様である。高台内に角形銘款がある。漆緋の痕跡が認められる。18世紀中葉～末葉に比定される。

【碗】(第37図～第39図)

石組み水路

最上層 (135) 上層 (136, 137) 鉄滓層 (138) 鉄滓下層 (139, 140)
下層 (141, 142) 北側掘方 (143, 144)

135の釉は若干青色味のある透明釉で高台疊み付きは露胎である。体部外面中位にコンニャク印判による菊花文、下位に3本線が描かれる。18世紀前半に比定される。136は透明釉を全面に施釉する。線描きの簡略な施文である。18世紀代に比定される。137は広東碗である。体部には2種類の七宝文様、見込みには丸文の中に十字花文様を描く。1810～1840年代に比定される。138は通称くらわんか碗といわれるものである。釉は若干青色味のある灰白色を呈し、呉須による雪の繪文が描かれている。高台疊み付きは露胎である。18世紀中葉～末葉頃に比定される。139は体部外面中位に菊花文・下位高台付近に満連続文を呉須で描く。内外面に土中の鉄分と考えられる褐色の付着物が見られる。18世紀末～19世紀初頭に比定される。140の体部は下位で折れ垂直に立ち上がり、削り出し高台である。釉は若干青色味のある透明釉が施釉されるが高台疊み付きは露胎である。体部外面に呉須で草花に蝶の舞う景文が描かれている。

1820～1860年代に比定される。142の体部は下位で折れ垂直に立ち上がる。高台豊み付きは露胎である。体部外面に呉須による連続矢羽根文が上下の團線間に描かれ、高台内にも線描きの円がある。1780～1810年代に比定される。143は染付小杯である。体部内外面共に、回転ロクロナデ成形、高台を削り出し、口縁部は端反とする。高台豊み付きには重ね焼の痕跡が認められる。上方に雁文、下方に草花文を描く。18世紀代に比定される。144は口縁部に、鋸齒状の雨降り文様を描く。18世紀前半頃に比定される。

A-1区

S D01上層 (145～147) S E31 (148) S K38 (149, 150) S K49 (151)
S K93 (152～154)

145は口縁部に濃筆による鋸齒状の簡略化した雨降り文、底部に1本、高台に2本の團線を描く。18世紀前半に比定される。146は端反碗である。主文様は桜花文様、また、口縁部および底部に2重團線、底部高台内に1本の團線を描く。幕末頃に比定される。147の体部は底部付近で丸く折れほぼ垂直に立ち上がる。体部外側面には上下2本の團線間に牡丹唐草文が呉須で描かれる。高台豊み付きは露胎である。幕末頃に比定される。148は筒型碗である。外面体部の文様は團線を入れ、上面に矢羽根文、下面に蓮弁文、内面の口縁部は四方擣文様、見込みにはかなりくずれた五弁花を描き、また、高台に1本、見込みに2本の團線を描く。高台内は2重方形枠内に「満福」を銘款を記す。18世紀中葉～末葉に比定される。149の主文様はコンニャク印版による若松文である。底部に3本の線を巡らす。器表には細かい貫入が顯著である。18世紀前半に比定される。150の主文様はコンニャク印版による囝鶴文、および桐文である。色調が薄く、また滲んではやけている。底部に3本の線を描く。18世紀前半に比定される。151の文様はコンニャク印判による三巴文を手描きで草花文を描く。高台内の銘款は「金」のくずしである。底部に3本の線を巡らす。18世紀前半に比定される。152の文様はコンニャク印版による囝鶴文、桐の葉文である。底部に3本の線を描く。高台内銘款は「大明年製」である。18世紀前半に比定される。153の文様はコンニャク印判による桐の葉、手描きによる草花文である。高台に2本の線を描く。18世紀前半に比定される。154は口縁部に雨降り文様を描き、底部に3本の線を巡らす。18世紀前半に比定される。

A-2区

S D79 (155～158) S K104 (159) S K103 (160～164)

155は小碗である。外面体部に風景（山、若松等）文を描く。18世紀末葉～19世紀初頭に比定される。156は色絵碗である。1690年以降の金襷手タイプの製品である。体部の文様は菊花文、底部脇は満文である。18世紀後半に比定される。157は小碗である。骨み付きは露胎である。文様は二重網目文である。18世紀前半に比定される。158は筒型の碗である。外面体部文様は区画文の中に筆目、菊散らし文、四方文、底部に渦文、内面は口縁部に四方擣、見込みはコンニャク印判による五弁花である。18世紀中葉～末葉に比定される。159は色絵碗（金）である。釉は透明釉で全面に施釉されている。口唇端部に口紅、内面には菊花の花弁を施文し、中心を金泥している。1800～1860年代に比定される。160は体部の主文様は草花文、高台内の銘款は「大明年製」である。底部に3本の線を描く。18世紀に比定される。161は中央に3本の横線を描き、中央に丸文（中に連弧文）、底部に3本の線を描く。18世紀前半に比定される。162の文様は山水文と思われる。口縁部に1本、底部に3本の線を描く。18世紀前半頃に比定される。163は体部の文様

が濃筆により鋸歯状に描かれた雨降り文である。底部に3本、高台内に1本の線を描く。18世紀前半に比定される。164の文様はコンニャク印判による松文、手書きの草花文、底部に3本の線を描く。また、高台内に囲線を描き、「大明年製」の文字を入れる。骨み付きに砂が付着する。18世紀前半に比定される。

C-2区

S D08 (165~169) S K10 (170~179) S K11 (180~187) S K12 (188~193)

165は筒型の染付碗である。体部に竹葉文を描き、見込みは囲線内にコンニャク印判による五弁花を押す。口縁は内面に2本、外面に1本囲線を描く。18世紀中葉～末葉に比定される。166の体部文様は芙蓉手の施文である。絵巻を描き宝（方勝）文と籠目、他方は薄文、見込みは囲線内に源氏香文を描く。漆懶の痕跡が認められる。18世紀後半に比定される。167は口縁内に濃線を入れ、体部外面に井桁文様と花卉文、見込みは波文状のものを施文する。1820～1860年代に比定される。168は体部外面の上下に各々6本、5本の囲線を入れ、その空間に二重格子文様を描く。見込みは囲線内に波千鳥文。豈み付きは露胎である。体部には焼緋の痕跡が認められ、また底部には赤色顔料で焼緋御の銘が撇かに残る。1820年～1860年代に比定される。169は端反碗である。施文は牡丹唐草文を主体とし、高台際は蓮弁区画内に瓔珞文、見込は二重囲線内に草花文を描く。高台内に角形鉢款を入れる。1820年～1860年代に比定される。170は小碗である。体部は丸みを持ち、高台は小さい。非常に薄づくりである。高台内に砂が付着しており、豈み付きは露胎である。体部に楓文と流水文を描く。17世紀末～18世紀前半に比定される。171は盃である。体部に草花文、見込みは囲線内に花卉文である。18世紀末～1860年頃に比定される。172は半球形の碗である。体部は上下に囲線を入れその間に竹笠文を描く。また、内面は口縁部に2本の囲線、見込みは囲線内に宝文である。高台周囲は黒い汚れが付着している。1780～1810年代に比定される。173は小型の丸碗である。口縁部の外側に連続した雷文を描く。1820年～1860年代に比定される。174は白磁の端反碗である。底部は削り出し高台である。灰白色を呈する透明釉を施釉するが豈み付きは露胎である。器表の貢入は微細で顯著である。1810年～1860年代に比定される。175は筒型碗である。体部に菊花水波文、見込みは囲線内に星梅鉢の五弁花である。内面口縁部に2本、高台際に1本の囲線を入れる。豈み付きは露胎である。18世紀後半～1810年代に比定される。また、同様5弁花の表現より瀬戸美濃の可能性もある。176は広東碗である。発色の良い呉須を用い素描きにより文様を描く。囲線を外面の口縁部に1本、底部に3本、内面は口縁部に2本、見込みに1本と多用している。見込みと側面に「壽」の字を入れる。1780～1790年代に比定される。177の体部は松寄せ文様、見込みは二重囲線内に宝文である。また、体部には焼緋痕がある。1800～1860年代に比定される。178は外面体部の上下に濃で闊線を入れその中に花唐草文を描く。見込みは細い二重囲線内に花卉文である。高台内に朱で焼緋師の銘がある。また、体部には焼緋の痕跡が認められる。1820年～1860年代に比定される。179の体部文様は蟹と如意雲、口縁部は如意頭文、見込みは鷺文である。高台内の銘款は角形鉢款がある。1820～1860年代に比定される。180は小碗である。高台が小さく小振りである。透明釉は骨み付きのみ釉剥ぎされている。体部文様は草花文である。1820年～1860年代に比定される。181の体部文様は花唐草文様である。豈み付きは露胎であり、内外面共に貢入が顯著である。体部に焼緋痕がある。1800～1860年代に比定される。182は端反碗である。口縁部、外面、及び見込みに同じ緞縞文様を描く。体部の施文は濃淡を付け、見込みは丸文の中に描く。また、底部際は連続した劍頭文である。

1810年代～1860年代に比定される。183は蓋付き染付碗である。203の蓋と同文様であり、また、同一造構から出土しているため、一对のものである可能性がある。口縁下部がくびれる。口縁部は波涛文、外面は氷裂梅花文、見込みは花卉文か。体部には焼繼の痕跡が認められる。1800～1860年代に比定される。184は端反碗である。体部は樹木文、口縁内部は墨彈きによる靈芝雲、見込みは宝文（卷物）である。1820年～1860年代に比定される。185は丸型湯飲み碗である。体部に花卉文、見込みは手書きによる五弁花である。俊み付きは露胎である。1780年～1810年代に比定される。186は口縁部の文様は七宝繫ぎ、如意頭文、体部は鷺、花卉文と多種多様である。見込みは蟹文様である。18世紀～19世紀初頭に比定される。187は口縁部に濃線を入れ外面に南龍と四方襷、内面の口縁部は輪宝繫ぎ文、見込みは雨龍であろう。1820年～1860年代に比定される。188は端反碗である。口縁部内部に二重圓線、見込みは岩に碎ける波涛文、体部は東屋風景文である。1820年～1860年代に比定される。189は端反碗である。口縁部は墨彈きによる如意頭文、見込みは岩に碎ける波涛文、体部は東屋山水文である。高台内に角形の鉢款がある。1820年代～1860年代に比定される。190は広東碗である。底部の器肉が厚く高台が高い。体部は濃みによる竹葉文、草花文、見込みは花卉文か。1780年～1840年代に比定される。191は広東碗である。底部の器肉は薄くくぼむ。体部は四方襷七宝繫ぎ文、見込みは花卉文か。体部には焼繼の痕跡が認められる。1780年～1840年代に比定される。192は広東碗である。薄体部は素描きによる筆葉文、見込みも同文様である。漆繼痕が残る。1780年～1840年代に比定される。193は広東碗である。体部は芙蓉手とし、仙芝祝寿文を描く。体部に黒色の付着物がある。1810年代頃に比定される。

【猪口】(第39図)

いわゆるそば猪口といわれるものをここでは取り扱い、別に記載する。素地は灰白色を呈し、0.5～1mmの黒色粒子を含み精緻で体部は直立気味に立ち上がり、底部には低い高台が付く。

石組み水路

上層 (194、195)

A-2区

S K 103 (196)

C-2区

S D08 (197、198) S K10 (199)

194は透明釉が全面に施釉され無文である。底部高台内には煤が厚く付着している。18世紀中葉頃に比定される。195の体部に草花（藤花か）、底部に2本の線を描き、透明釉を全面に施釉する。また、焼接ぎの痕跡が2箇所に認められる。外面底部には高台付近に若干の煤が付着し、高台内には赤色顔料により文字が書かれていが、判読不能である。1800～1860年代に比定される。196は体部に草花文、底部に2本の線を描き、高台内に圓線を描き「大明年製」の文字を入れる。18世紀前半に比定される。197は伊万里の染付猪口である。底部は蛇の目凹形高台である。体部は山水風景文、口縁内面は四方襷文、見込みは圓線内に岩山を描く。透明釉を高台内のくぼみと、体部に全面施釉する。体部には焼繼の痕跡があり、高台内には赤色顔料で焼繼の鉢を残す。1800～1860年代に比定される。198の体部に山水文を描く。高台内に若干砂が付着している。18世紀前半頃に比定される。199の高台は蛇の目凹形高台である。口唇端部に辰砂による口紅装飾をする。文様は草花文、見込みは昆虫文である。1820年～1860年代に比定される。

【その他】(第40図)

石組み水路

最上層 (200) 上層 (201) 北側掘方 (202)

A-2区

S D79 (205)

C-2区

S D08 (204, 207) S K11 (203) S K15 (206)

200は染付仏瓶である。高台内の割り込みは浅く、杯部は浅く上方に向かって開く。釉は乳白色を呈し、脚部豊み付きは露胎である。杯部外面に呉須で施文（如意頭か）される。一部に漆雜の痕跡が認められる。18世紀後半に比定される。201は仏瓶器である。底部は削り出しているが、高台内の割り込みは深い。透明釉を施釉するが高台内は露胎である体部外面に線を模様状に巡らす。18世紀末～1860年代に比定される。202は染付碗の蓋である。豊み付きのみ露胎とする。見込みにくくした「壽」の文字、主文様は3種類の丸文様（竈日、七宝、線と点）である。見込みにトテンの跡が3箇所に確認される。18世紀末頃に比定される。203は染付碗蓋である。内面口縁部は四方捧文、見込みに花卉文、表面は冰裂梅花文である。183の碗と同文様であり、また、同一造構から出土しているため、一对のものである可能性がある。漆が断面に付着しており継いだ痕跡と思われる。豊み付きは露胎である。1780～1860年代に比定される。204染付蓋である。二重格子文様を体部外面と、内面口縁部に描く。見込み文様は二重井桁文で中央に点を打つ。1820年代～1860年代に比定される。205は染付瓶である。ろうそく型で油壺利といわれているものである。豊み付きは露胎である。体部は若松に梅文、口縁部下は蜻蛉草文様を描く。1780～1860年代に比定される。206は染付鉢である。素地は白色を呈し黒色粒子を含む。体部は若干丸みを保ちつつ緩やかに開き、口唇部は外側に引き上げられる。底部は蛇の目凹形高台である。見込みに海浜山水文、口縁部は簡略化された波涛文を描く。1820年～1860年代に比定される。207は染付向付である。口縁部は外反し口唇端部は若干内傾する。体部は8角形に型成形し、底部は蛇の目凹形高台とする。体部内面は、芙蓉手とし竹葉文と山水文を交差に描き、見込みに山文を入れる。外面は宝文と肩か。透明釉を高台内の凹みと、体部に全面施釉する。体部には焼継の痕跡があり、また高台内には赤色顔料で焼継師の銘を残す。1800～1820年代に比定される。

第4節 唐津 (第41図～第43図)

唐津は本調査区から皿・碗・鉢・擂鉢を中心少量ではあるが出土した。胎土は暗赤褐色を呈し精緻である。また、皿・鉢の中には藁灰釉で内面及び体部外面に施釉し、体部内面に白泥による波状文を施文するものも存在する。できる限り遺物の帰属時期を特定し、それを各文末に記した。また、本稿の唐津の分類基準は及び帰属時期は大橋編年（大橋1994、九州近世陶磁学会 2000）に基づき行なった。

【碗】(第41図)

石組み水路

鉄滓層 (209) 鉄滓下層 (208)

A-2区

S K103 (210)

C-2区

S D08 (211) S K11 (212)

208の胎土は赤色を呈し緻密、焼成は良好である。釉は透明釉で胎土の色合いが浮き上がる。底部を除く内外面に白泥によって不透明な模様が施される。外面全体に細かい貫入が入る。高台骨み付きは露胎である。209の釉は暗い色調のオリーブ色をした灰釉で、細かい貫入が内外面全体に入る。また外面口縁下に2本、部最下位に数本、高台外周に1本の呉須による線が描かれる。高台骨み付きは露胎である。17世紀末～18世紀代に比定される。210の高台は露胎とし、高台内は兜巾を持たない。体部に鉄釉で、簡素な植物文様を描く。17世紀後半頃に比定される。211は刷毛目碗である。外面は白化粧土を波状に刷毛塗りして文様し、透明釉が全面に施釉される。内面には鉄成分を含んだ付着物が観察される。1690年～1780年代に比定される。212は銅緑釉碗である。削り出し高台で露胎とし、他は全面施釉である。口縁部には敲打痕が認められる。火人として転用した可能性がある。1690～1780年代に比定される。

【皿】(第41図)

石組み水路

上層 (213) 鉄滓下層 (214)

A-1区

S K38 (215)

A-2区

S D79砂層 (218) S K103 (216, 217)

213は唐津京焼風陶器である。高台は露胎とする。内面には山水文を施釉する。17世紀末～18世紀末葉頃に比定される。214は見込み部分が蛇の目状に釉剥ぎされ、底部高台骨み付きから内側は露胎である。高台骨み付きに重ね焼き時点の砂が少量付着して残る。18世紀末～幕末に比定される。215は鉄釉すり絵鉢である高台骨み付きは露胎である。白い化粧土を用い粗紙にて文様をつける。口縁部の施文は剣頭文、以下菊花文、波状文（またはよろけ繪文）である。見込みに砂・胎土日の痕跡が6箇所観察される。17世紀末～18世紀前半に比定される。216は重ね焼をするため見込み部分を蛇の目釉剥ぎしている。17世紀後半頃に比定される。217は見込み部分を蛇の目釉剥ぎし、その部分に鉄漿を塗る。文様は呉須により老松文を描く。17世紀後半に比定される。218は刷毛目皿である。釉は薄灰釉で内面及び体部外面に施釉するが、見込み部分の釉を蛇の目状に搔き取り、体部内面に白泥による波状文を施文する。内面には黒色の二次焼成痕が観察される。1780～1860年代に比定される。

【鉢】(第42図)

A-1区

S D01 (219)

A-2区

S D79砂層 (220)

219は灰釉刷毛目鉢である。口縁部を外反させ、粘土を貼り付け突帯をめぐらす。体部はロクロナデ、底部は削り出し高台で、削りは体下部まで及ぶ。高台は厚作りで、外側を斜めに削り落とす。灰釉を施釉するが、底部は露胎である。見込み部分に砂が付着しており重ね焼きをした痕跡が認められる。また、内面の装飾は白化粧による波状文である。17世紀末～18世紀前半に比定される。220は鉢である。文様は白化粧による内面は横線、外面は波状文である。また、体部外面下半、及び高台内は鉄釉が施釉されるが、高台から疊付きは露胎である。内面見込み部分に輪状に、また高台内に胎土目の砂が付着している。18世紀後半に比定される。

【その他】(第42図)

石組み水路

下層 (222) 北側掘方 (224)

C-2区

S D08 (223, 225) S K10 (221)

221は刷毛目瓶である。肩部および体部下部に刷毛目装飾を施し、底部は白化粧土を施すが疊み付きは露胎である。18世紀代に比定される。222は向付である。胎土は灰褐色（露胎部分の表面は茶褐色）であり、砂を多く含み緻密、焼成は良好である。体部は輪軸成形後に四方から内側に折り曲げられ、口縁部の平面系は角丸方形をする。釉は透明感の弱いオリーブ色をした灰釉が施され、全面に細かい買入が入る。底部高台内は露胎である。处处に鉄釉による斑が飛び、体部中位には鉄釉による線描きが四方に見られる。また口縁下縁帯部には粘土粒を鉢あるいは珠に模して四方に貼り付けてある。粘土粒は欠損部分もあるが各面に12個を対面方向に配置したようである。223は向付である。白泥により渦巻き状に刷毛目文様を描く。体部には指頭大の凹みが対称的位置に配置される。透明釉を施釉するが底部は露胎である。器表の貫入は微細で頗著である。1690～1740代頃に比定される。224は鉄釉壺である。口縁部はロクロナデ、体部は叩きによる調整である。内面の當て具及び、外面の叩き共に格子目である。肩部には繩状突帯が2条巡る。外面には所々に炭化物が付着している。17世紀後半に比定される。225は鉄釉小壺である。体部はロクロナデで、ロクロ目を明瞭に残す。口唇端部は外側に若干引き出され小さい縁帯を作る。鉄釉が体部と口縁部に施釉されるが、口縁上面の釉は剥ぎ取られる。また、底部中央部に孔が穿たれており、壺として使用された後、植木鉢に転用し再利用されたと思われる。17世紀後半頃に比定される。

【播鉢】(第43図)

A-2区

S K103 (226, 227)

C-2区

S K10 (228, 229) S K11 (230)

226の体部はロクロナデ、底部は糸切り痕が残る。14条を1単位とする播目を櫛描きで施し、引きっぱなしで先端を揃えない。底部際に取り上げ時の指頭痕を残す。鉄釉を口縁部のみに施釉する。17世紀後半に比定される。227の底部は糸切り痕が残る。注口部分が若干遺存しているが、簡略化したようで形骸化した様相がうかがえる。口縁部を玉縁状とし、鉄釉を施釉する。播り目は

11条を1単位とした櫛描で、先端は引きっぱなしであり、横方向に櫛り目施し交差させている。17世紀後半～18世紀前半頃に比定される。228の体部は叩き成形後、ナデ調整を行い、高台は貼り付けた後に削り調整を行う。描目は17条を1単位とし幅の広い施文具で丁寧に櫛描きする。各単位の間隔はほとんど空かず上端を撫で揃える。18世紀後半に比定される。229の体部外面は回転方向の箋ナデによって仕上げられている。描目は19本を1単位とし、各単位の間隔は狭い。削り出し高台で、底部高台内は露胎である。230の体部はロクロ削りのち、ナデ成形である。貼り付け高台で、口縁端部は外反し凸帯を作る。また、外面口縁部直下に浅い沈線を1条巡らす。描目は19本を1単位とし、各単位の間隔は狭い。描目の上端は口縁下で撫で揃えられ丁寧な施文である。17世紀末～18世紀前半に比定される。

第5節 潤戸美濃（第44図）

瀬戸美濃は本調査区から碗を中心に少量ではあるが出土した。陶器は越中瀬戸と類似しているため判別は困難であるが、越中瀬戸は素地が淡褐色をして砂を含み、胎土が粗いのに比して瀬戸美濃の素地が灰白色を呈し胎土は精緻である。また、黒釉拳骨碗など特徴のあるものや、器形・製作技法などから瀬戸美濃とした。また、磁器は伊万里や、肥前系陶磁器に類似しているが、その製作技法や文様の差異からもできる限り区分し瀬戸美濃とした。遺物の帰属時期を特定し、それを各文末に記した。また、本稿の瀬戸美濃の分類基準は及び帰属時期は瀬戸市史編纂委員会1993・1998に基づき行なった。

【皿】（第44図）

A-2区

S K104 (231)

233染付皿である。素地は白色を呈し精緻である。灰白色の透明釉を、高台畳み付以外全面施釉している。内面に牡丹を大胆に描く。19世紀初頭以降に比定される。

【碗】（第44図）

石組み水路

上層 (232)

A-1区

S K38 (233)

A-2区

S D79 (234) S D79砂層 (235) S K103 (236・237)

C-2区

S D08 (238～243) S K11 (244・245)

232は瀬戸美濃のせんじ碗か。胎土は暗灰色を呈する。体部下方は丸みを帯び、上方は直立する。体部中央に稜があり、その直上には浅い凹が一周する。高台端部はナデを施し、高台脇に、箋状のT.具で櫛様の施文を行う。緑釉を施釉し、緑、紫の顔料で草花文様を描く。18世紀代に比定される。233は染付碗である。木賊文と草花文を組み合わせた文様と思われる。19世紀初頭以降に比定される。234は瀬戸美濃の磁器碗か。灰釉で外面下部に円弧状の文様を描き、その文様の下

方から高台にかけて鉄釉を施釉し、豊み付きの鉄釉を剥ぐ。その後、透明釉は高台を除いて施釉する。19世紀初頭以降に比定される。235は黒釉拳骨碗である。体部は黒釉が施釉され、長石を散りばめ景色とする。底部外面は削り出しで成形された蛇の目高台で、露胎であるが高台内に黒釉を薄く施釉している。18世紀後半期に比定される。236は瀬戸美濃の小碗か。削り出し高台で、高台およびその周りは露胎である。縁、赤、藍の顔料で松文様を施している。器表は細かい貢入が顯著である。18世紀前半頃に比定される。237は瀬戸美濃のせんじ碗か。高台部分には鉄釉を施釉する。体部に井桁様の垣根の鉄絵文、白泥で半菴を描いている。見込みにトチン痕が2箇所にある。18世紀代に比定される。238は鉄釉丸碗である。底部は削り出し高台である。高台際に鉢目を巡らす。光沢の良い鉄釉を底部以外に施釉する。18世紀後葉～幕末に比定される。239は体部外面に海浜山水文、見込みの文様は岩に碎ける波涛文である。19世紀前半～幕末に比定される。240は体部外面に桜花文、折枝松葉文、見込みの文様は折枝松葉文である。19世紀前半～幕末に比定される。241は濃みで体部外面及び見込みに花卉文を描く。内外面に施した側線はにじむ。19世紀前半～幕末に比定される。242は鎧手碗である。内面と口縁部に鉄釉、外面に灰釉を施釉する。18世紀後葉～19世紀前半に比定される。243は黒釉拳骨碗である。光沢のある黒色釉を施釉するが底部は露胎である。18世紀後葉～19世紀前半に比定される。244は白泥を内面、及び外面体部に塗り、樹木（松か）文の鉄絵を描く。唐津の可能性もある。1690～1780年代に比定される。245は湯飲み茶碗である。口縁内外ともに濃線を引き、体部文様は牡丹唐草文、見込みは岩に碎ける波涛文か。19世紀前半～幕末に比定される。

【その他】(第44図)

石組み水路

上層 (246, 249)

C-2区

S D08 (247, 248, 250) S K10 (251, 252)

246は瀬戸美濃の小型の水注か。灰オリーブ色を呈する灰釉を施釉するが、底部外面は露胎である。上面に菊花文様を型押しで施文している。内面に巻様の付着が認められる。18世紀後半～19世紀初頭頃に比定される。247は灰釉植木鉢である。体部はロクロナデ、底部は糸引き調整である。体部は底部から直立して立ち上がり口縁部は外反して端反りとなる。底部中央に直径1cmの孔を穿つ。灰黄色を呈する光沢の良い灰釉を体部及び口縁部に施釉する。器表には微細な貢入が顯著に入る。18世紀後半～幕末に比定される。248は灰釉片口鉢である。体部はロクロナデ、底部は削り出し高台である。鈍い黄色を呈する灰釉を底部以外に施釉する。1820～1830年代に比定される。249は鉄釉の火入である。体部は直立し、口縁端部は内側に折れ突起が形成される。体部外面は丸鑿により上からやや斜め方向に掘り込みをいれて竈を作る。光沢のある黒釉を体部外面と口縁部内外面に施釉する。江戸後期に比定される。250は鉄釉の火入である。体部はロクロナデ、底部は削り出し高台である。体部には対称となる二方向に丸鑿で半菊状の文様を彫る。外面体部、および口縁部に鉄釉を施釉し、その後うのふ釉を上掛けする。内面、口縁部下に煤が付着している。18世紀中葉に比定される。251は瀬戸の仏花瓶である。口縁部はラッパ状に開き、口唇端部は内側に折れる。肩部に渦巻状の耳が2個付く。光沢の良い黒色を呈する鉄釉を施釉するが豊み付きから高台内は露胎である。18世紀後半頃に比定される。252は鉄釉の壺である。胎

土は褐色を呈する。体部内面にはナデ痕が明瞭に残る。口唇端部は外側に若干引き出され凸帯を作る。暗褐色を呈する光沢の良い鉄釉を施釉するが、口縁部、及び底部は露胎である。

第6節 土師器（第45図）

土師器は皿と土師質の乗燭が数点出土したのみである。土師器皿は灯心油痕が見られ、灯明皿として主に使用していたことが分かる。出土した点数が希薄であることや、越中瀬戸の小皿に灯心油痕が付着しているものが多量に出土したことなどから、灯明用としては越中瀬戸皿を主に使用していたと理解される。

A-1区

S D01下層（254）

C-2区

S D08（255、256） S K10（253） S K11（257、258） S K12（259）

253は上師質のミニチュアの乗燭である。手びねりで、成形されており、中央に芯立てを貼り付けている。玩具の可能性もある。

254～259は土師器の皿である。254の胎土は緻密で焼成良好、内外面ともに鈍い黄灰色を呈する。手づくね成形で内面にナデ調整、外面に指頭圧痕が残る。17世紀後半に比定される。257は手づくね成形で内面にナデ調整、外面上に指頭圧痕が残る。器厚は厚く、口縁部には灯心油痕が残る。17世紀後半に比定される。258は手づくね成形で形作り、口縁部に強いナデが施される。17世紀後半に比定される。255、256、259は型押し成形後、内面にはナデが施されている。口縁部には灯心油痕が残る。19世紀前半に比定される。

第7節 その他の陶磁器（第45図～第46図）

本調査区から出土した陶磁器は越中瀬戸、伊万里が大半をしめ、唐津、瀬戸美濃が次いで出土した。その他、肥前系陶磁器、京・信楽、また產地不明の陶磁器が少量ではあるが出土した。以下まとめて詳細を述べる。

【III】（第45図）

石組み水路

下層（261）

A-2区

S K104（260、264）

C-2区

S K11（262、263） S K12（265）

260は全面に溶解物が付着しており、產地は不明である。胎土は明赤褐色を呈し、海綿骨針を含む。調整痕は観察出来ないが、内面、外面上にクロナデの調整であると思われる。溶解物が磁胎とも思われ、取瓶または坩堝として使用された可能性がある。261は磁器皿である。胎土は灰褐色を呈し、緻密で砂を含み焼成は良好である。削り出し高台である。釉は淡いオリーブ色をした艶、透明感に富む灰釉が施されており、細かな貫入が入る。見込は蛇の目状に釉剥ぎされ、また、外底部付近は露胎である。体部内面に呉須により3本の線が描かれ、他に文様があった可

能性がある。露胎部分に回転痕が顕著に見られ、見込み付近に焼成時点（重ね焼）の砂が付着する。262は京都・信楽の灯明皿である。胎土は灰白色を呈し精緻である。体部はロクロナデ、底部から外体部下半はロクロ削りである。器肉は薄い。櫛状工具でX状の施文をする。内面に三つの日跡が残る。内面と口縁部に透明釉が施釉される。1860年代に比定される。263は京都・信楽の灰釉灯明受皿である。胎上は灰白色を呈し精緻である。体部はロクロナデ、底部から外体部下半はロクロ削りで、器肉は薄い。皿と棟の比高差は殆どない。棟に浅いV字状の切り込みを入れる。釉は内面と口縁部に施釉される。1820年～1830年代に比定される。264は肥前系陶磁器の白磁皿である。手塙皿といわれる小型の皿で、菊花型打ちである。素地は白色で精緻である。16弁の菊花を内面に押印している。明緑灰色を呈する透明釉を施釉するが覺み付きは露胎である。19世紀～幕末頃に比定される。265は肥前系陶磁器の波佐見の染付皿である。素地は白色粒子を含み精緻である。高台は蛇の目円形高台である。主文様、見込み共に雪の輪、笹葉文、裏文様は宝文である。焼難痕が残る。瀬戸美濃の可能性もある。1820年～1860年代に比定される。

【碗・鉢】(第45図)

石組み水路

石組み水路 (272) 上層 (276) 鉄津下層 (266)

A-1区

S D01上層 (269) S K31 (268) S D75 (267)

C-2区

S D08 (270, 273, 274, 282, 283) S D08掘方 (280) S K10 (275, 277, 279)
S K11 (281) S K12 (271, 278)

266は陶器碗である。釉はやや暗い色調の青灰色をして、精神性が強く表面にアバタ状の穴が多く見られる。体部外面には呉須で山と思われる文様が描かれる。高台覺み付きは露胎である。18世紀中葉頃か。267は陶器碗である。胎上は釉に似た明るい色調の黄灰色をして緻密、焼成は良好である。削り出し高台である。釉は黄灰色をして若干艶がある。全体に細かい貰入がはいる。外側面に線描きの文様がごく僅かに見られる。底部高台付近は露胎となる。18世紀中葉以降か。268は肥前陶器碗の京焼風陶器である。胎土は白褐色を呈し、釉調は黄褐色の黄釉である。高台覺み付き以外は全面施釉である。18世紀以降に比定される。269は陶器碗である。内外面に茶褐色味のある黄釉が施され、底部高台付近は露胎となる。釉は透明感・艶に富み辘轳の回転痕が透けて見える、内面には貰入が入る。素地は鈍い黄褐色をして緻密、焼成は良好である。口縁部外面に竪状工具による幅4mmの削り痕が見られ文様の可能性がある。18世紀後半以降に比定される。270は陶器碗である。胎土は暗灰色を呈し精緻である。体部はロクロナデ、高台は削り出しで、削りは体部中位まで及ぶ。光沢の良い黒釉を内面全体、および口縁部に施釉、体部外面に、流しがけにより文様を描く。1800年～1860年頃に比定される。271は陶器碗である。胎土は暗灰色を呈し精緻である。内面体部はロクロナデ、底部は削り出し高台である。また、高台際には鉛目が若干残る。銅綠釉を内面、および口縁部に施釉し、体部に筆から釉を落として文様としている。272は肥前系陶磁器の小碗である。外面は透明釉が施釉されており、器表の貰入は微細で顕著である。また、銀粉を撒りこんだ銀線技法が施されている。内面全体には赤漆が施され、金彩で草木をあしらった文様を描く。幕末頃に比定される。273は陶器の小碗（盃）である。胎上は淡黄

灰色を呈し精緻である。体部はロクロナデ、底部から体部中位はロクロ削りである。鉄軸を内面と体部中位上面までに施釉する。内面に残滓が観察される。18世紀後葉～幕末。274は陶器の鉄軸小杯である。胎土は灰色を呈し精緻である。杯部に比し、高台が高い。畳み付きは露胎である。イッチンの技法により白化粧土で草花文を描く。丹波窯か。18世紀後葉～幕末。275は京都・信楽の色絵碗（小杯）である。素地は黄灰色を呈する。高台は高く、体部は高台から緩やかに立ち上がる。透明釉を施釉するが畳み付きは露胎である。赤色顔料により上絵付けを行う。3本爪の龍文、貝紋、口縁部は連弧文である。高台内に「預口」の銘款がある。18世紀以降であろうか。276は陶胎染付碗であり、広東碗である。胎土は灰白色を呈する。体部外側に竹葉文、内面に手書きの五弁花を描く。瀬戸美濃か。18世紀代に比定される。277は肥前（嬉野）陶器碗である。胎土は淡い黄白褐色を呈し、若干白色粒子を交える。内面に透明釉、外面及び口縁部に銅線釉を掛け分け底部は露胎とする。見込みに5個の胎上目痕を残す。17世紀末～18世紀末か。278は陶器碗である。胎土は灰白色を呈し精緻である。体部はロクロナデ、底部は削り出し高台である。体部は直立気味に立ちあがり口唇端部は端反である。体部に丸鑿で繊維を入れる。高台以外に透明釉を施釉する。高台内に墨書がある。279は灰釉碗である。高台は削り出しである。オリーブ黄色を呈する光沢の良い灰釉を高台以外に施釉している。器表の質は微細で顕著である。また、見込みには3箇所にトチンの目跡を残す。瀬戸美濃か。280は陶器碗である。透明釉を全面施釉した後、白泥を底部以外に刷毛塗りする。281は肥前陶器碗である。胎土は淡黄褐色を呈しづくりとしている。碗を逆さまにして三方から白土を塗る（三方割化粧）が、高台は露胎である。体部に電芝雲を印刻する。1690～1780年代か。282は肥前白磁輪花碗である。素地は白色で黒色粒子を若干含む。口縁部は16弁の輪花とし、底部は唐物底に作る。文様は型押しで、口縁部は如意頭文、体部は3本爪の龍文及び電芝雲である。焼締の痕跡がある。1800～1820年代であろうか。283は陶器鉄軸輪花鉢である。胎土は淡い灰桃褐色を呈し、白色粒子を若干含む。体部はロクロナデ成形、底部は削り出し高台である。口縁部をやや上向きに外側に引き出し折縁とし、また端部を六弁の輪花とする。光沢のある鉄軸を高台以外に施釉する。見込みの縁周に5個の目跡が残る。底面中央部に半円形の孔が穿たれており、植木鉢として転用し再利用した可能性がある。19世紀以降～幕末か。

【その他】(第46図)

石組み水路

石組み水路 (299) 上層 (295, 303) 最上層 (305) 鉄滓層 (287) 北側掘方 (296)

A-1区

S D01上層 (284) S K58 (288)

A-2区

S D79砂層 (304) S K104 (306)

C-2区

S D08 (286, 292, 300～302) S K09 (294) S K10 (285, 290, 291, 293, 298)

S K11 (289, 297) S K12 (307)

284は平面長円形（楕円形）をした小鉢である。釉は上位が淡い緑色、下位が淡い橙色をした灰釉がベースで、外側面に半菊文を濁った灰緑色をした釉で描かれている。文様は銀化がひどく

部分的に白濁や褐色に変色している。京・信楽か。18世紀末以降であろうか。285は灰釉陶器油壺である。主に蠻付油をいれる油壺である。体部はロクロナデ、底部は回転糸きり調整である。器表には細かい貫入が顯著に見られる。江戸時代後期頃であろうか。286は肥前の灰吹きである。素地は白色を呈し黒色粒子を含む。筒型で下方は蕉状に丸い。筒部は呉須と鉄軸により掛け分けされる。下部に4本の圓線を入れる。透明釉が施釉されるが豊み付きは露胎である。漆縫痕が見られる。18世紀後半以降か。287は青磁筒型製品（花器か）である。内面に回転痕を残し、体部外面に輪の狭い繩文を刻む。釉は淡いオリーブ色を帯び、艶を持つ。内面は口縁部付近を除いて露胎である。288は陶器壺である。内面、外面共にロクロナデ調整で、内面にはその痕跡が顯著に入る。底部は欠損している。釉は全面に施釉されており、鉄軸に鋼青磁釉を上掛けして焼かれたものと思われる。19世紀代であろうか。289は肥前、波佐見の染付徳利である。素地は白色を呈し精緻である。豊み付き、及び内面の頸部から下方は露胎である。体部文様は草花文である。1650年～1740年代に比定される。290は波佐見窯の青磁仏花瓶である。中国の尊式花瓶の形態で口部と底部が広がり脣部は絞まる。体部と頸部の間に幅1.5cmの帯を廻らせ、その上に蝶巣様の横型の耳を2箇貼り付ける。口縁形態は盤口形と想定される。光沢の良いオリーブ灰色を呈する釉を施釉するが豊み付きは露胎である。18世紀後半頃に比定される。291は白磁仏花瓶である。底部は回転糸きり調整である。290と同様な尊式花瓶の形態であるが、中央部が大きく絞れ、口縁部は盤口形にはならない。また、耳の形態は縦様の渦巻型である。明オリーブ灰色を呈する釉を施釉するが豊み付きは露胎である。18世紀頃に比定される。292は陶器の土瓶である。胎土は白褐色を呈する。体部はロクロナデ、底部は削り出し高台である。体部は算盤口型で、口縁部は短く立ち上がり、肩部に2個の耳が付く。注口は上方に向き内面に3個の孔を持つ。内面に灰釉、外面体部中位までに銅緑釉、口縁部に鉄釉を施釉する。また、内面上方に赤茶色顔料を刷毛塗りしている。底部は厚く、外面全体に煤が付着している。堺系陶器か。19世紀代であろうか。293は越前の甕である。内面は指頭、及び工具によるなで成形、外面は工具を押し付けてなで成形を行う。口縁部は指押さえによるナデ成形である。外面口縁部直下に凹線が1条巡る。外面には炭化物、一部に粘土塊が付着している。18世紀代に比定される。294は越前焼の甕である。体部外面は工具によるなで成形、内面は指頭と、工具によるなで成形である。煙褐色を呈する光沢のない鉄釉を外面体部に施釉する。縦方向に刷毛により鉄釉を塗っている痕跡が認められる。18世紀代に比定される。

295は泥独楽である。胎土は鈍い褐色を呈する。円筒形で、表面に8寸の花文様を型押しし、中心に孔を穿つ。中心孔がなければめんここの形状である。中心孔を作つて、めんこを独楽に変えた可能性がある。296は塙燒甕の蓋で素焼きである。胎土は灰黄色を呈し、雲母、赤茶色粒子を含む。上面に押印を有するが押印は摩滅が著しく解読不能である。297は陶器の蓋である。胎土は淡褐色を呈し精緻である。上面に光沢の良い鉄釉を施釉し、内面は露胎である。298は落とし蓋である。素地は灰白色を呈し黒色粒子を含む。内外面共にロクロナデである。上面中央に両端を内側に折った格円形の摘みが付く。暗褐色を呈する光沢の良い鉄釉を上面のみに施釉する。19世紀以降か。299～302は全面に溶解物が付着しており、產地は不明である。土製品か。いずれも鑄物製作時の取瓶等の道具と考えられる。299・302の胎土は灰色を呈し粗い。手づくね成形である。内面には厚く鉄滓が付着している。300は小甕型、301は甕状を呈し、全面に鉄滓が付着する。鑄物製作のため転用した可能性がある。303は土人形である。胎土は鈍い黄褐色を呈し精緻である。

文官の衣冠束帯姿の人形である。裏面と表面を型押した後、両方を接合したものである。304は土人形である。胎土は土器質に近い。中型合わせで、中心に5mmの孔を有す。顔は欠損しているが袴を着けて正座した女人像と想定される。着物全体に赤味を帯びた釉を施釉した痕跡を残す。305は陶製の人形（大黒天）である。胎土は灰白色で緻密、焼成は良好である。前後2つの難型による型作りで、面中に粘土を押し当てて接いだ痕跡が顕著に残る。損壊部には漆緞の痕跡が認められる。頭巾と衣は不透明な鉄釉がかけられ、顔や手の露空部分と背中の袋は淡橙色に着色される。左手のすぐ背後に径3mmの穿孔があく。306は土人形である。胎土は灰白色を呈しやや粗い。内面には型に押し付け時の指頭の圧縮が残る。浅黄色を呈する透明釉を全面施釉する。19世紀代に比定される。307は陶製の人形である。手びねり成形で、各部位は貼り付けである。力士像と想定され、鉄釉と緑釉で彩色される。

第8節 羽口（第47図～第48図）

A-1区南西側（F・G-2）に位置する土坑のうち、鉄滓を多く含む土坑（SK02・12・20・21・22・37）及び焼土を多く含む土坑から主に出土した。さらにA-2区石組み水路から鉄滓を多く含む層序からも出土している。A区から集中的に出土し、町屋の位置にあたることから、町屋にて小鐵冶を行なっていた可能性がある。出土した羽口は、ほとんどが欠損しており、不要になつた羽口を、鉄滓と一緒に廃棄したものと考えられる。

石組み水路

鉄滓層（308、309）

A-1区

S D01上層（310） S K11（314） S K12（311） S K21（312） S K22（315）
S K38（313）

A-2区

S D79（318） S K103（316、317）

羽口は直径8cm～10cmの円筒形で、孔径は2～3cmを測る。317の孔径は大きく3.6cmを測る。体部は工具による縱方向の丁寧ななで成形である。胎土は粗く、海綿骨針、白色粒子、芸母を含む。先端には鉄がケロイド状に焼れ付着している。また、311は空気を送る装置側の孔径は2cm～4cmへと徐々に開く形状である。

第9節 石製品（第48図～第49図）

【硯】（第48図）

石組み水路

鉄滓下層（319）

A-2区

鞍部（320）

C-2区

S K11（322） S K12（321）

319は石製硯である。すり面はよく使い込まれ断面じ字形に凹む。海及びすり面に墨が付着して残る。裏面に円形の印刻と商標の「□高崎青石」（□は上か）の文字が線刻される。320は石製

品、高田硯である。高田産の良質の黒色粘板岩である。表、裏、側面に墨が付着している。陸部中央は凹状に陥没しており、摩滅が顕著である。裏面に商標「上上高田石」の印刻がある。321は泥岩製の硯である。石材は灰褐色をしてきめは細かい。表面に墨の付着有り。裏面も擦り面として浅い加工が見られる。322は硯である。石材は泥岩でキメ細かく黄褐色を呈する。墨の付着のため全体に黒ずむ。擦り面から海にかけて断面「V」の字形に磨り減っており、砥石代わりに何かを研いだ可能性がある。

【石鉢・五輪塔・石臼】(第49図)

A-2区

S K104 (326)

C-1区

S P24 (324)

C-2区

S D08 (323, 325)

323は石鉢である。内面、外面共にケズリ調整で、内面は丸みを持つ。左右の側面を握り込んで持ち手を作る。食物、薬草等を擂り潰し練った捏鉢として使用されたと思われる。324・325は五輪塔の火輪である。326は石臼の上臼である。主溝を8本の八分画で、副溝は8本である。

第10節 金属製品 (第49図～第50図)

【煙管】(第49図)

A-1区

S D01上層 (327)

A-2区

S K103 (330) S K104 (331)

C-2区

S D08 (328) S K09 (329)

327～329は銅製の煙管の吸い口である。銅の薄板を丸めて端部を錫附し渡金を施す。329は1mm厚の銅板を丸めて端部を錫附し渡金を施しており、竹管の差込部分外周には文様が彫り込まれる。330・331は煙管の雁首部分である。吸い口同様銅板を丸めて管をつくりそれに先端の火皿を錫附している。渡金が一部に残る。

【古錢】(第49図)

石組み水路

下層 (334)

A-2区

S D79下層 (332) S D79砂層 (333)

C-2区

S D08上層 (337) S D08最下層 (335) S K10 (336)

332～337は寛永通宝である。鑄造年代は寛永13年(1636)～万延元年(1860)。334・335の裏

面には「文」の文字があり、336の表面には文様があるが摩滅しているため判読不能である。「文」である可能性がある。その他裏面は無文である。

【その他】(第49図～第50図)

石組み水路

上層 (338) 鉄滓層 (339)

A-2区

S D79上層 (350) S D79砂層 (351) S K103 (345, 346)

C-2区

S D08 (347) S D08下層 (348, 349) S K09 (340) S K10 (342) S K11 (341)
S K12 (343, 344)

338は銅製鉤針である。針金状の銅棒をひらがなの「し」の字形に折り曲げて作ったもので、一端を環状にしている。339は鉄製品である。用途不明。一端は先端部が尖り、長さ4cmにわたって直角に折れ曲がる。もう一端は欠損している。曲がっていなければ鍔龜に似た形状をしている。340は金銅製飾り金具である。銅の薄板を鳥(鮑)の形に切り抜き渡金を施す。最下端部は5mmの長さで直角に折り曲げられ、他の部位に取り付けるための突起がある。341は銅製の把手である。部分的に渡金が残る。革筒の引き出しの把手か。342は鉄製包丁の刃部である。茎部分は2cmを残して欠損。刃は長三角形をして現代の万能包丁の形に類似する。343は鉄製小刀である。一端部斜め方向に長さ38mmの刃をもつ。344は小判を模した銅製薄板で渡金が施される。上端付近に径3mmの穴があけられており、何かにぶら下げたようである。福飾りのような物か。345は銅製の蓋である。銅の薄板を加工したもので端部は折れる。渡金されていた可能性をもつ。摘みは上下2つの部品を合わせて口にして作り、座金に文様が鋲打される。346は金銅製品である。銅の薄板を敲き出して碗状にしてあり、外面に文様が書きされる。中央に3mm角の穴が開く。釘隠の可能性がある。347は銅製針金である。環状に曲げて使用していたようだ。348は先端部が二股に分かれた鉄製品で、茎部は途中で欠損。農具(熊手)か。349は小柄の小刀で刃部に名が入るものがあるが本品は不明である。350は棒状の鉄製品で腐食がひどく両端部を欠損する。鉄火箸か。351は銅の薄板を環状に打ち抜いたものである。用途不明。

(小川)

第11節 木製品 (第51図～第67図)

【下駄】(第51図～第52図)

本調査区からは下駄99点が出土した。その中には、前後の歯部が遺存するもの、前後いずれかが欠損・欠落するもの、前後共欠損・欠落するものが含まれる。加えて、歯部のみの状態のものが133点出土している。Ⅷ章総括(第4節)において形態分類を行なった。その各遺物の分類番号を文章中に記した。また、本調査区から出土した下駄の内、分類に即したもの15点について、その概略を以下に述べる。

石組み水路

石組み水路 (356)

A-1区

S D01上歯 (365、366) S K95 (361)

A-2区

表土中 (354)

C-2区

S D08 (352、363) S K09 (362) S K10 (358) S K11 (353、359、360、364)

S K12 (355) S K10・11・12サブトレーナ (357)

352-357は一本速歯下駄である。同形状の下駄は9種4単種が確認された。352・353はいずれも台部の幅が狭く、一見して女性用とも思われるが、全長及び前後の緒穴間が他のものに比べてさほど変わらない数値を計ることから、断定はできない。352は歯部の断面が四角形、353はかなり擦り減っているが僅かに銀杏歯であることが分かる。354・355は現代の下駄に近い形状である。354は台部前面に平坦面を持ち、比較的長方形に近い形状である。356は平坦面が少なく、前後に曲線的である。この2点の顕著な差異は後緒穴の位置で、354は後歯後方に、356は後歯前方に、それぞれ後緒穴が位置する。355・357も似通った形状である。全長が短く、又全体の形状などから見て、女性もしくは子供用と推定される。357は前方部内側に使用時の磨耗の跡が認められ、本来前方部の形状はもう少し直線的であったと推定される。355には同様の痕跡は顯著に認められず、前後共曲線的な形状であったと推定される。また、357は塗装りである。

358-364は指し歯陰卯下駄である。第Ⅷ章総括第4節において分類基準については後述するが、台部の形状・歯部の形状・装飾の有無・後緒穴の位置を基準に分類しており、この7点について、まず台部の形状の内平面形状をみると、358-361は前後共に直線的な長方形に近い形状である。362・363は前後共に曲線的、364は前方部がやや直線的である。断面形状は361だけが逆台形を呈し、他は五角形を呈する。歯部の形状はすべて銀杏歯である。装飾について358・362・364は塗装りで、他にはその痕跡は認められなかった。後緒穴について358・361・362・364は後歯前方に、359・360・363は後歯後方にそれぞれ位置する。

365・366は指し歯露卯下駄である。歯部の形状・装飾の有無・後緒穴の位置などは同じであるが、台部の平面形状のみ差異が認められる。

白部から欠落し、歯部のみで出土したものは133点確認された。内126点は陰卯下駄の歯部であり、残り7点は露卯下駄の歯部である。塗装りが確認されたものは13点である。歯部と台部の接合部の補強（欠落防止）のため、楔状の木片が使用された痕跡もしくは木片自体が遺存するものが46点確認された。内側に楔状木片が打ち込まれたものが29点、外側から打ち込まれたもの17点である。これらに關しても詳しくは後述する。上端部の形状に關しては直線的なもの92点と、V字状に浅く中央部を凹ませたもの25点、中央部に凸部があるもの7点が確認された。中央部に凸部があるものは露卯下駄の歯部である。下駄台部の形状で「五角形」と分類したものについて、正確には「四角形の下辺に三角形の底辺を合わせた」形状であり、「逆五角形」を呈するものである。この形状だけをみると、上記の歯部上端の形状の内、「V字状に浅く中央部を凹ませたもの」と「逆五角形」とが一つの木材から切り出されて製作していると考えられるが、実際に五角形の台部から歯部が欠落したことがあり、確認したところ、歯部の上端は直線的であった。従って、この2事例の間には製作工程上の因果関係はないものと思われる。7点が確認された露卯下駄歯部であるが、内1点は凸部上端が二股に分かれていた。歯部のみの出土品としては

この1点だけであるが、台部に接合した状態で出土したものの中に、同形状のものが確認されている。

【漆器】(第53図～第54図)

本調査区からは漆器202点が出土した。完形のものは確認されなかつたが、それに近い状態のものが数点含まれる。他に、遺存率50%前後の状態不良のものや、小片のみ、あるいは小片に分割された状態のものが大半を占める。漆椀には様々な形態が存在するため、以下のように分類を行つた。

・器種

「小皿」 器形が滑らかに内湾しながら立ち上がり皿上の器形を有するもの。器高、高台は低く、器壁が薄いもの。高台が欠損しているものについては、残存する高台の厚さから、親椀ほど高台が高くならないもの。

「椀」 器形が滑らかに内湾しながら、小皿よりも角度が若干急に立ち上がり椀上の器形を有するもの。器高、高台は比較的低く、器壁が薄いもの。親碗よりも口径は若干小さくなる。高台が欠損しているものについては、残存する高台の厚さから、親椀ほど高台が高くならないもの。いわゆる吸い物の椀状のもの。

「親椀1」 器形は「椀」よりも角度が内湾しながら立ち上がり、器高が高いもの。また、器壁がやや厚く、高台が高いもの。高台が欠損しているものについては、直に器形や器壁の厚さを考慮し親碗に帰属させた。ご飯を盛るための椀状のもの。

「親椀2」 親椀1と同様だが、器形は底部にて段をもち、親椀1より角度が急に立ち上がるものの器壁の厚さ、高台は「親椀1」と同様に高くなる。ご飯を盛るための椀状のもの。

「平椀」 親椀2と器形は類似するが、器高は低く、平たいもの。口径は大きく、高台は低い。外面には沈線が施されている。主に煮物を盛る椀状のもの。

「蓋」 器形は穢やかに立ち上がり、平たい器形のもの。器高は低く、高台(つまみ)も低い。

完形品が少ないため、「皿・椀類」と「蓋類」の区別が困難なものが多数確認された。蓋は平たく、判別しやすいもののに、皿・椀状の蓋が存在する。高台(つまみ)内面に文様が施されているものは、使用時に見える場所であり、単なる記号ではなく、装饰的な意味での「模様」も兼ねて書かれたものと想定し蓋とした。この両者は一括して分類した。特定できたものについては、備考欄に記した。

・漆色

内外面に塗られた漆の色については、シンプルに「赤色」と「黒色」を使用した。黒色については、いずれも似た色であるが、赤については、厳密には濃淡があるものや、朱色に近いものなどがあったが、基準を設けて細分するのが困難なため、赤系統は「赤色」として統一した。

・模様

模様は大別して「家紋」・「絵画」・「その他」に分類した。「家紋」については家紋であるのか、家紋状の文様であるもの両方を含めて「家紋」として分類した。「その他」には「文字が書かれたもの」、「文字ではないが記号と見られるもの」が含まれる。

「小皿」(第53図)

C-2区

S D08 (367) S K10 (368)

367、368は小皿である。内外面黒色の漆が施される。368の外面高台内側に赤色で「宮」の字が施されている。

「椀」(第53図)

A-1区

表土中 (374)

C-2区

S D08 (373) S K09 (369) S K10 (371) S K11 (370・372)

369～374は椀である。369は体部外面1箇所に金彩で丸に「変わりかたばみ」の家紋が施されている。371は黒丸に放射状に延びた線により文様を描く。372は体部に金彩で「若松に熨斗」の文様を描く。373は体部外面3箇所に黄色系漆で「桔梗紋」の家紋が施されている。374は体部外面3箇所に赤漆で丸に「木瓜紋」の家紋が施されている。

「親椀1」(第53図)

A-2区

S D79 (386)

C-2区

S D08 (375, 376) S K09 (377, 379) S K10 (378, 381～383) S K11 (384, 385)

S K10・11・12サブトレーナ (380)

375～386は親椀1である。375の体部外面には金彩で草花の文様が、376には鼠色・茶褐色の下塗りが一部残る。体部外面に金彩で「竹」・「楓」・「桔梗」の文様を描く。379の外面には「松竹梅」と「鶴亀」の文様を描く。380は体部外面3箇所に赤漆で丸に「四つ目菱」の家紋が施されている。386は他の親椀と比較すると器壁は薄い。

「親椀2」(第53図)

C-2区

S K10 (388, 390) S K11 (389) 包含層 (387)

387～390は親椀2である。390の外面高台内側に赤色で「大」の字が施されている。

「平椀」(第54図)

C-2区

S D08 (391～393, 395) S K11 (394) 包含層 (396)

391～396は平椀である。392は体部外面2箇所に金彩で丸に「抱き若荷」の家紋が施されている。

「蓋」(第54図)

石組み水路

石組み水路 (401)

C-2区

S D08 (400, 404, 408, 409) S K09 (397, 406) S K10 (402, 403, 407)

S K11 (405) S K53 (399) 包含層 (398)

397～409は蓋である。397は小容器の蓋であり、上面には草の文様を描く。398～405は椀状の蓋

である。399のつまみ内側には「打出の小槌」、体部外面には「房付き鍵」・「米」・「如意宝珠」の瑞祥文を描く。400の体部外面に金彩で桜花文様が4箇所対角線上に4箇所描かれている。401は外面及びつまみ内側に至って金彩で「花鳥紋様」を描く。402は金彩で丸に「桔梗紋」の家紋が施されている。欠損しており詳細は不明であるが、つまみ内側に1点、体部外面の3箇所に施されていると考えられる。403は欠損しており詳細は不明であるが、体部1箇所に金彩か銀（薄鼠色）で丸に「違い鷹の羽」の家紋が施されていると考えられる。404はつまみ内側に1箇所、体部の3箇所に金彩で丸に「花菱紋」の家紋が施されている。405はつまみ内側に赤彩で「沢瀉（おもだか）」の文様を描く。406~409は平たい蓋である。408のつまみ内面には赤漆で小さな蜻蛉の文様を描く。

「その他」(第54図)

C-2区

S K10 (410)

410は容器である。器形は隅丸方形で、菓子器と考えられる。遺存状態が悪く、詳細は不明である。黒漆の下塗に金彩で高麗絵風に文様が施されている。

以上202点を概観すると用途により漆碗・皿・蓋といった使い分けを行っているためか、様々な形態の漆製品が出土した。漆の色について、内外面共に判別できた151点のうち、内面が赤色であるものが87点、黒色が64点、外表面が赤色であるものが7点、黒色が144点である。内面の色はほぼ同数だが、外表面に関しては黒色が圧倒的に多いことが分かる。その組み合わせとして、内外面とも黒色が62点、赤色が82点、内面黒色で外表面赤色が2点、内面赤色で外表面赤色が5点である。内面赤色外表面黒色が最も多く、次いで内面黒色外表面黒色が多い。外表面赤色のものは内面が赤色・黒色を問わず、非常に少ない。この結果から、内面の色に関わらず外表面黒色が一般的で外表面赤色は特殊であるといえる。出土遺構との関係をみると、外表面赤色の個体はC-2区のS K10とS D08から出土しており、他の遺構からは確認されていない。

本調査区から10数種の家紋が確認された。家紋は江戸時代元禄期以降、広く一般民衆も使用するようになったとされている。それまで家紋を持たなかった人々に新たに家紋を造る職人（絵描き）まで登場したと言われ、多種多様に及んでいる。そのため、今回確認された家紋の名称までは調査し切れなかつたが、同じ文様（デザイン）は確認されていない。家紋は通常「一家に一つ」と考えられる。一時期、その家の家長を中心に男性が使用する「男紋」と、女性が使用する「女紋」の二つが使用されたことがあるようだが、まったく異なる家紋が使用された例は少なく、多くは男紋の周囲の○を外した紋を女性紋として使用したようである。このことから、家紋からそれを使用した家を割り出すこともある程度可能である。今回の出土例の多くは漆器碗外面に金色の塗料で描かれたものであり、一般的に考えて、豪華な器ではないだろうか。家紋と本調査区に位置する武家屋敷の家紋との整合を図れば更なる資料の補強となる。

絵画については、状態不良で全体が確認できるものが少なく、詳細は不明であるが、全般に草木や花の題材にした文様が多い。中には379に見られるような「松竹梅」と「鶴亀」が一緒に描かれたものや、399のように瑞祥文が描かれるものもあり、これらの器が「ハレの場」・「吉事」で使用されたことがうかがえる。

56点の中で文字が書かれたものは3点である。内訳は「宮」が2点、「大」が1点となっている。いずれも内外面共黒色の器で、外表面高台内に赤色で書かれている。所有者が自己の所有物であることを記したものであろうか。

【木札】(第55図～第63図)

本遺跡から103点の文字資料が出土した。遺構別の出土点数は以下の通りである。

第1表 木札遺構別出土点数データ

遺構番号	SK09	SK10	SK11	SK12	SK15	SK16	SK52	SK53	SD08	サブトレ ンチ	A1包含層
点 数	3	23	17	6	1	2	2	5	16	27	1

次に印字方法であるが、1. 焼印が押された物、2. 墨書きされた物、3. その他の3種類が確認された。内訳は以下の通りである。

第2表 木札印字方法別データ

印字方法	焼印	墨書き	その他
点数	72	30	1(注1)

(注1) 線刻されたものが1点確認された。

文字が印字された木製品の器種毎に分類集計したものは以下の通りである。

第3表 木札器種別出土点数

器種	桶部材	容器蓋	札	道具類	不明
点数	42	39	10	4	8

印字された文字の中には、同じ文字が印字されたものも数点あるが、ほとんどが異なる文字である。それらをいくつかのパターンに分類集計した結果は以下の通りである。

第4表 木札分類別出土点数データ

分類	点数
「傳」または「傳」のつくもの	11
「橋」または「橋」のつくもの	9
○屋(二文字の屋号)のもの	13
○○屋(三文字の屋号)のもの	13
「大」のつくもの	2
品物の名前が書かれたもの	2
町名または町名と推定されるもの	2
不明	44
札	7
その他	14
合計	117(注2)

(注2) 合計点数が出土点数より多いのは、木製品1点に2種以上の異なる分類に属する文字が確認された物については2点として集計しているためである。

出土点数の多い遺構について、それらを上記分類毎に集計した結果は以下の通りである。

第5表 木札遺構別分類点数データ(SK10)

分類	点数
「傳」または「傳」のつくもの	4
「橋」または「橋」のつくもの	2
○屋（二文字の屋号）のもの	1
○○屋（三文字の屋号）のもの	3
「大」のつくもの	0
品物の名前が書かれたもの	0
町名または町名と推定されるもの	0
不明	0
札	0
その他	0

第6表 木札遺構別分類点数データ(SK11)

分類	点数
「傳」または「傳」のつくもの	1
「橋」または「橋」のつくもの	0
○屋（二文字の屋号）のもの	2
○○屋（三文字の屋号）のもの	7
「大」のつくもの	0
品物の名前が書かれたもの	0
町名または町名と推定されるもの	0
不明	0
札	0
その他	0

第7表 木札遺構別分類点数データ(SK12)

分類	点数
「傳」または「傳」のつくもの	0
「橋」または「橋」のつくもの	1
○屋（二文字の屋号）のもの	2
○○屋（三文字の屋号）のもの	0
「大」のつくもの	0
品物の名前が書かれたもの	1
町名または町名と推定されるもの	0
不明	1
札	2
その他	0

第8表 木札遺構別分類点数データ(SD08)

分類	点数
「傳」または「傳」のつくもの	1
「橋」または「橋」のつくもの	2
○屋（二文字の屋号）のもの	2
○○屋（三文字の屋号）のもの	0
「大」のつくもの	0
品物の名前が書かれたもの	0
町名または町名と推定されるもの	1
不明	10
札	1
その他	1

第9表 木札遺構別分類点数データ(サブレンチ)

分類	点数
「傳」または「傳」のつくもの	0
「橋」または「橋」のつくもの	4
○屋（二文字の屋号）のもの	3
○○屋（三文字の屋号）のもの	1
「大」のつくもの	0
品物の名前が書かれたもの	0
町名または町名と推定されるもの	1
不明	13
札	0
その他	6

まず、器種と印字方法の関係であるが、集計結果は以下の通りである。

第10表 木札器種別印字方法

器種	桶部材	容器蓋	札	道具	不明
焼印	38	29	0	3	1
墨書	4	9	10	1	7

これを見て解るとおり、札を除く全ての器種において焼印・墨書の両方が確認された。そのため、器種による印字方法の使い分けはないようである。

次に、印字方法と内容の関係について見ていくたい。

第11表 木札印字方法と内容

内 容	屋 号	その他	不 明
焼印	21 高成屋 車屋 3点 宮成屋 酒屋 宮竹屋 吉田屋 塙屋	31 寅傳 4点 橋 4点 塙傳 吉平 橋五 5点 ト 傳 茶 中の町 酢	24
墨書	0	9 判読可能な ものは、全 て札である。	22

焼印・墨書いずれにも肉眼及び赤外線で判読不明なものが含まれる。そのため今後更なる詳細な観察が実施されれば、表中の数値が変化する可能性はある。現況で見る限り、墨書で屋号を記した例は確認されなかった。焼印については屋号と思われるものが多く含まれ、文献資料などで追跡調査が実施できる可能性がある。類例として提示した資料の内、複数確認されたものに関して、その点数を表中に記した。

「車屋」については、いずれの資料も状態が悪く、比較が困難だが、若干字体の異なる2種が存在するようである。3画面の「折れ」の部分に差異がみられ、3点とも周囲を円形の線で囲まれる点が共通し、1点は容器蓋から、他2点は桶側板から確認された。

「寅傳」については「常傳」の可能性もある。4点確認されたものは、いずれも周囲を方形の線で囲まれる点が共通し、1点は容器蓋から、他3点は桶側板から確認された。字体は全て似ており、同一の焼きゴテが使用されたものと思われる。

「橋」は4点が確認された。状態が悪く、字体の確認は困難だが、内2点については木片の下がハネル（本米木片はハネナイ）点が共通している。1点は周囲が円形の線で、他3点は方形の線で囲まれる。4点とも桶側板から確認された。

「橋五」は5点確認された。状態の悪いものもあり、全ての確認は困難であるが、内3点につ

いては上記「橋」と同じ特徴を持つ字体である。1点が周囲を方形の線で囲まれ、他4点は円形の線で囲まれる。器種は2点が容器蓋から、3点は桶側板から確認された。方形の線で囲まれた1点は桶側板である。

先に述べたように単独の「橋」と「橋五」の「橋」には共通する特徴が確認できる。いずれも木片の2画目最後を大きくハネル点である。「木」や「木片」の2画目は「ハネ」ずに「トメ」るのが、現在では正しい書き方である。しかし、本資料ではいずれも大きく、おそらく意識的にハネて書かれている。本遺跡出土品では、他に木片の文字が確認されているが、これも上記と同様に木片2画目が大きく「ハネ」られており、これが当時一般的な字体であったものと思われる。

屋号として分類した資料の中には2種類の性格のものが含まれる可能性がある。一つは「固有名詞+商家を表す（ ）屋」で表記されたもので、「高成屋」・「宮成屋」・「宮竹屋」・「吉田屋」がそれに含まれる。もう一方は「商う物の名前+屋」で表記されたもので、「車屋」・「塩屋」・「酒屋」がそれに含まれる。前者については間違いないと思われるが、後者は一般的な見方として、その可能性を述べたものである。文献資料と比較することにより判明すると考えられるが、文献資料が残存していないため詳細は不明である。こうした状況の中で、金沢城下南町（安江町遺跡）に酒造宮竹屋があったことが確認されている。（金沢市教委 1997）その金沢市にあった宮竹屋の焼印と、本遺跡出土の宮竹屋の焼印を比較すると、字体や周囲を閉む線の形状が酷似している。これらが同じ「宮竹屋」（430）を示すものであれば、金沢にあった酒屋の商業圏が富山に及んでいたことを示す資料である。その他に本調査区から（ ）屋と表記されたものが数種類出土したことは、それらを比較検討することによって、富山城と金沢城との関連性を示唆するものとなるのではないだろうか。

以下、「安江町遺跡」（金沢市教育委員会前掲）に習い、本書に掲載した物について、一覧表を掲載する。観察表と合わせて参照されたい。

第12表 木札観察表

遺物番号	文 字 資 料	備 考	遺 構
411	四角に「高成屋」	焼 印	SK11
412	四角（または隅入四角）に「寅（又は常）傳」	焼 印	SK10
413	壺に「宮□□」	焼 印	SK10
414	四角に「橋」	焼 印	SK10
415	不明	焼 印	SK12
416	丸に「車屋」	焼 印	SK53
417	不明	焼 印	SK16
418	四角に「吉平」	焼 印	サブトレチ 一括
419	丸に「□八」	焼 印	サブトレチ 一括
420	隅入四角に「□町」「□屋」	焼 印	サブトレチ 一括
421	記号？	焼 印	サブトレチ 一括

遺物番号	文 字 資 料	備 考	遺 構
422	丸に「□屋」	焼 印	サブトレンチ 一括
423	四角に「五□」	焼 印	SK10
424	分銅に「□□や」	焼 印	SK10
425	丸に「ト」 丸に「傳」	焼 印	SK10
426	丸に「茶」	焼 印	SK10
427	四角に「白□屋」又は「白簾」 (山か)	焼 印	SK10
428	記号「山正」・丸に「橋五」	焼 印	SK10
429	四角に「□ □」・四角に「□□屋」	焼 印	SK11
430	隅入梢円に「宮竹屋」	焼 印	SK53
431	丸に「茶傳」	焼 印	SK52
432	丸に「酢」 丸に「橋五」	焼 印	SK12
433	四角に「宮成屋」	焼 印	SK11
434	隅入四角に「中の町／酒屋」	焼 印	SD08
435	梢円に「吉田屋」	焼 印	サブトレンチ 一括
436	丸に不明	焼 印	サブトレンチ 一括
437	丸に「七」	焼 印	サブトレンチ 一括
438	四角？に「小」	焼 印	サブトレンチ 一括
439	丸に「車屋」	焼 印	SD08
440	丸に「塩屋」	焼 印	SK11
441	不明	焼 印	サブトレンチ 一括
442	不明	墨 書	SK10
443	不明	墨 書	SK10
444	不明	墨 書	SK11
445	不明	墨 書	SK11
446	不明	墨 書	SD08
447	不明	墨 書	SD08
448	不明	墨 書	サブトレンチ 一括
449	□ □□ 記号「山イ」□ □□ 福沢□□□□□	墨 書	SK10
450	表 不明 裏 不明	墨 書	SK15
451	不明	墨 書	SK09
452	仕〆 □ □□ □□	墨 書	SD08下層
453	不明	墨 書	SK53
454	不明	墨 書	サブトレンチ 一括

遺物番号	文 字 資 料	備 考	遺 構
455	□ □□ 戸田式部	墨 書	SK53
456	不明	墨 書	サブトレンチ 一括
457	百十九番 □□□□□ 越中ト山 記号「山イ」福沢□□□□□	墨 書	SK12
458	四 越中□□ 大□ 十記号「山イ」福沢□□□□□ 五 □	墨 書	SK12
459	四 越中富山 大槻□□□□□ 百記号「山イ」福沢屋□兵衛殿 五 番	墨 書	SK12
460	不明	墨 書	SK10
461	不明	墨 書	SD08 東側掘方
462	不明	墨 書	SD08 東側掘方
463	不明	墨 書	SD08
464	不明	墨 書	SD08
465	不明	墨 書	SK09
466	不明	墨 書	SK09
467	不明	墨 書	サブトレンチ 一括
468	不明	墨 書	A1区 包含層中
469	四角に「大槻」	焼 印	SK11
470	四角に「大槻上」	焼 印	SK11
471	四角に「大槻」	焼 印	サブトレンチ 一括
472	表 「大」 裏 線刻	焼 印	SD08
473	表 不明(「寿」?) 裏 不明	墨 書	SK10
474	表 「?」 裏 丸に「四角」・「?」	墨 書	サブトレンチ 一括
475	表 不明	墨 書	SK10 裏 不明
476	表 記号「山イ」他3列 裏 「田子浦」	墨 書	SK10
477	絵画	墨 書	サブトレンチ 一括

【その他の木製品】(第64図～第67図)

石組み水路

石組み水路 (486、492、502) 最上層 (478) 上層 (483) 鉄滓層 (482)

A-1区

S K04 (505)

A-2区

S D79 (480) S K103 (506)

C-2区

S D08 (488、490、499、507、511) S D08東側掘方 (509) S K09 (497、501)

S K10 (479、481、491、493、495) S K11 (484、485、494、496、500、503、504、508、510)

S K12 (487、489) S K52 (498)

本遺跡からは下駄・木札・漆器の他に、87点の木製品が出土している。

挿図番号478～482は櫛である。481のみが挿櫛と見られるが、他4点は横櫛である。いずれも遺存状態は良好ではない。478は歯部が欠落しており、また右端部も欠落している。残存長12.2cmを測り、欠落した右端部を含む推定値は13～4cm前後であろう。479は唯一全長が確認可能で、歯の数も39本である。480は全面朱塗りである。481は挿櫛である。480が全面朱塗りであるのに対し、481は表裏両面とも黒漆塗りで、縁部には金彩の痕跡が認められる。また両面に確認できる模様状の痕跡についても、金彩の痕跡が見え、豪華な作りであった事が分かる。

483、484・485は小型の曲げ物容器である。いずれも径が10cm以下である。484・485は身と蓋が組み合わせた状態で出土している。計測数値からも分るように、蓋と底板の径が同じで、蓋はやや斜めに身内部に落ち込むような状態で出土した。内部から粉末状の内容物が確認され、蓋表面に『□日薬』と墨書きされていることから、薬品を入れる容器であったと推測できる。483には付随する蓋は出土しなかったが、484よりさらに小さい容器であり、内部に僅かに付着物が残っている。あるいは同様の用途のものであろうか。

486は柄杓である。側板の2箇所に穿孔し、断面長方形を呈する棒を通して柄としている。穿孔の位置から柄は身に対して直角ではなく、約75°(身と柄の間の上部角度)に傾けて取り付けられていたことが分る。全面黒漆塗りであった可能性がある。

487～489は包丁状の道具の柄と考えられる。488には金属部分が残存しており、鎌による腐食が進み、また大半が欠損しているため、形状は不明であるが、刃状のものと思われる。木製部分は長軸3.5cm、短軸2.1cmの楕円筒状を呈す。487の金属部分は遺存しないものの、形状や大きさが488に類似することから、同形状のものであると考えられる。489は円筒形状を呈し、先端部片側に溝状の切り込みが施されている。切り込みの幅は7～8mmを測り、他2点同様に金属がはめ込まれたと考えるとやや広い。ナタのような大型の刃物の柄と考えられる。

490～494は杓子である。全て欠損により、全形を確認できるものはない。最も状態の不良な490を除いて、他4点は漆塗りである。491は赤・黒2色の漆が使用され、内外面が塗り分けられている。490、491の形状は、柄に対して身の部分が柄と平行に長軸を持ち、492～494は柄と直交する方向に長軸を持つ。5点とも身の部分が浅い。495は甌である。長軸に対して片側は半円形に、片側は直線的な形状である。直線的な片側については欠損の可能性もあるが、長軸方向反対側で確認された穿孔がほぼ中央に位置することや、直線的な片側が明瞭な欠損と見られる状況で

ないことから、ほぼ完形であると思われる。用途は不明であるが、半円部の縁辺がやや薄く加工されており、籠状の道具であろう。496は匙である。赤・黒2色に塗り分けられた状況は491に類似するが、全体に小型であることから匙とした。柄と身の一部が欠損しているため、全形は不明である。497はシャモジである。全体にやや肉厚である。ナス形を呈し下部に向かってやや薄くなる形状と、上部に柄が付いていた痕跡が認められたため、シャモジとした。

498～502は刷毛である。「毛」の部分はいずれも残存していない。いずれも握部上端付近に穿孔が見られる。刷毛の機能上、この穿孔は必要ないものであり、おそらくは紐などを通して、吊り下げて保管するためのものと考えられる。498～500は全長約半分が握部で、長軸方向の概ね中央付近以下が徐々に広がり、毛の付く先端部で最大幅を測る。498には全面に黒漆が塗られている。501は全長約半分が握部で、先端部が急激に拡がる。全面に赤漆（朱系）が塗られ、片面に「大口一」（大極上か）の刻書が確認される。502は全長に対して握部が長く、先端部が急激に拡がる。全長14.75cmに対して握部長は10.85cmを測る。また、握部の最大幅が基部で2.1cmであるが、毛の付いていた先端部の幅は遺存値で9.4cm、左右対称であれば復元推定15.8cmが見込まれる。全面に黒漆が塗られ、これとは別に先端部に黒漆が付着している。そのことから、漆器製作に使用された道具の可能性がある。

503～506は箸である。

507は枕と思われる。形状はT字状を呈し、下部側面が土圧等により潰れている。機種の特定は困難であったが、左右均等に曲線を描くような丁寧な加工の状況、ほぼ全面に黒漆が塗られた状況などから枕の台部分とした。

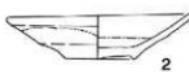
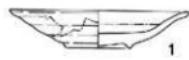
508、509は鏡匣である。両方ともほぼ同規格であるが、握部の幅が508の方が広い。鍵穴上の板材縁辺部に木釘を使用して側板を取り付けている。509は側板が遺存しており、508にも同様の位置に木釘の痕跡が認められることから、構造も同一であったと推定される。黒色を基本とした漆塗りである。

510は砥石台である。厚さ2.5cmの扁平な板材の中央部を凹ませ、砥石を嵌めこんだものである。凹ませてある部分の底部の加工は雑で、工具痕が明瞭に残る。出土時に砥石の一部が残った状態で出土している。凹み部分から推定して、本来は全長約22.5cm、幅約5.5cm程度の砥石を嵌めこんで使用していたものと考えられるが、出土した砥石は全長7.4cm、全幅6.0cm程度であり、3分の2が欠損している。遺存している砥石の厚さは8cm程度であるが、上部の凹みの部分の深さが約11cm程度であることから、機能上少なくとも嵌め込まれた砥石の厚さは11cm以上のものであったと推定される。

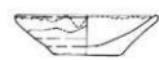
511は用途不明の木製品である。形状は台形を呈し、内面は割りみかれ、上部中央は穿孔されている。

(藤井)

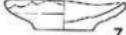
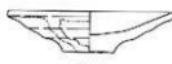
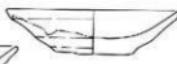
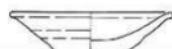
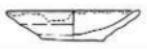
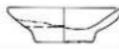
(石組水路)



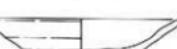
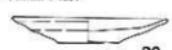
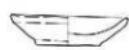
(石組最上層)



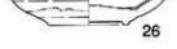
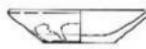
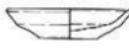
(石組上層)



(石組鉄滓層・鉄滓下層)

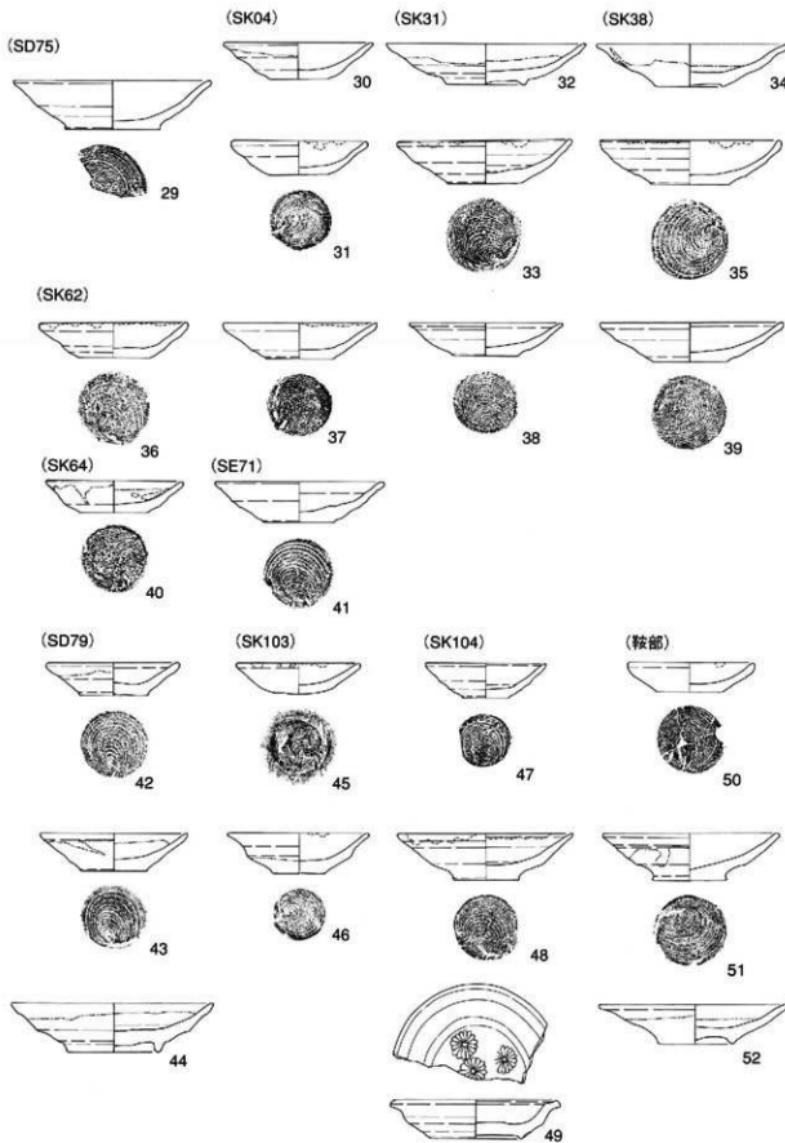


(SD01上層)



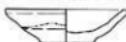
0 1:3 15cm

第27図 越中瀬戸 四(1)

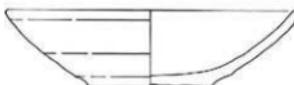


第28図 越中瀬戸 皿 (2)

C-2区 (SD08)



53

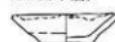


54



55

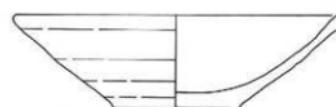
(SD08下層)



58

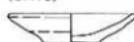


56



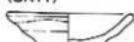
57

(SK10)



59

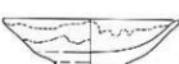
(SK11)



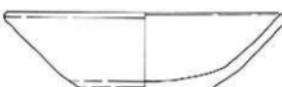
62



63



60

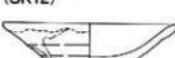


64



61

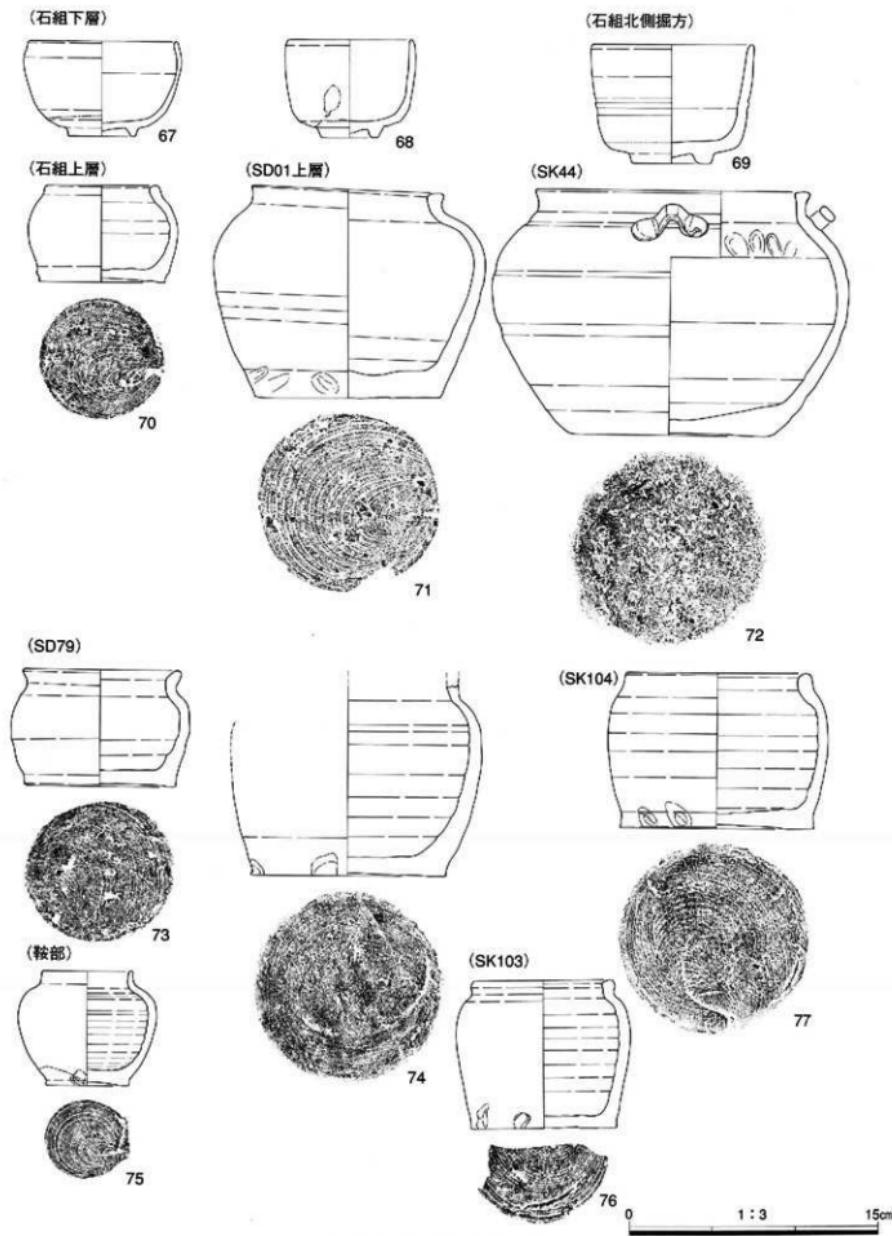
(SK12)



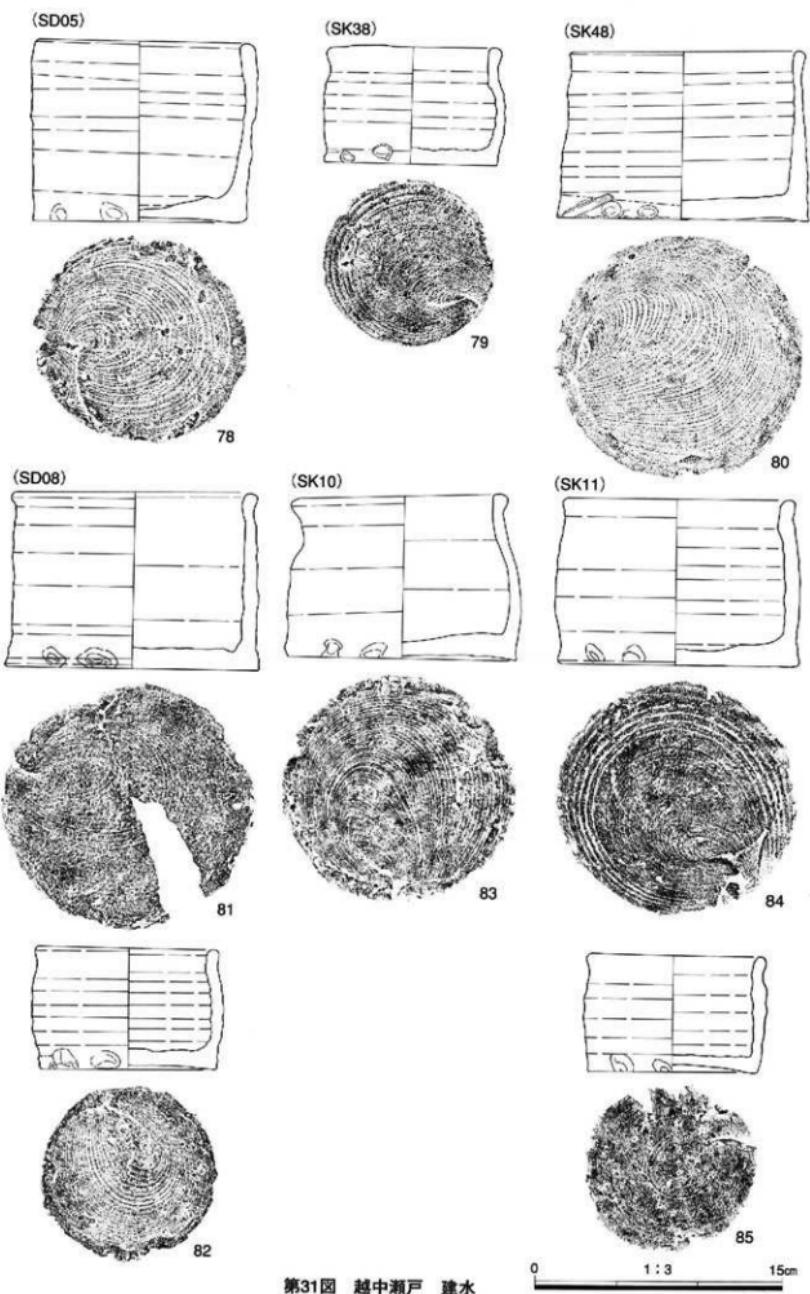
66



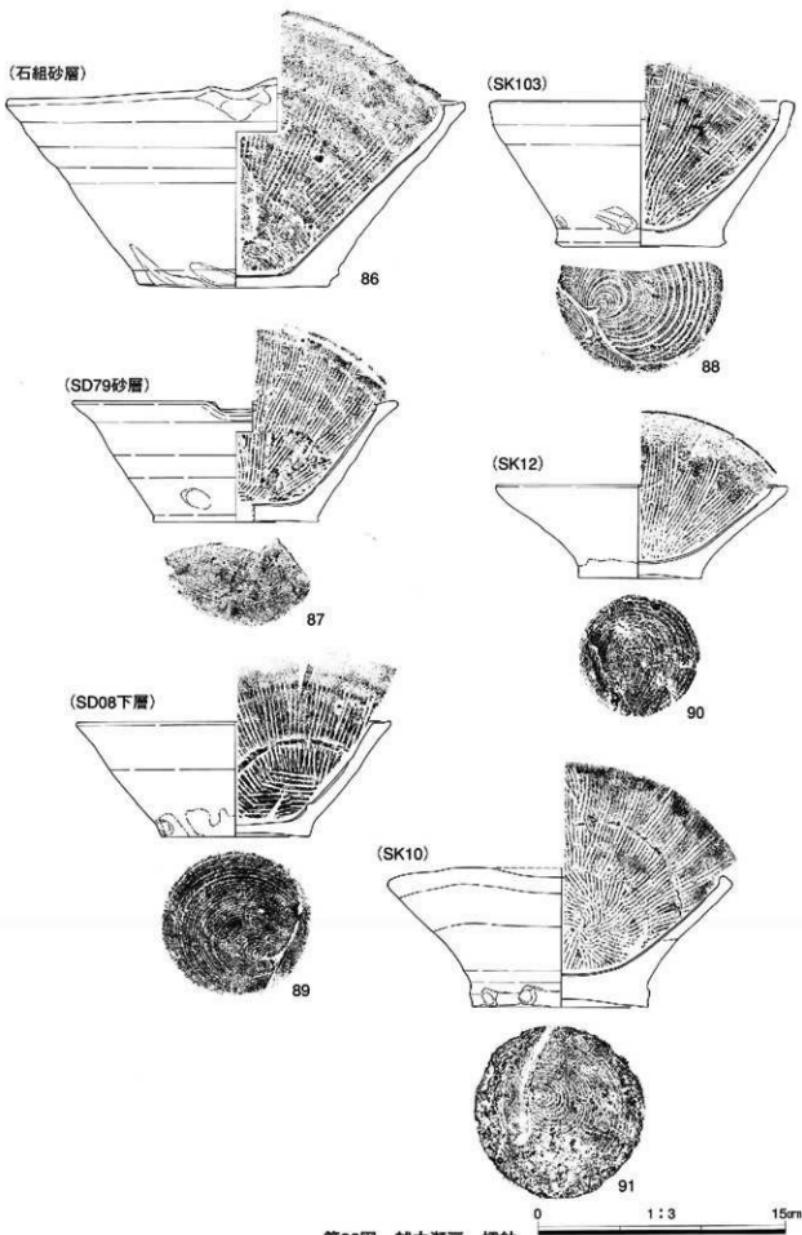
第29図 越中漸戸 皿 (3)



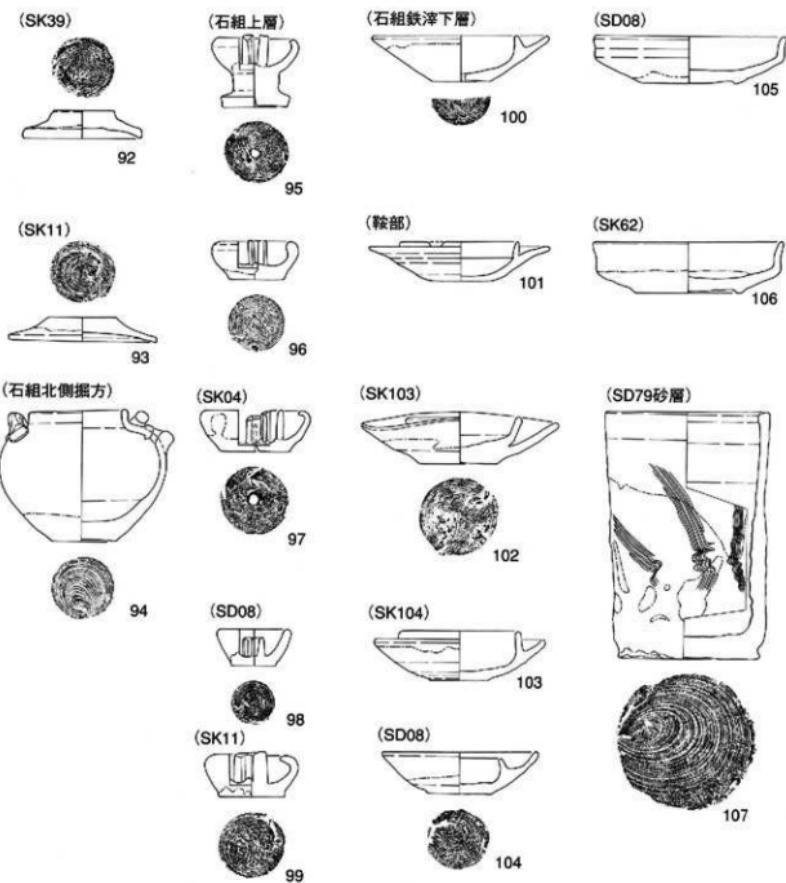
第30図 越中瀬戸 瓢・壺



第31図 越中瀬戸 建水



第32図 越中瀬戸 掘鉢



0 1:3 15cm

第33図 越中瀬戸 その他

(石組最上層)



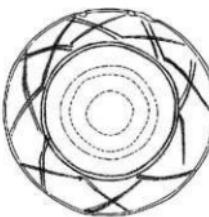
108

(石組水路)



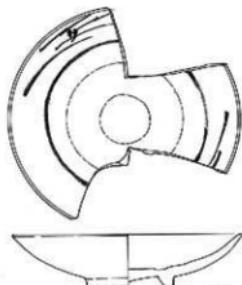
109

(石組上層)



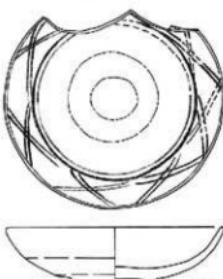
110

(石組鉄滓下層)

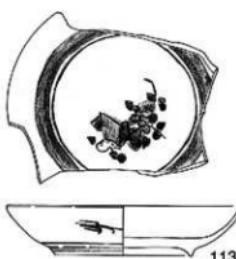


111

(石組下層)

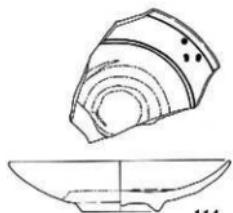


112



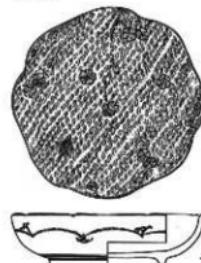
113

(SD01)

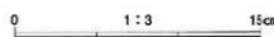


114

(SD05)

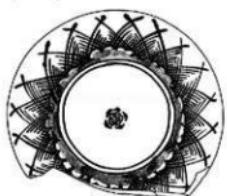


115



第34図 伊万里 皿(1)

(SE31)



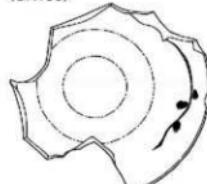
116

(SK04)



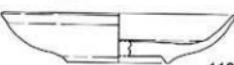
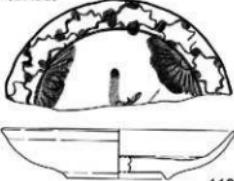
117

(SK100)

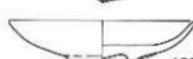
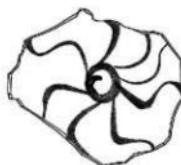


118

(SK58)



119

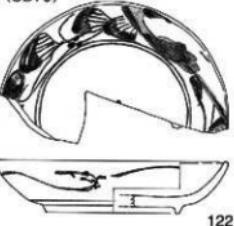


120



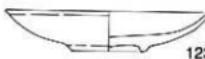
121

(SD79)

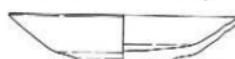


122

(SK103)

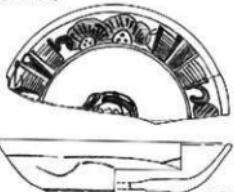


123



124

(SK104)

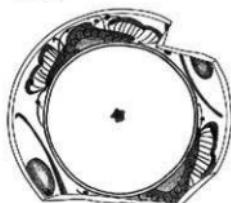


125

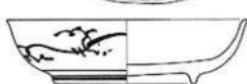


第35図 伊万里 皿 (2)

(SD08)



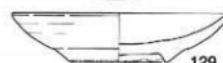
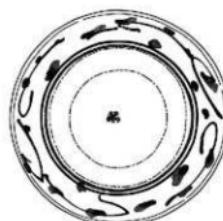
(SK10)



(SK10)



128



129

(SK11)



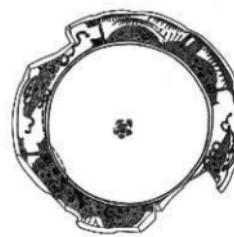
133



130



132

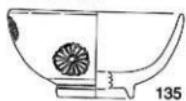


134

0 1:3 15cm

第36図 伊万里皿(3)

(石組最上層)



135

(石組鉄淬層)

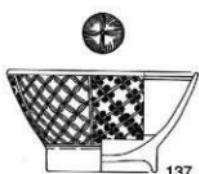


138

(石組上層)



136

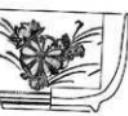


137

(石組鉄淬下層)



139

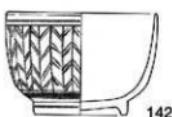


140

(石組下層)



141

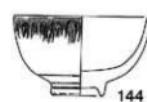


142

(石組北側掘方)

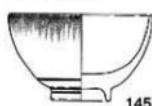


143



144

(SD01上層)



145



146



147

(SE31)



148



149



151



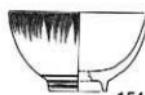
152



150



153

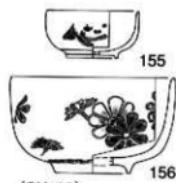


154

0 1 : 3 15cm

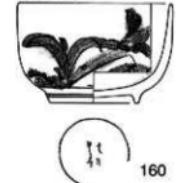
第37図 伊万里 碗 (1)

(SD79)



155

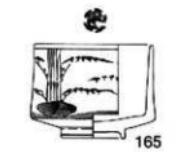
(SK103)



157

156

(SD8)



161

160

162

(SK104)



158

159



163

164

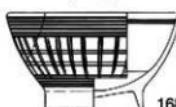
皿



165

166

皿

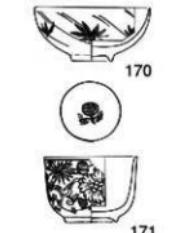


167

168

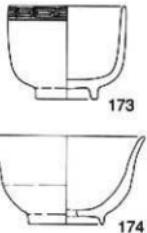
169

(SK10)



170

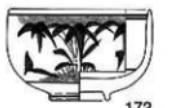
171



173

174

皿



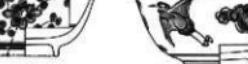
172

175



176

177



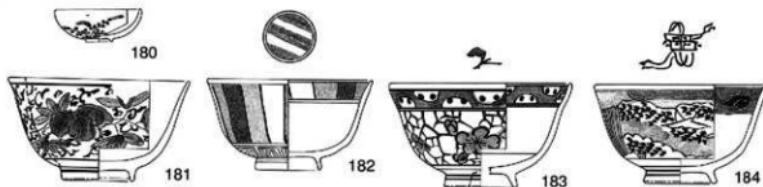
178

179

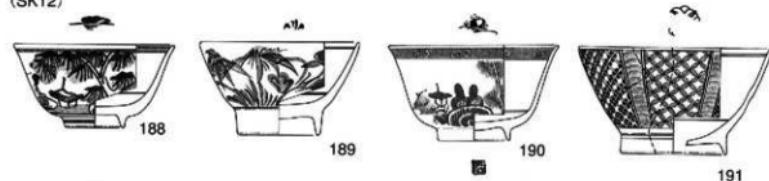
第38図 伊万里 碗 (2)

0 1:3 15cm

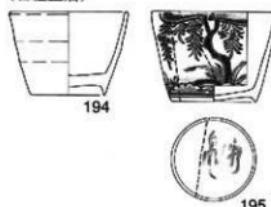
(SK11)



(SK12)

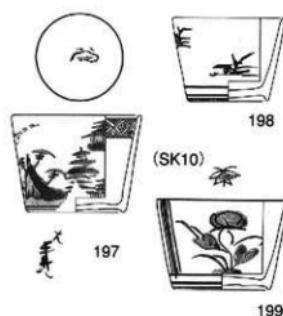


〔猪口〕
〔石組上層〕



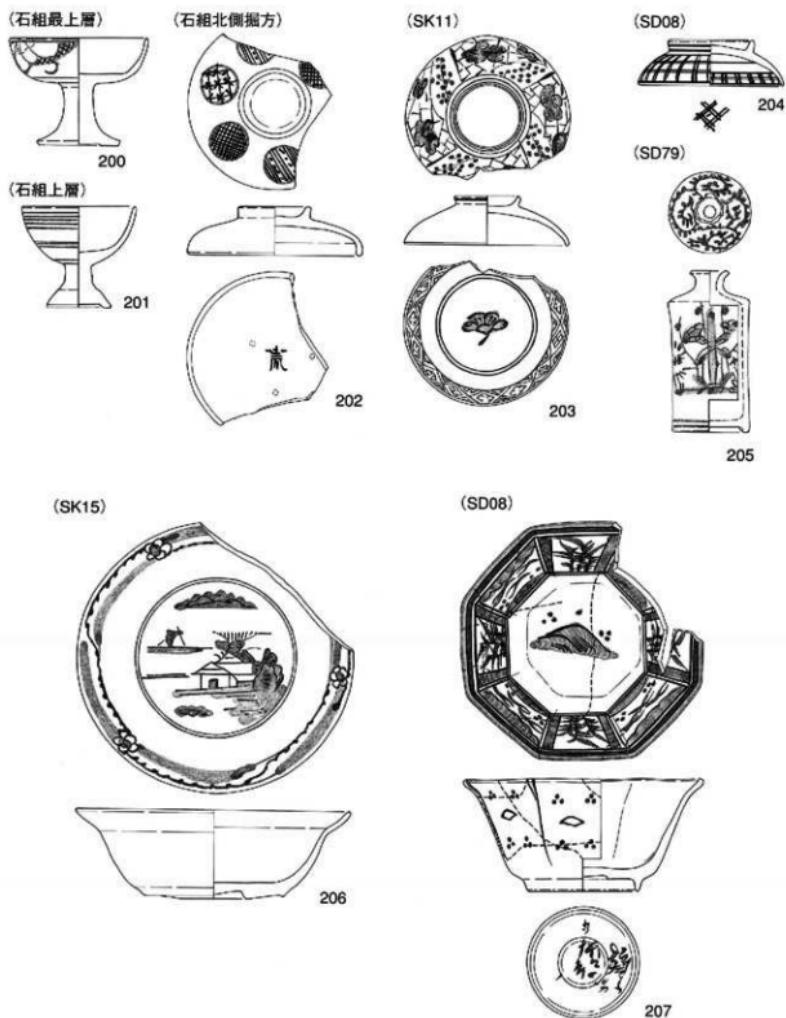
(SK103)

(SD08)



第39図 伊万里 碗・猪口

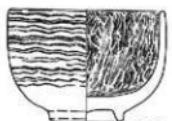
0 1 : 3 15cm



0 1 : 3 15cm

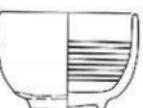
第40図 伊万里 その他

(石組鉄滓下層)



208

(SK103)



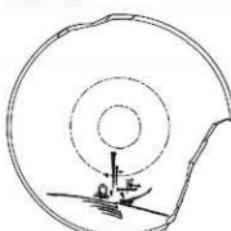
210

(SK11)



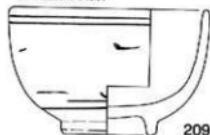
212

(石組上層)



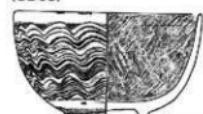
213

(石組鉄滓層)



209

(SD68)



211

(石組鉄滓下層)

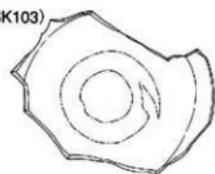


214

(SK38)

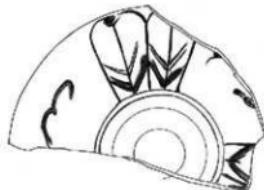


(SK103)



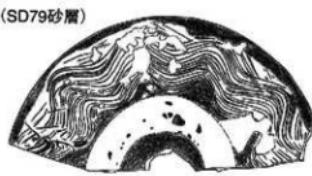
216

215



217

(SD79砂層)



218

0 1 : 3 15cm

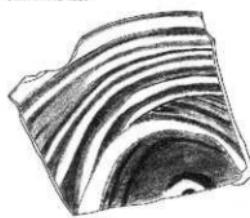
0 1 : 4 20cm
(215・217)

第41図 唐津 碗・皿

(SD01)



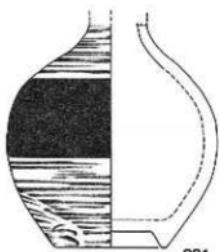
(SD79砂層)



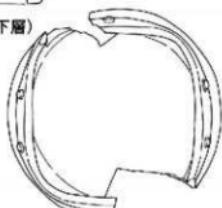
220

219

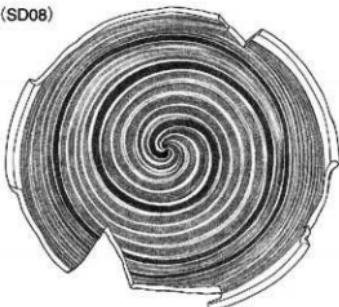
(SK10)



221

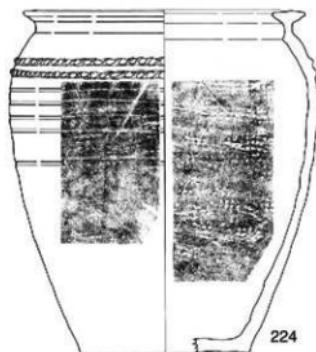


(SD08)

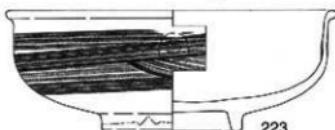


223

(石組北側掘方)



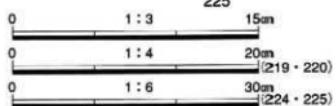
224



(SD08)

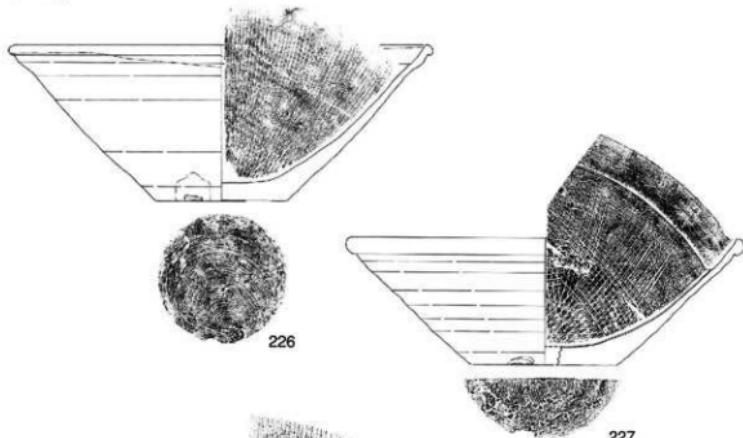


225

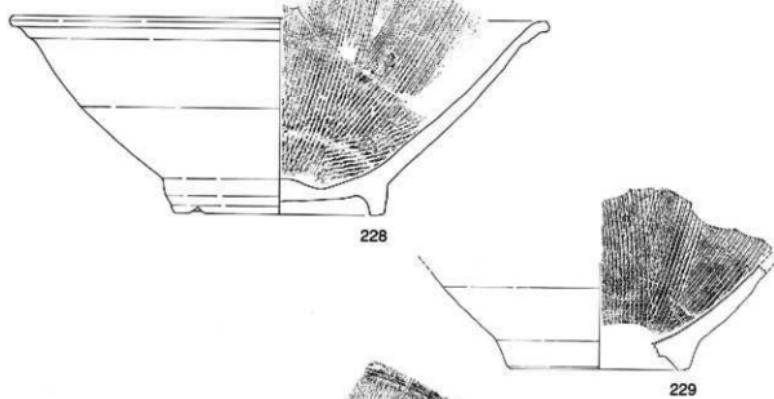


第42図 唐津 鉢・その他

(SK103)



(SK10)



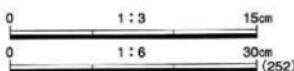
(SK11)

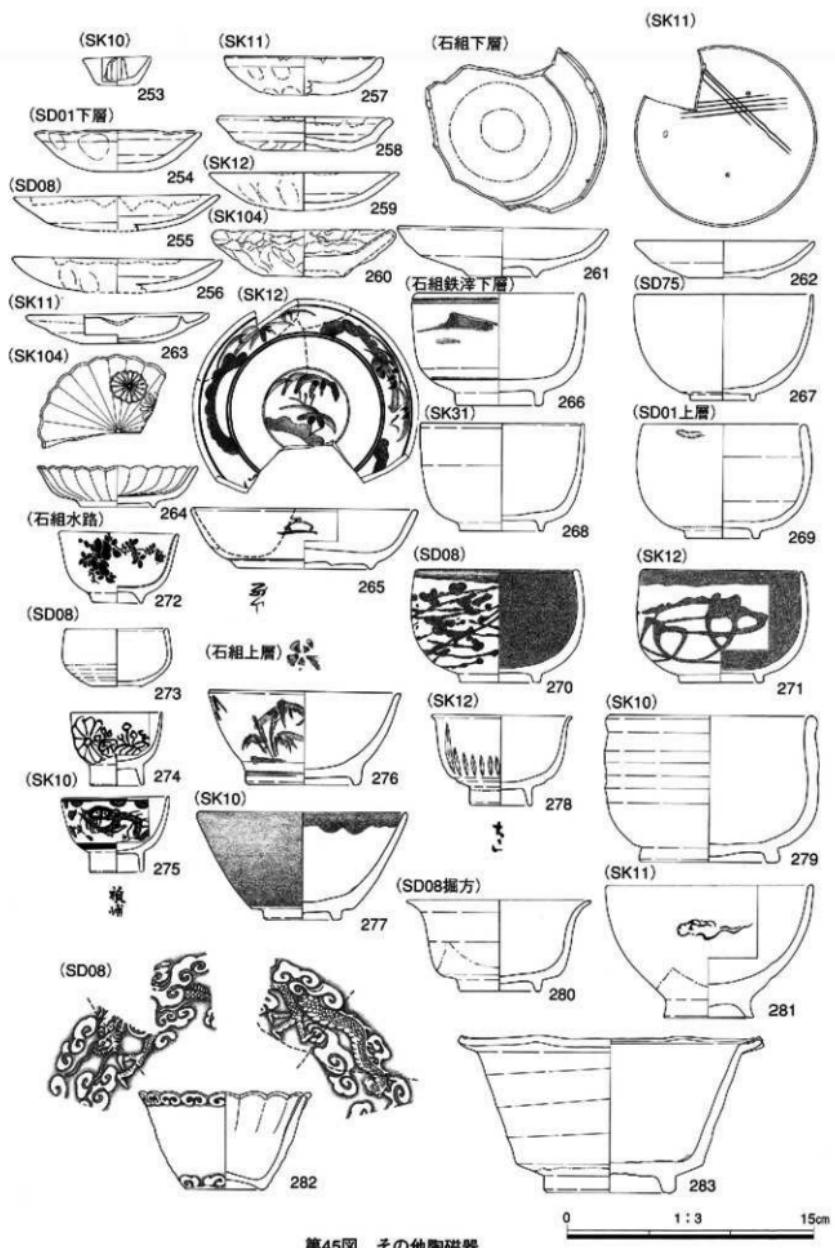


第43図 唐津 挿鉢

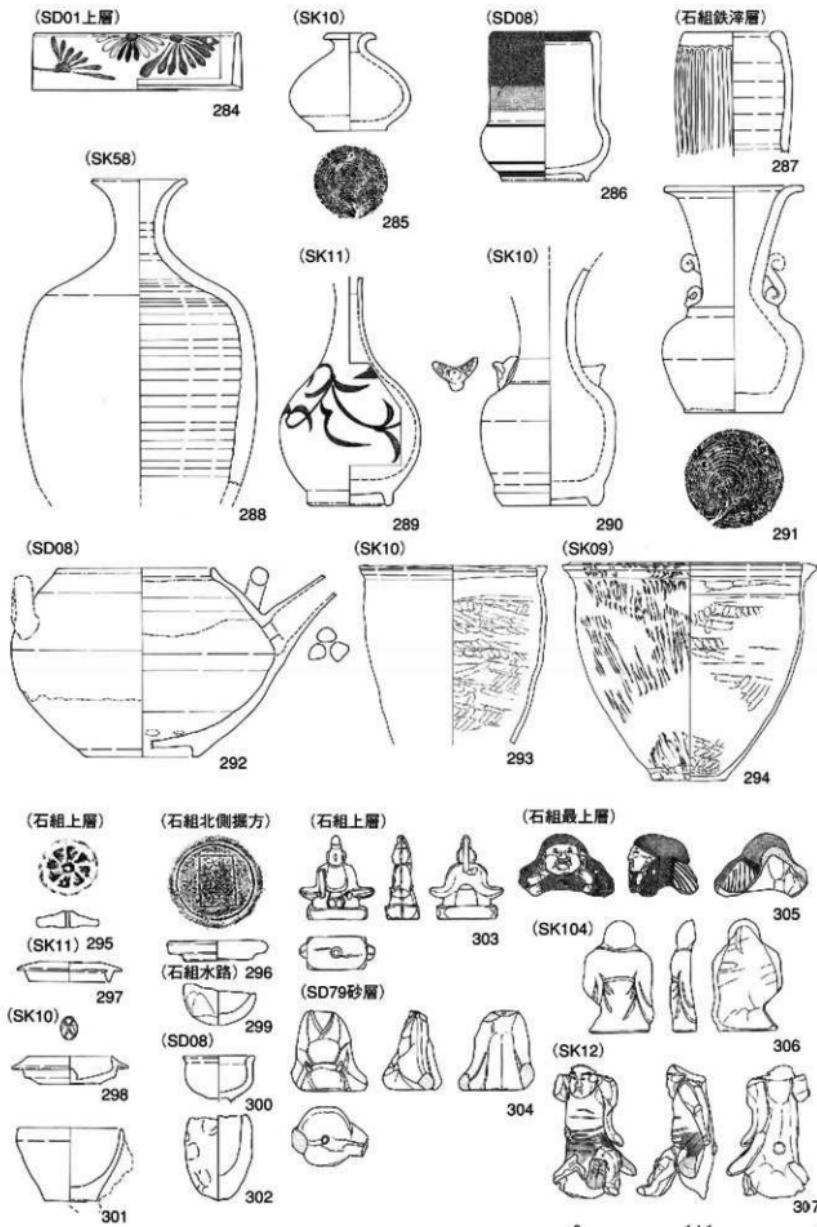


第44図 濑戸美濃

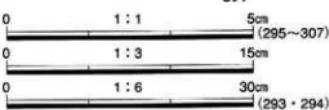




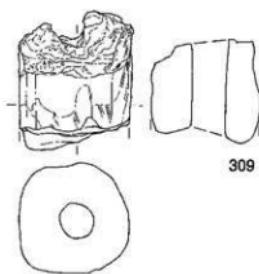
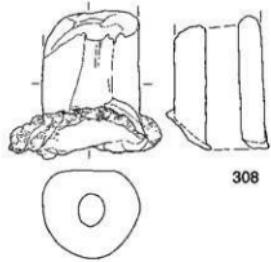
第45図 その他陶磁器



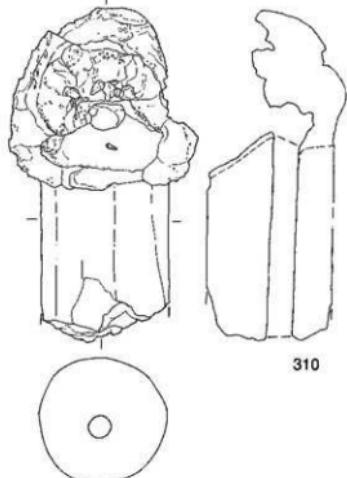
第46図 その他陶磁器 その他



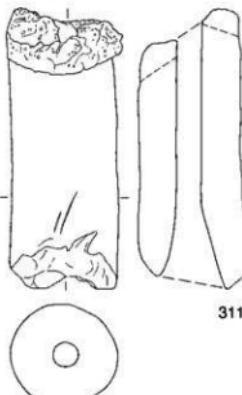
(石組鉄滓層)



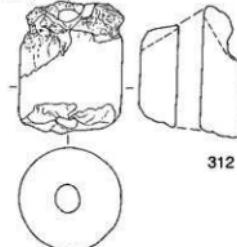
(SD01上層)



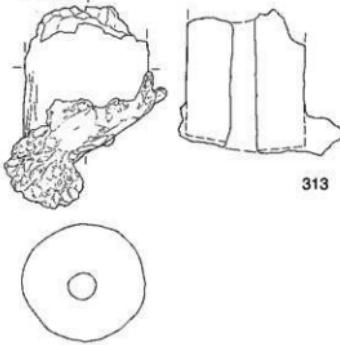
(SK12)



(SK21)

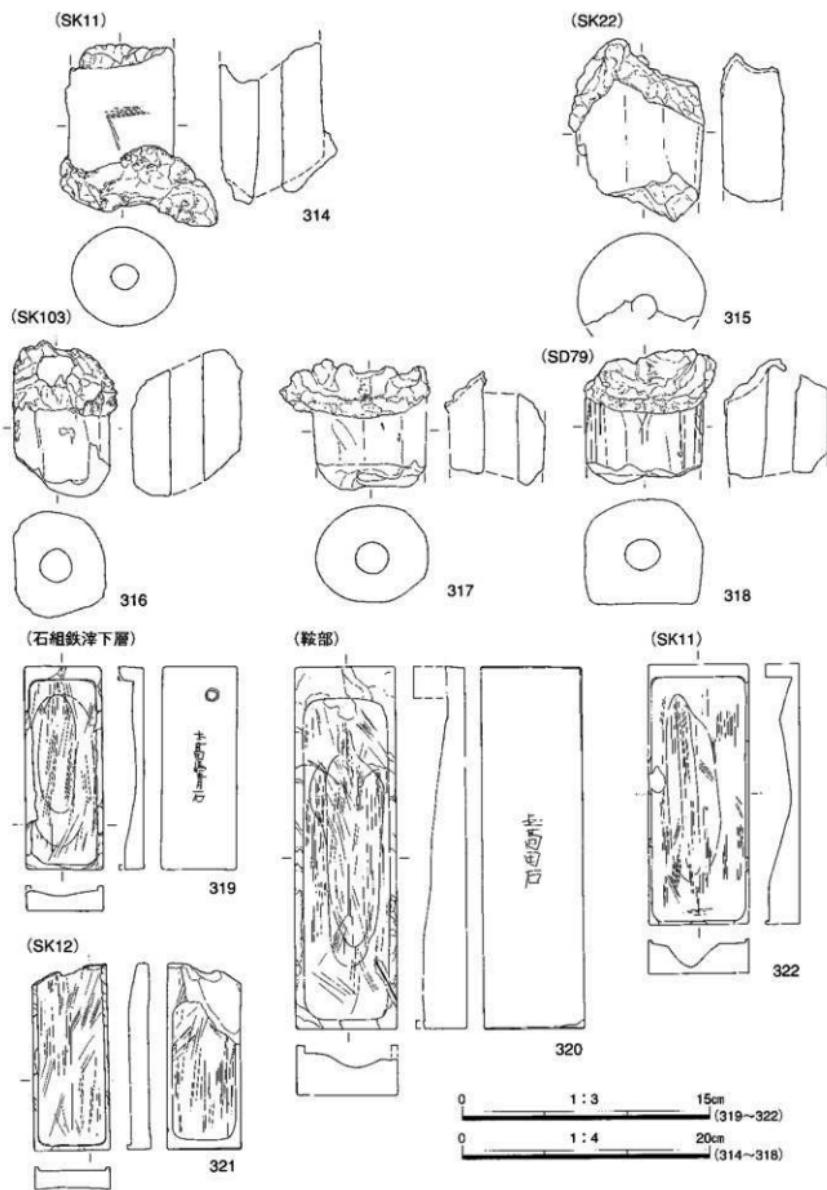


(SK38)

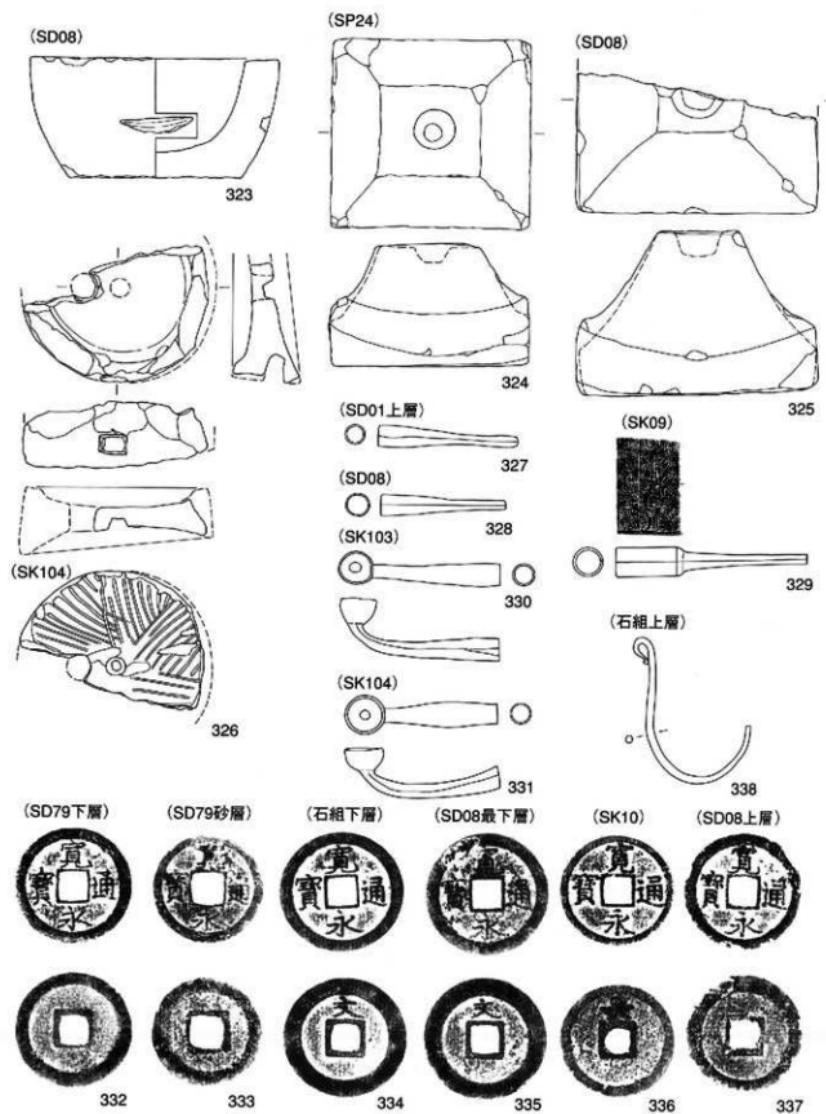


0 1:4 20cm

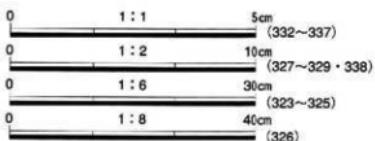
第47図 羽口

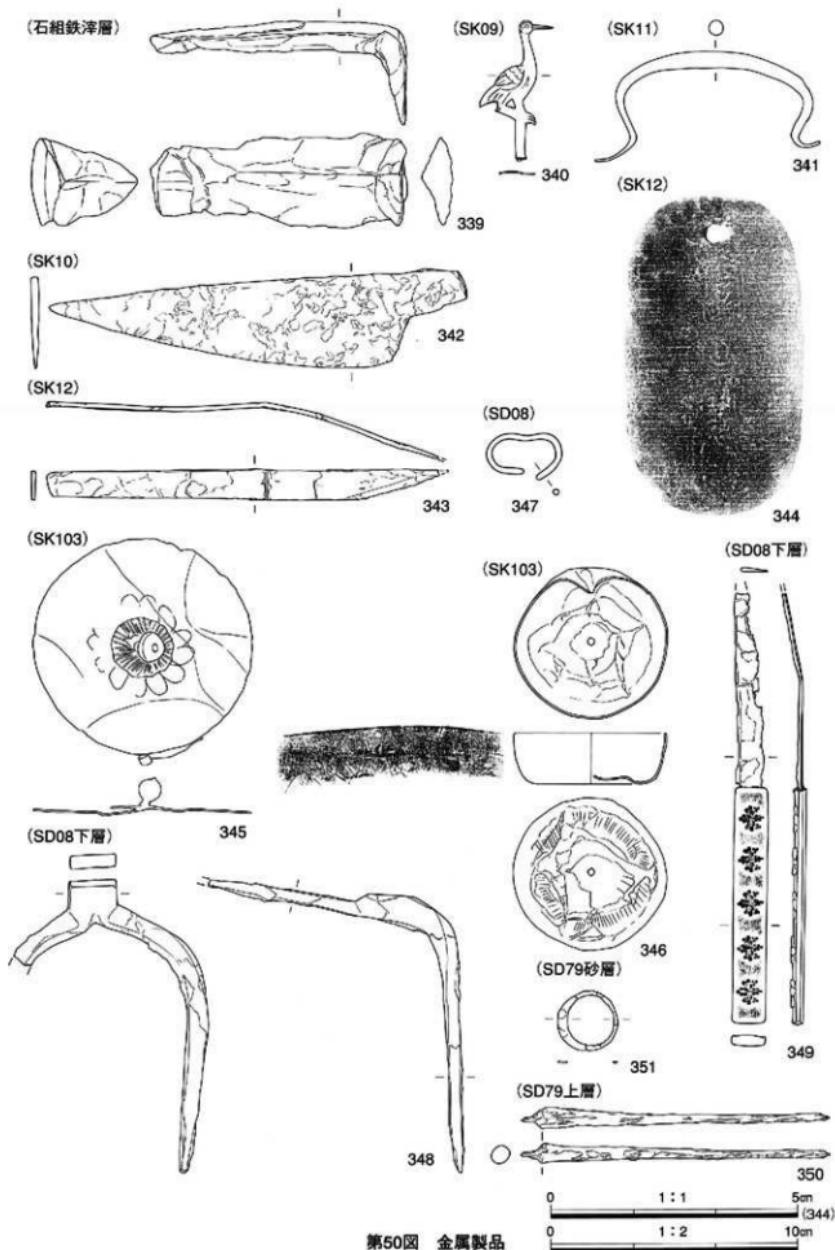


第48図 羽口・硯

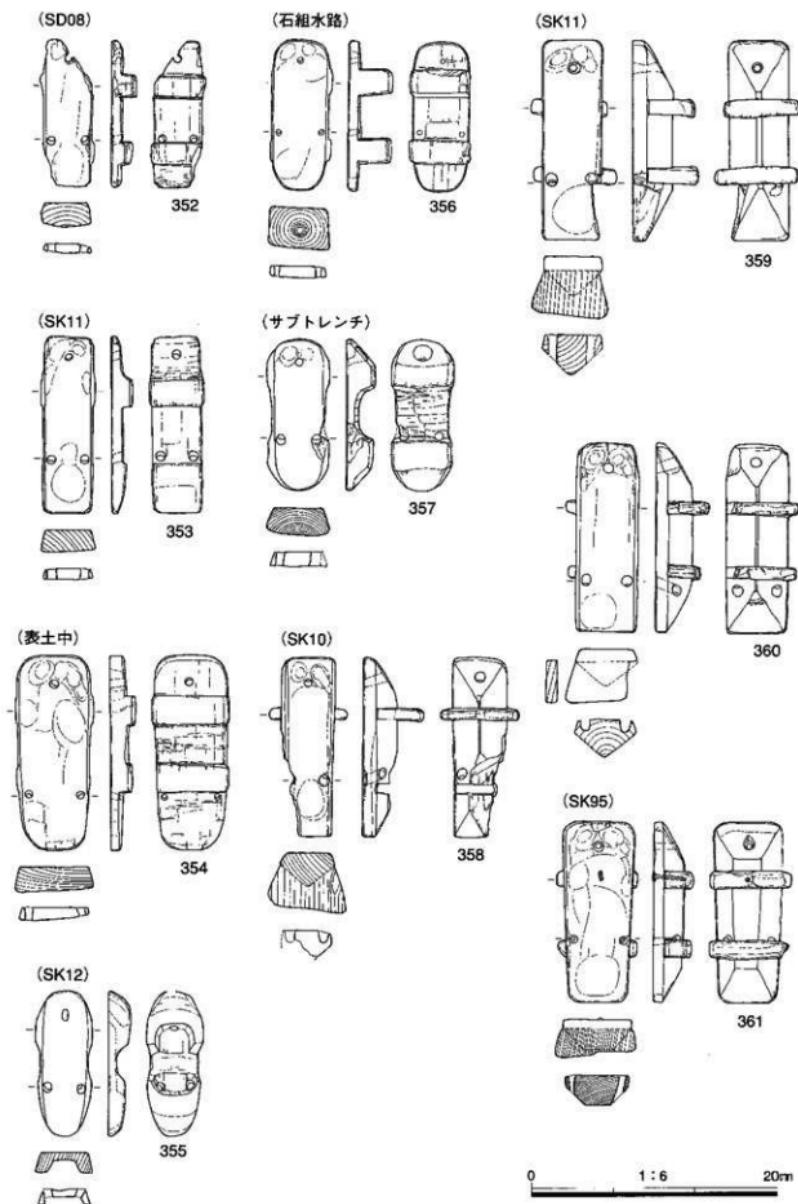


第49図 石製品・金属製品



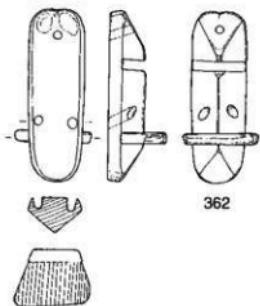


第50図 金属製品

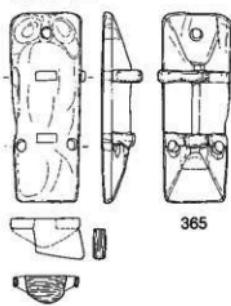


第51図 木製品 下駄 (1)

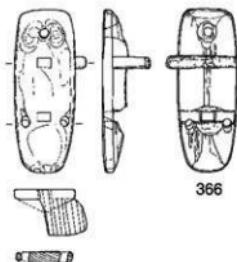
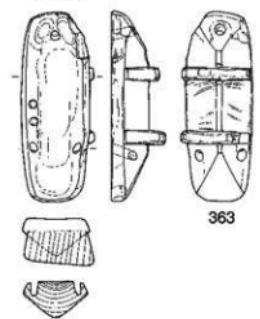
(SK09)



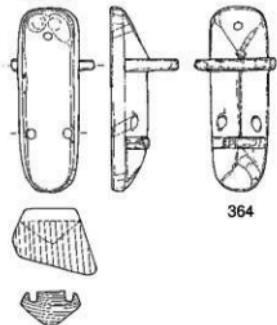
(SD01上層)



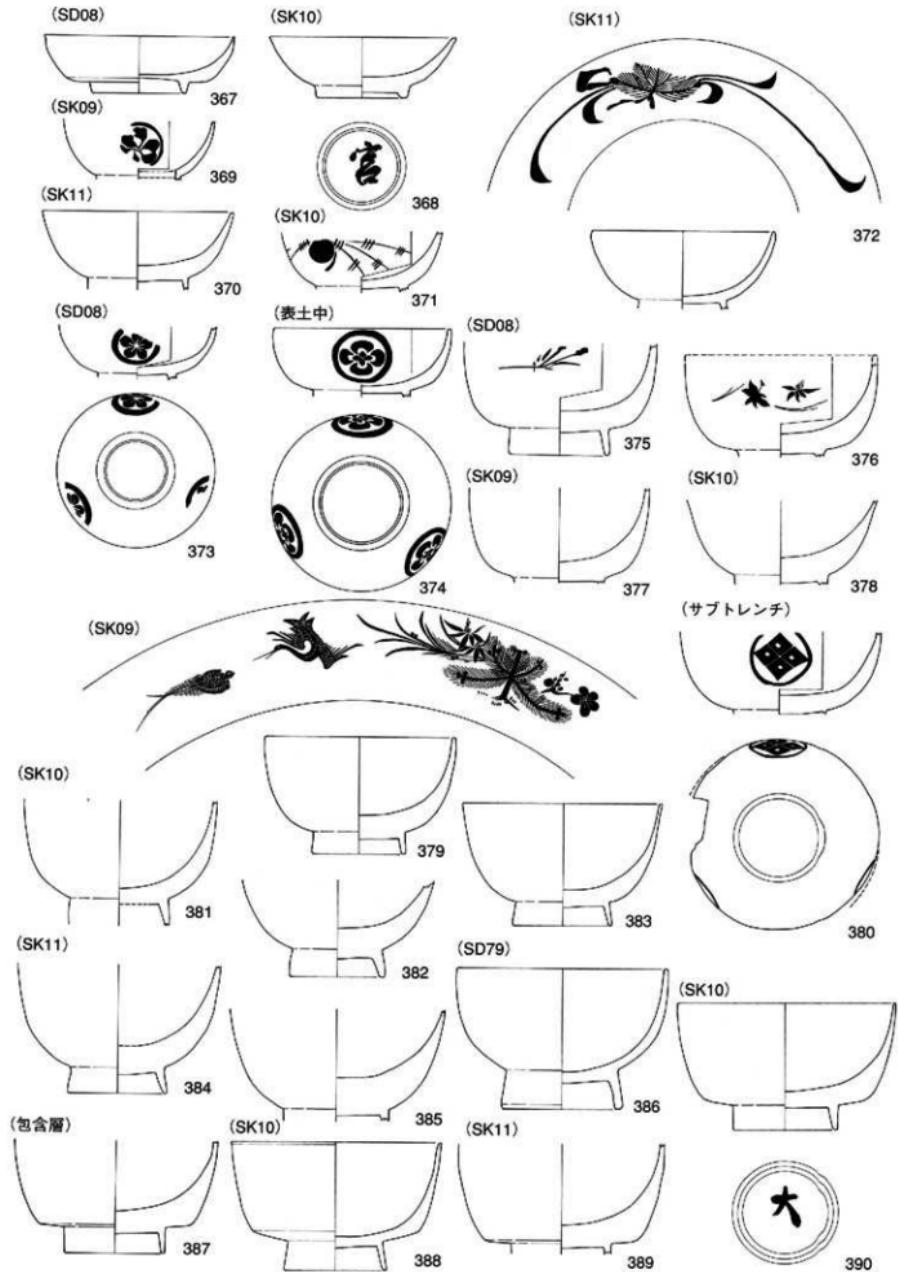
(SD08)



(SK11)

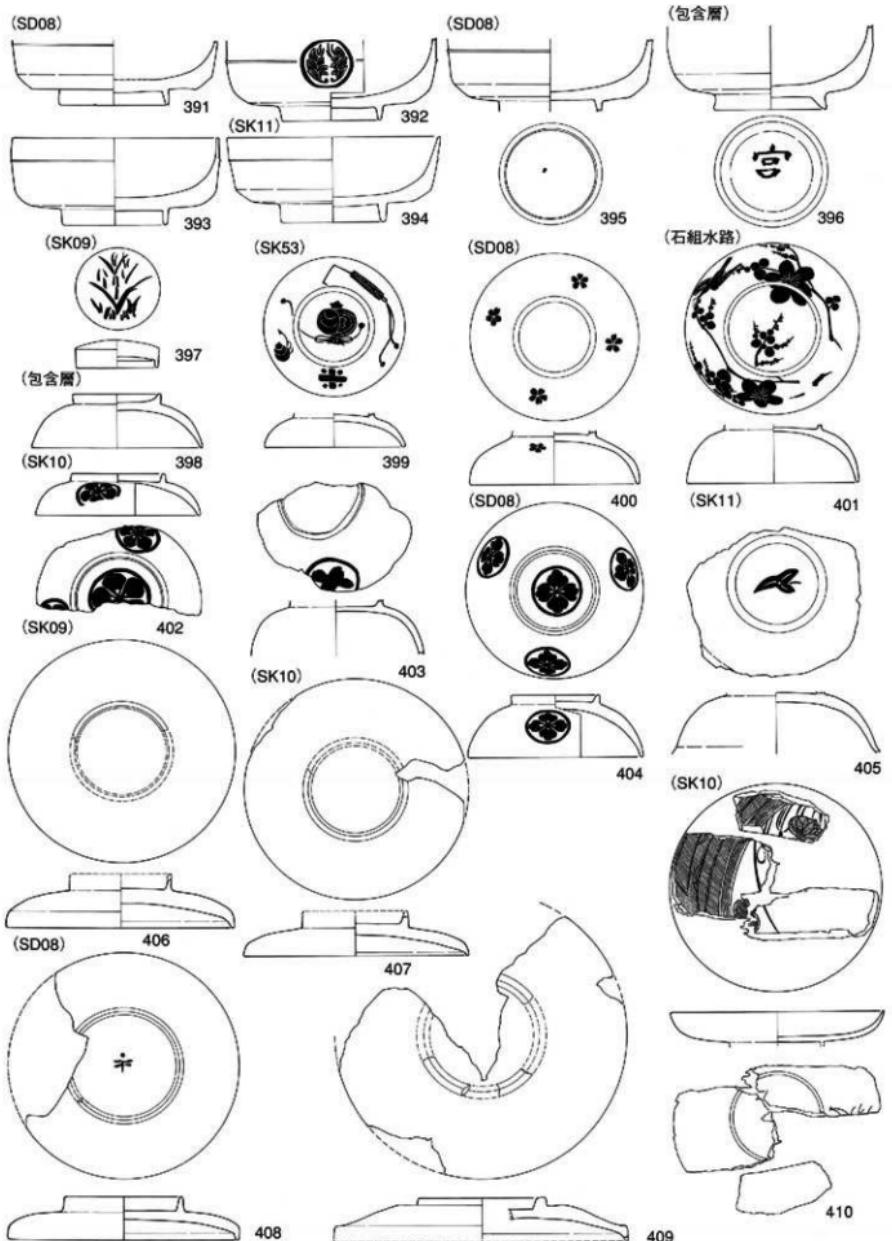


第52図 木製品 下駄 (2)



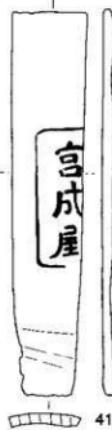
第53図 木製品 漆器 (1)

0 1:3 15cm

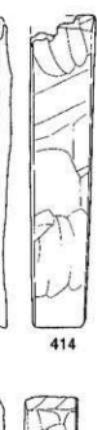


第54図 木製品 漆器 (2)

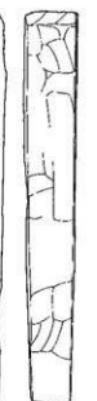
(SK11)



(SK10)



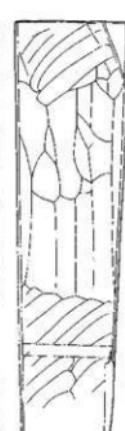
(SK16)



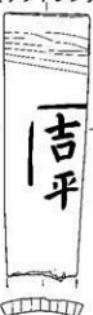
(SK12)



(SK53)



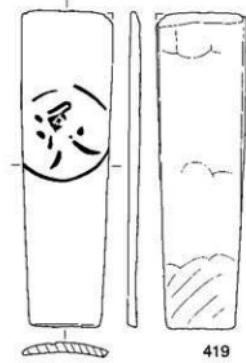
(サブトレーンチ)



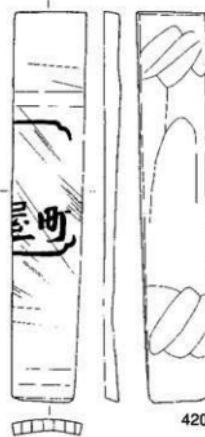
0 1:3 15cm

第55図 木製品 木札 (1)

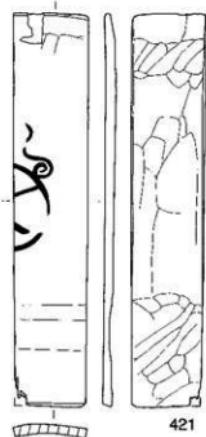
(サブトレンチ)



419



420



421

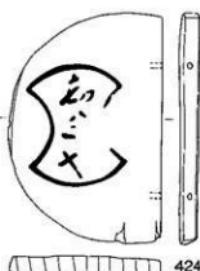


422

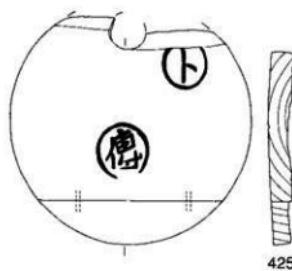
(SK10)



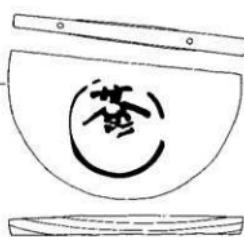
423



424



425



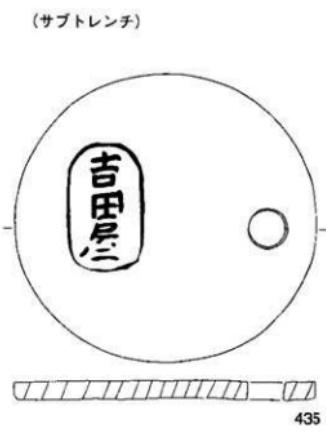
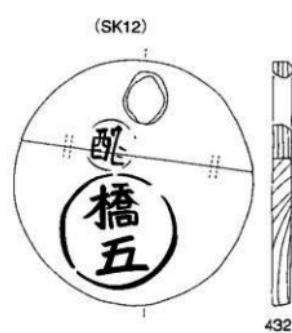
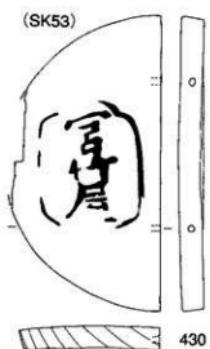
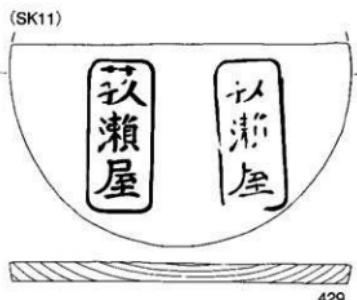
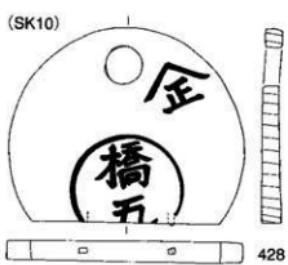
426



427

0 1:3 15cm

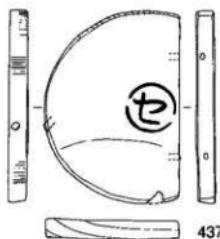
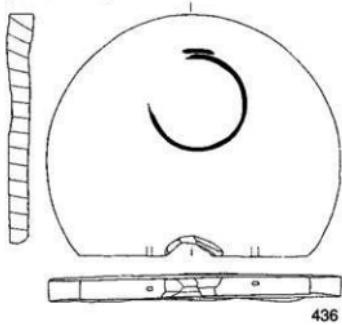
第56図 木製品 木札 (2)



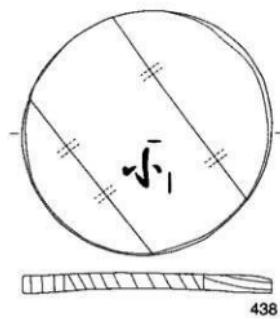
0 1 : 3 15cm

第57図 木製品 木札 (3)

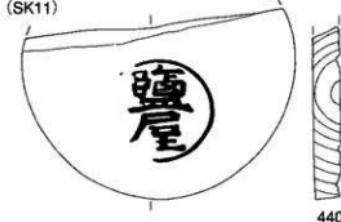
(サブトレンチ)



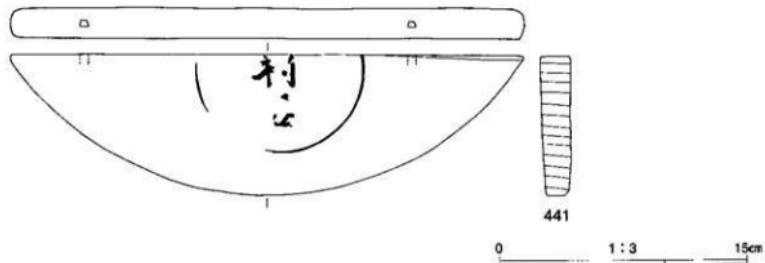
(SD08)



(SK11)



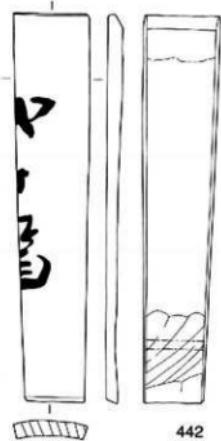
(サブトレンチ)



0 1:3 15cm

第58図 木製品 木札 (4)

(SK10)

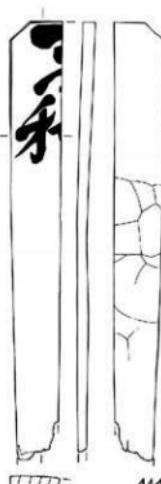


442

(SK11)

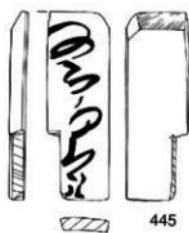


443

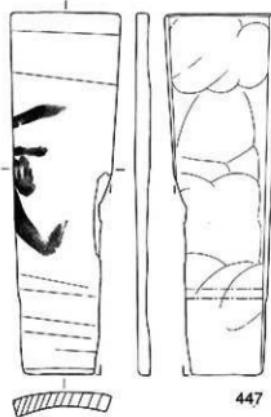


444

(サブトレンチ)



445



447



448

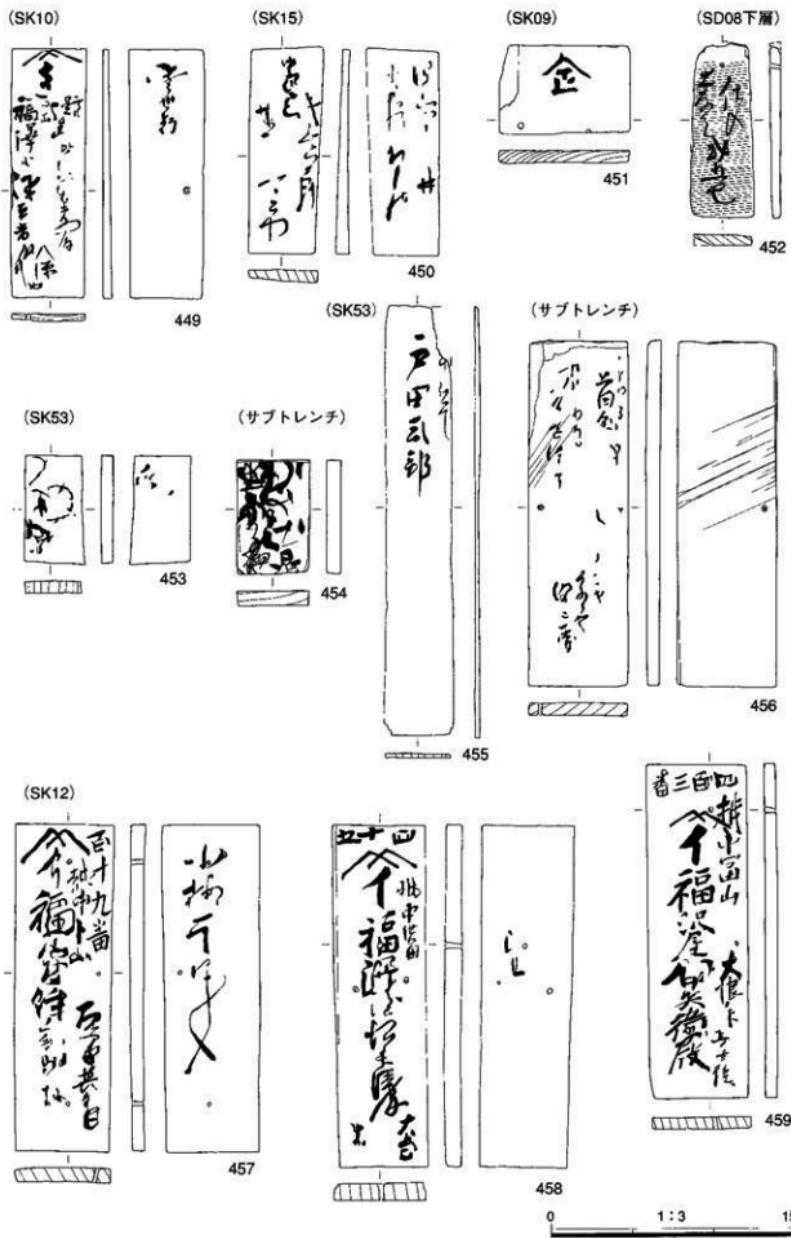
(SD08)



446



第59図 木製品 木札 (5)

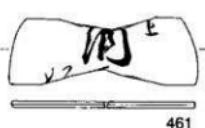


第60図 木製品 木札 (6)

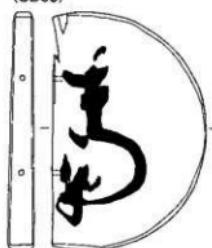
(SK10)



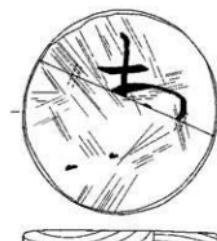
(SD08東側掘方)



(SD08)



460



464



462

(サブレンチ)



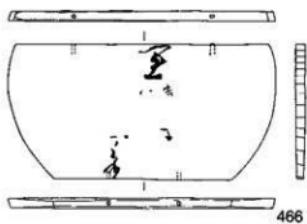
467

(SK09)



465

(包含層)



466



468

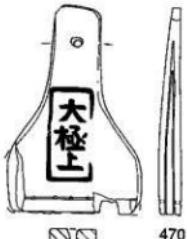
0 1:3 15cm

第61図 木製品 木札 (7)

(SK11)



469



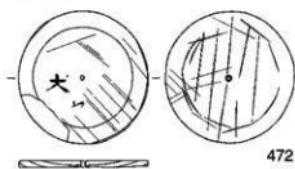
470

(サブトレンチ)



471

(SD08)



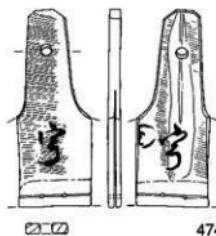
472

(SK10)



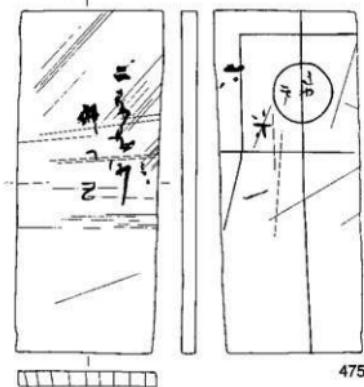
473

(サブトレンチ)

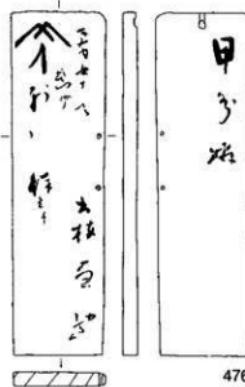


474

(SK10)



475

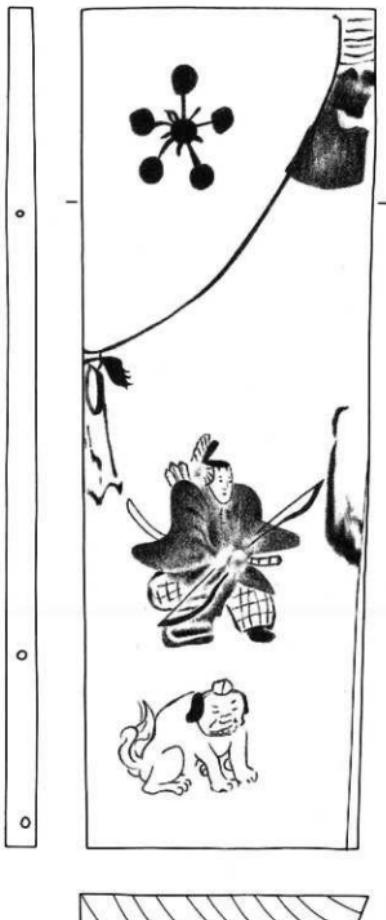


476

0 1:3 15cm

第62図 木製品 木札 (8)

(サブトレレンチ)



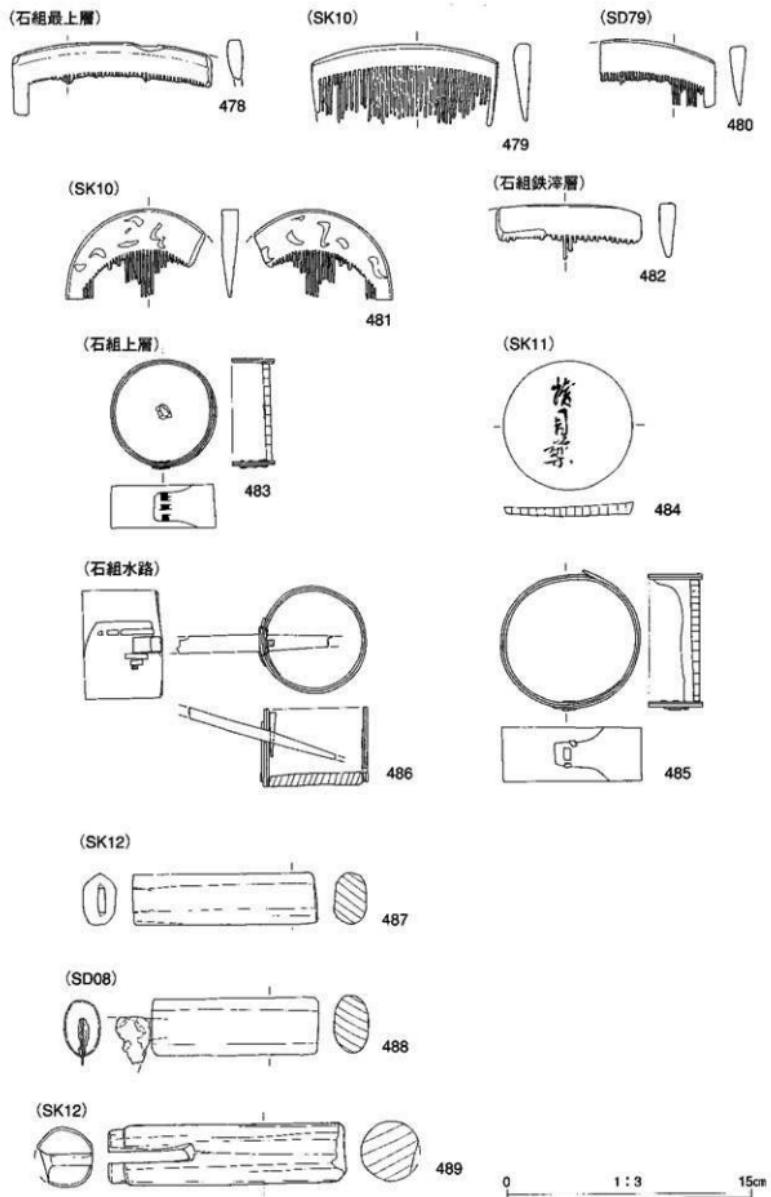
赤外線写真（上部）



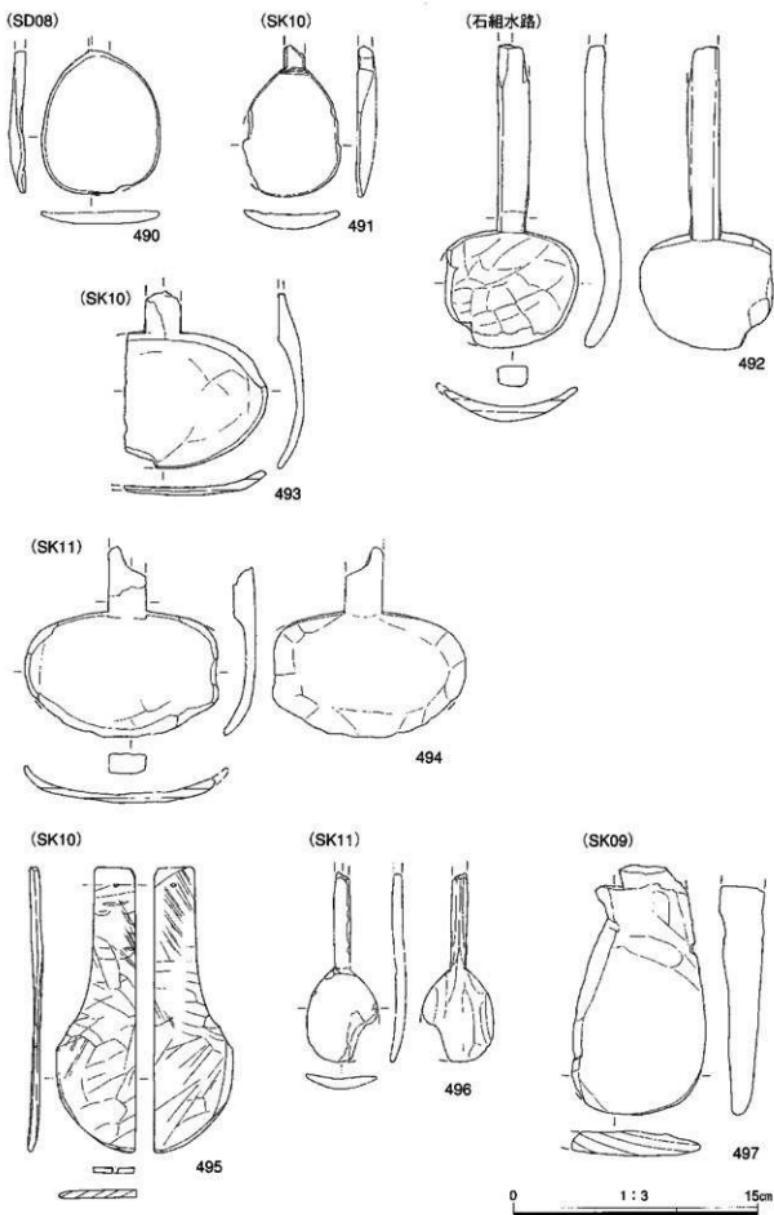
赤外線写真（下部）



第63図 木製品 木札 (9)

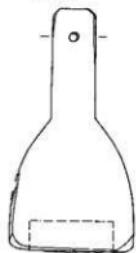


第64図 木製品 その他の木製品 (1)



第65図 木製品 その他の木製品（2）

(SK12)



□□

498

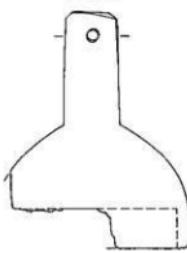
(SD08)



□

499

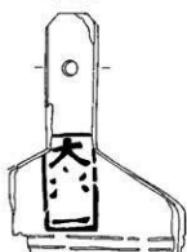
(SK11)



□□□

500

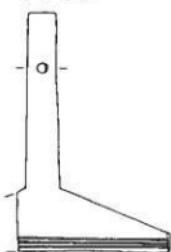
(SK09)



□□

501

(石組水路)



□□

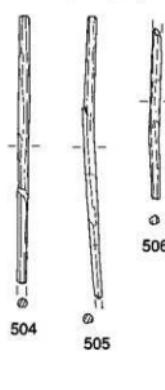
502

(SK11)



504

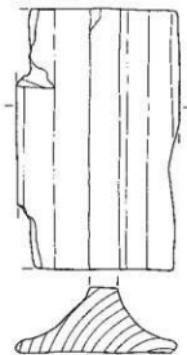
(SK04) (SK103)



506

504
505

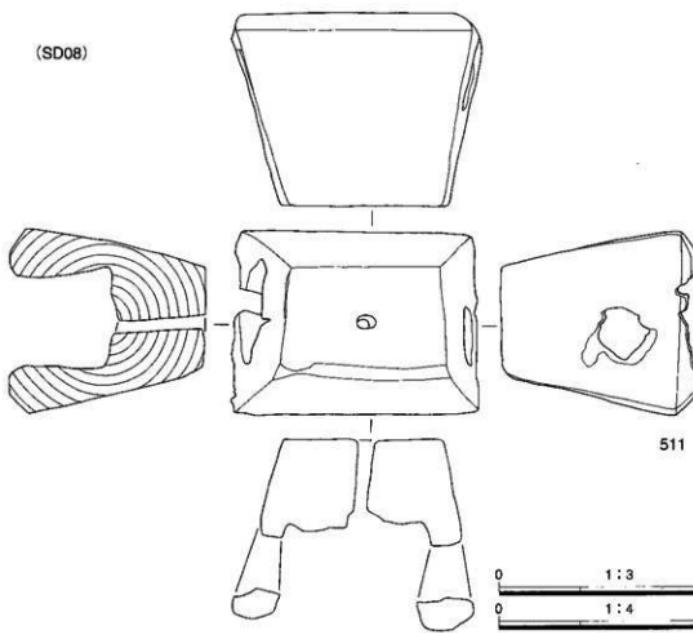
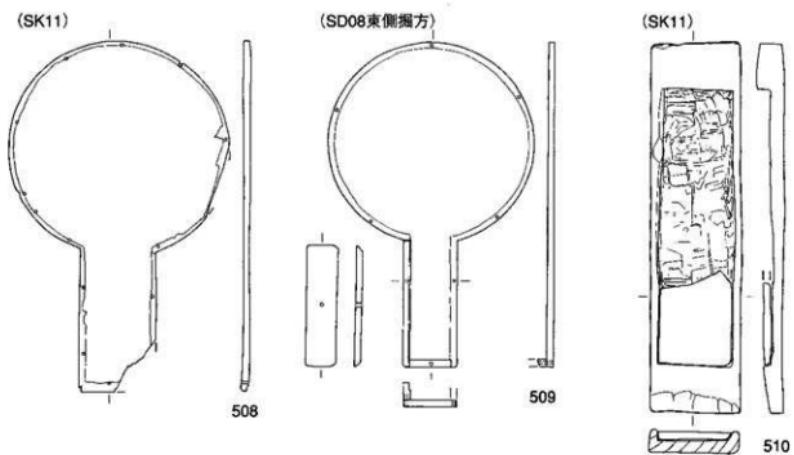
(SD08)



507

0 1 : 3 15cm

第66図 木製品 その他の木製品 (3)



第67図 木製品 その他の木製品 (4)

第VI章 自然科学分析

富山城跡における堆積物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

富山城跡は、神通川下流域右岸の沖積低地上に位置する。2005年に発行された国土地理院の土地条件図では、氾濫平野に分類されている。また、富山城跡の北側の県庁などが位置する範囲には旧河道が記載されており、明治時代まで神通川本流が流れていた。

平成17年度に行われた発掘調査では、近世および近代までの遺構・遺物が確認されている。確認された主な遺構は、井戸、土坑、石組み水路、溝などであり、遺物は、土坑から出土した鉄滓やゴミ穴から出土した陶磁器、下駄、漆椀などが確認されている。また、調査区内では、陶磁器を多量に含む包含層が検出され、その包含層の基底の跡跡により地形的な落ち込み（鞍部）が確認された。発掘調査所見では、この包含層を造成土であるとし、鞍部を埋めて平坦面を構築したと考えられている。

本報告では、上述した鞍部を埋積した包含層について、その特性を調べ、さらに調査区内で検出された溝の覆土との比較により、その由来を推定し、造成上であることの傍証を得ることとする。

2. 試 料

試料は、A-1工区で検出された溝SD01の覆土上の最下層1点とA-2工区で検出された落ち込み部を埋める土1点の計2点である。以下、文中ではそれぞれ溝覆土、落ち込み埋土とする。

発掘調査所見により、調査区内の基本層序は、上位より、表土、焼上を多量に含む戰災層、近代造構面、緑灰色シルトからなる最下層造構面、植物遺体（ビート）層、灰色粘質土からなる地山とされている。溝覆土の採取されたSD01は調査区内を東西に伸びており、他の造構との切り合い関係から、調査区内において最も古い時期の造構であるとされている。造構は上述基本層序の植物遺体層を掘り込んで構築されているが、その覆土は上述基本層序の最下層造構面を構成する堆積物と同様の層相とされている。

A-2工区で検出された落ち込み部は、表土の下位に認められた暗褐色シルト層の断面観察により確認されたものであり、南西に向けて地形が落ち込んでいるとされた。さらに周囲の発掘調査状況から、その地形は、北側石組み水路から西側搅乱部分にかけて半円形に終結する鞍部であり、そこへ暗褐色シルトからなる造成上により平坦面を構築したと考えられている。

3. 分析方法

ここでは、碎屑物の地質学的背景に由来する細砂質の重軽鉱物組成と堆積環境の指標となる珪藻化石の産状を分析し、さらには、碎屑物の物理的性質である粒径組成および土壤とみた場合の理化学的性質である炭素、窒素、リン酸、マンガンの各含有量を求める。これらの理化学性は、特に試料の黒色味に係わるものである。以下に各分析についてその処理手順を述べる。

(1) 重軽鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径

1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4 mm - 1/8 mmの砂分をボリタンクスチレン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物と軽鉱物をそれぞれ250粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とした。「その他」は軽鉱物中においても同様である。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および纖維束状のものとする。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍を行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、50個体以上の試料についてはプレパラート2枚検鏡する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺（2005）などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann（1990）に従った。

同定結果は、中心類（Centric diatoms）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縫溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms）と有縫溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms）に分けた。また、有縫溝類は、單縫溝類、双縫溝類、管縫溝類、翼管縫溝類、短縫溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に分け、貧塩性種については、はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率20%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、貧塩性種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種を参考とする。

(3) 粒度分析

粒度分析は碎屑性堆積物研究会（1983）の方法を参考に、砾・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はビベット法を行った。以下に処理手順を述べる。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤（4%カルゴン）を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ビベット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分（0.063mm>）、粘土画分（0.0039mm>）を10ml採取し、105°Cで24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率（質量%）を求める。ビベット

法終了後、懸濁液を $63\mu\text{m}$ 篩で水洗いする。 $63\mu\text{m}$ 篩残留物を 105°C で5時間熱乾後、1.0、0.5、0.25、 0.125mm φ篩であるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率（質量%）を求める。ビベット法およびふるい分けで求められる加積通過率（質量%）から粒径加積曲線を描き、Wentworth（1922）の粒径区分毎の質量を算出する。

（4）土壤理化分析

全炭素・全窒素はCNコーダー法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、ジチオナイトクエン酸可溶鉄、マンガンはDCB溶液抽出－原子吸光光度法でそれぞれ行った（土壤環境分析法編集委員会,1997;International Soil Reference and Information Center,1986）。以下に各項目の操作工程を示す。

a) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩であるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、 0.5mm 篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、 105°C で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

b) 全炭素・全窒素量

粉碎土試料 $500\sim1000\text{mg}$ を正確にはかり、サンブルボードに充填した後、CNコーダー（ヤナコ分析工業製）に挿入する。試料をキャリアガス（He）気流中で 950°C に加熱燃焼し、発生した燃焼ガスを純化させ、 CO_2 及び N_2 の組成にする。TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。これらの測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの全炭素量（C%）および全空素量（N%）を求める。また、全炭素量を全空素量で除し、C/N（炭素率）を算出する。

c) 全リン酸

粉碎土試料 1.00g をケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸（ HNO_3 ） 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ HClO_4 ） 20ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）を加えて分光光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（ $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）を求める。

d) ジチオナイトクエン酸可溶マンガン（Holmgren法）

粉碎土試料 0.50g にDCB抽出液 30ml を添加して16時間振とうする。振とう後、 0.4% 高分子凝集剤を2滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計によりマンガンの濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのマンガン（ $\text{MnO}\%$ ）の含量をそれぞれ求める。

4. 結 果

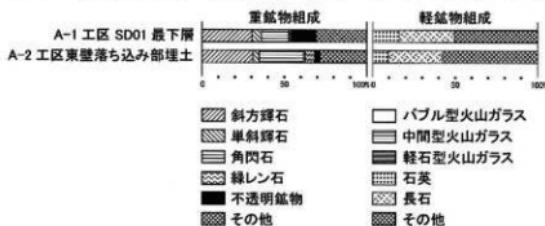
（1）重鉱物分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、2点の試料ともに斜方輝石が最も多く、 30% 程度を占め、少量の單斜輝石を伴うが、溝覆土では斜方輝石に次いで角閃石と不透明鉱物が互いに同量程度で多く含まれ、落ち込み埋土は斜方輝石に次いで角閃石が斜方輝石と同量程度に多く含まれ、少量の緑レン石と不透明鉱物を伴うという組成を示す。

軽鉱物組成では、2点ともに風化粒である「その他」が多く、それを除けば長石が多く、少量の石英を含む。なお、石英の量比は、溝覆土の方が若干多い。

第13表 重軽鉱物分析結果

試料名	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	磁化角閃石	黑雲母	ザクロ石	隕石レーン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
A-1工区SD01最下層	76	14	42	3	0	0	0	38	77	250	0	2	1	41	83	123	250
A-2工区東壁落ち込み部埋土	77	10	67	3	1	2	14	8	68	250	0	0	1	24	81	144	250



第68図 重軽鉱物組成

(2) 珪藻分析

結果を表2、図2に示す。何れの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、約60%と化石の保存状態が比較的に良い。産出分類群数は、合計で29属62分類群である。

2点の試料はともに、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性的ある陸生珪藻が多産することで特徴付けられた。このうち溝覆土は陸生珪藻が全体の約70%と優占する。その主な種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群のDiadesmis contenta var. bicepsが25%と優占し、同じく陸生珪藻A群のLuticola mutica、未区分陸生珪藻のPinnularia schoenfelderi、陸生珪藻B群のPinnularia subcapitata等を伴う。淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）は、約25%産出する。その主な種は、流水性で中～下流性河川指標群のReimeria sinuata、流水不定性で好汚濁性のNitzschia amphibia var. amphibia等が産出する。

落ち込み埋土は、陸生珪藻が全体の約55%を占め、これに付随して水生珪藻が約25%、淡水～汽水生種が約15%産出する。陸生珪藻は、A群のAmphora montanaが約40%と優占し、同じく陸生珪藻A群のDiadesmis contenta var. biceps、Hantzschia amphioxys等を伴う。淡水～汽水生種は、塩分濃度の薄い汽水域や有機汚濁の進んだ腐水域にも耐性のあるNavicula venetaが約10%産出し、好汚濁性のNitzschia palea、Sellaphora seminulum、Nitzschia amphibia var. amphibia等が産出する。

(3) 粒度分析

粒度分析結果を表3、Folk & Ward (1957)による評価を総合して結果を表4に示す。また、粒径加積曲線を図3に示す。2点の試料は、ともに平均粒径はシルトであるが、溝覆土に比べると落ち込み埋土は、砂の含有量が明らかに多い。このことは、粒径加積曲線の形にも表れている。落ち込み埋土では、シルトから極細砂に向かう範囲で傾きが緩くなった後、極細砂径から粗砂に

向かって再び傾斜が急になっている。一方、溝覆土では、極細砂から細砂の範囲でわずかに傾きが急になっているが、落ち込み埋土の曲線とは異なっている。

また、Folk & Ward (1957) による評価では、中央値や平均値に有意な違いが認められ、歪度、尖度で異なる評価となっている。

(4) 土壤理化分析

結果を表5に示す。炭素含量は、溝覆土が約2%、落ち込み埋土が約1%であり、いずれも特に多いという量ではない。ただし、C/N比をみると溝覆土は16を示し、落ち込み埋土は12である。日本における土壤の一般的なC/N比は8~12とされていることから、溝覆土は有機物の分解がやや不良であり、落ち込み埋土は有機物の分解度からいえば一般的な土壤と同様である。

第14表 粒度分析結果

試料名	粒径区分	砂					泥	
		2.00mm< 2.00~ 1.00mm	粗粒砂 1.00~ 0.50mm	中粒砂 0.50~ 0.25mm	細粒砂 0.25~ 0.125mm	極細粒砂 0.125~ 0.063mm	シルト 0.063~ 0.0039mm	粘土 0.0039mm>
A-1工区SD01 最下層	0.1	0.3	1.2	2.7	7.8	12.0	49.4	26.5
A-2工区東壁 落ち込み部埋土	2.6	2.6	8.2	13.4	15.9	12.3	30.4	14.6

注) 単位は重量%で表示。

第15表 粒度組成解析結果

試料名	Md(中央値)	Mz(平均値)	Mo(最高値)	Sk(歪度)	σ (分散度)	Kg(尖度)
A-1工区SD01 最下層	7.50 ϕ (0.006mm)	7.03 ϕ (0.008mm)	シルト	7.64 ϕ (0.005mm)	-0.20 負の歪み	2.49 非常に悪い
A-2工区東壁 落ち込み部埋土	4.83 ϕ (0.035mm)	4.83 ϕ (0.035mm)	シルト	7.64 ϕ (0.005mm)	0.05 ほぼ対称	3.03 非常に悪い

注) 評価はFolk & Ward (1957) による

第16表 土壤理化分析結果

試料名	土色	全炭素 C (%)	全窒素 N (%)	C/N	全リン酸 P2O5 (mg/g)	DCB可溶 MnO (%)
A-1工区SD01 最下層	10YR3/2 黒褐色	1.92	0.12	16	2.37	0.02
A-2工区東壁 落ち込み部埋土	10YR3/1 黒褐色	1.07	0.09	12	7.43	0.05

注) (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

リン酸含量は、溝覆土が約2P₂O₅mg/gであるのに對して、落ち込み埋土は約7P₂O₅mg/gを示す。土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen, 1983; Bolt-Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 大野ほか, 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P₂O₅mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P₂O₅mg/g(川崎ほか, 1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0P₂O₅mg/gを越える場合が多い。したがって、落ち込み埋土のリン酸含量は、天然賦存量を大きく超える値である。

マンガンの含有量は、溝覆土は0.02%、落ち込み埋土は0.05%であり、いずれも通常の土壤に見られる値である。

5. 考 察

(1) 溝覆土について

斜方輝石と角閃石を主体とする重鉱物組成は、富山平野の背後に分布する山地の地質を反映していると考えられる。富山県（1992）を参照すれば、おそらく、斜方輝石は山地の外縁を構成する新第三紀の安山岩質溶岩や凝灰岩などに由来し、角閃石はその背後の山地を構成する白亜紀の花崗岩類に由来すると推定される。また、単斜輝石や緑レン石も上述の新第三紀の地質に由来し、石英はおもに花崗岩類に由来、さらに、不透明鉱物および長石は新第三紀の地質と花崗岩類の両者に由来する。

したがって、溝覆土を構成する碎屑物は神通川によってもたらされた氾濫堆積物に由来すると考えられる。中～下流性河川指標種群の珪藻化石が含まれることは、そのことを支持する。また、陸生珪藻を多産することや黒色味の由来はマンガンではなく主に炭素（腐植）であることから、溝覆土の由来する氾濫堆積物は土壤化していたことも推定される。土壤化した氾濫堆積物は、溝周囲および調査区も含めた周辺域にも分布していることから、溝覆土は、遺構周囲からの碎屑物の流れ込みにより形成されたと考えられる。なお、溝が人為による遺構か自然流路かということについては、溝覆土の分析からは明らかにすることは難しい。遺構の広がりや方向等も含めた総合的な解析が必要であろう。

(2) 落ち込み埋土について

斜方輝石と角閃石を主体とする重鉱物組成から、溝覆土の項で述べた同様の理由により、落ち込み埋土は神通川による氾濫堆積物に由来すると考えられる。また、陸生珪藻の多産と炭素（腐植）に由来する黒色味を帯びることから、土壤化した氾濫堆積物に由来すると考えられる。

さらに、落ち込み埋土の天然賦存量を大きく超えるリン酸含量は、落ち込み埋土の由来する堆積物そのものあるいは落ち込み埋土堆積時あるいは堆積後に、リン酸含量を富化させるような要因（例えば植物や動物遺体あるいは排泄物等の混入など）があったことを示唆する。珪藻化石の産状において、好汚濁性種を伴うこととこのことと関連する可能性がある。なお、このリン酸含量を付加させるような要因には、人為が関わった可能性のあることもあげられる。これらのこととは、落ち込み埋土が造成土であることと矛盾はしない。